

水明

創刊號

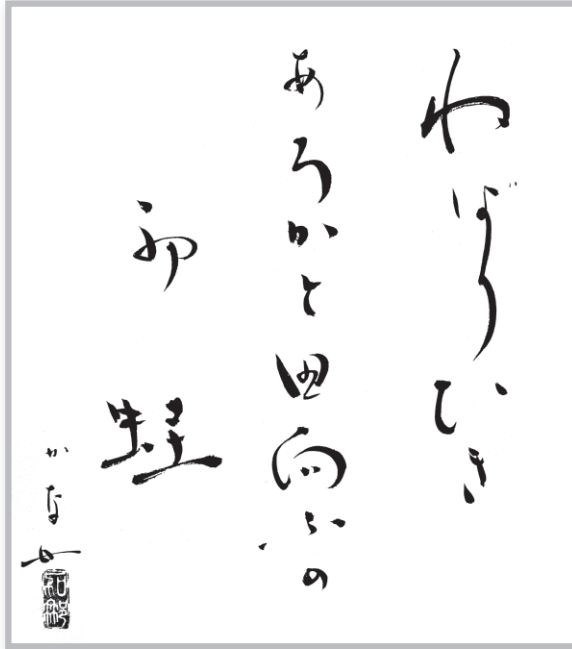
昭和九年八月二十九日 印刷納本  
昭和九年九月一日發行（每月一日發行）

第一卷 第一號



水明

ねばりひきあるかと田向ふの初蛙 長谷川かな女



福井県若狭町・瓜割親水公園にある長谷川かな女句碑に彫られた俳句で、昔この地方の冬の家内作業の「ねばりひき」（屑米を石臼で碾いて粉にする）を題材にした挨拶句である。石臼を廻す娘を、恋する青年がやって来て手伝う。「圓ねばりひきでもあるかと思て好きな煙草も吞まずに来た 因好きな煙草も吞まんとかいな」。二人が掛合いで唄う「ねばりひき唄」を、大戦後訪若したかな女が聴いて感激したと伝えられている。

（鬼之介・註）

# 水 明

第1079・1080号

---

— 華の一句 —

片膝立てて銃口に挿すカーネーション

網野月を

フランスの小説「三銃士」に登場するアラミスが、銃口にカーネーションを挿し、片膝立てて恭しく王妃に捧げる光景を思い描いてしまった。カーネーションを扱う行動の意外性が本句の要である。どうすればこんな格好良い俳句が書けるのだろうか。

(鬼之介・推薦)

# 水明

令和 2 年  
8・9 月号

## ◆水明創刊九十周年記念号

記念号刊行にあたって

山本鬼之介

6

「水明創刊90周年」全国大会について

山本鬼之介

8

## ◆水明創刊九十周年特別寄稿

「円融自在」の境地へ

網野 月を

12

かな女の一句鑑賞

由良ゆら女 高島 寛治 保坂 翔太

野田 静香 日高 道を 河野はるみ

渋谷さいち 梅澤 佐江 井口 俊晴

曲淵 徹雄 越田 栄子 加藤でん治

近藤 徹平 正木 萬蝶 原田 想子

大塚 茂子 青木 鶴城 染谷 正信

神田 治江

14

## ◆水明創刊九十周年特別寄稿

悠久の旅（水明創刊号・發刊の言葉より）

澤本 知水

24

澤本知水と医者様そして坊や

山本鬼之介

25



随想

島津 初花 山中みどり 青木 鶴城  
 網野 月を 石山かつ子 大村 節代  
 五明 昇 境 延昭 日高 道を  
 保坂 翔太 星野 和葉 茂木 和子  
 山中 順子

◆九十周年記念応募作品発表表

俳句

境 延昭

42

正賞 「四季を守る」

井口 俊晴

46

準賞 「音の狩人」

近藤 徹平

48

準賞 「時を照らす」

保坂 翔太

50

エッセイ

準賞 「無 二」

青木 鶴城

52

◆水明年譜

五明 昇

54

◆歴代受賞者一覧

79

華の一句

祝 (作品)

山本鬼之介

10

近辺散策 (近詠)

鈴木康世

86

梅雨の晴 (近詠)

石山かつ子

87

冠木門 (主宰作品の鑑賞)

境延昭

88

硯箱 (季音月評)

井口俊晴

90

季音「雪」 (同人作品)

栢尾さく子	菊池ひろこ
五明昇	ほか

92

季音「月」 (同人作品)

十倉和子	森本早苗
柚木治子	ほか

99

季音「花」 (同人作品)

梅澤佐江	松井由紀子
近藤徹平	ほか

104

鼓笛集 (同人作品)・私の一句・発展基金御礼

現代俳句鑑賞

網野月を

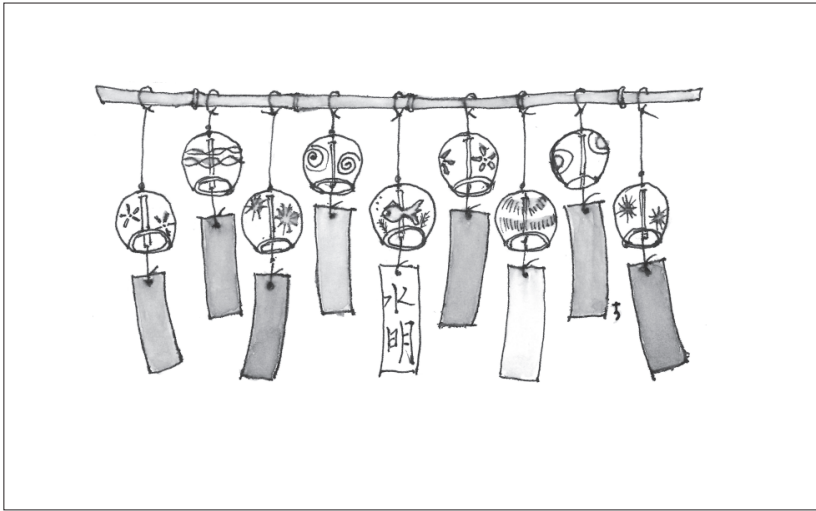
110

◎水明全国大会

兼題入選句

112

1



# 水明集

日高 野田  
山口 道を  
韶子 静香  
ほか

水明集作品評

山本鬼之介

140

水 琴 窟 (水明集六月号鑑賞)

池田 雅夫

144

俳誌望見

梅澤 佐江

108

句集喝采

近藤 徹平

109

水明夏行

境

延昭・五明 昇

150

水明夏行講評

山本鬼之介

152

水明の記事他誌転載

156

水明例会報・各地句会報

158

新珠賞作品募集

155

水明塾参加募集のお知らせ

149

風 声

165

後 記

166

題字・表紙・長谷川かな女 カット・福田千春

128

# 水明創刊九十周年記念号刊行に際しての所感

主宰 山 本 鬼之介

「水明」は、令和二年九月をもって、創刊九十周年を迎え、会員一同が待望の創刊百周年まであと十年にこぎ着けた。前回の創刊八十五周年の時には、まだ大分先のことだと思っていた百周年であるが、何故か今回はそれほど遠く感じない。

創刊九十周年を待ち望んでおられた星野光二前主宰が黄泉へ旅立たれ、第五代主宰として大きな節目の行事の采配を取ることになったが、一昨年十一月に主宰を受け継いでから今日まで、結社内の多事にわたって試練の連続であった。

水明俳句会の運営の正常化については、常任運営幹事の拡充と適材者の人選により、先ず運営資金の危機状態を脱し、水明誌の月刊発行を継続することが出来た。これまでに主宰として日常心掛けてきたことは、自分の原稿を可及的速やかに提出して編集部諸氏の労力の負担を軽減し、発行日を早くすることであった。また、主宰としての思考を明確に示すことで、会の運営を停滞させず、スピード感をもって運ぶことであった。

創刊九十周年の事業の一つとして、念願の水明俳句会ホームページが昨年五月に立ち上がった。そして、月を追う毎に完成度を深め、毎月一回（月によっては複数回）必ず



更新して内外から注目されている。

今年の早春に勃発した新型コロナウイルス感染症の深刻な問題がますます激化している状況下で、編集部の皆さんが弛まぬ努力を続けている。コロナ問題で全国大会兼題句の発表がずれ込み、その分の校正も重なって大忙しである。原稿を届ける度にその現場を目の当たりにし、心の中で深く頭を下げている。

この度、八・九月号を合併して創刊九十周年記念号としたが、なかなか内容が濃い。主宰と重鎮作家二名、常任運営幹事十一名勢揃いの記念エッセイや、水明創刊以降の年譜と全受賞者一覧など、新旧の会員が共に興味を示す内容だと思う。そして、ここ一番の目玉企画が、「かな女俳句の解説」と、十九名の会員による「かな女俳句一句鑑賞」である。この両企画は、五代目主宰として筆者が提唱した「水明の指針Ⅱ長谷川かな女への回帰」を具象化したものであり、大変嬉しく受け止めている。

待ちに待った折角の記念行事の進行が、憎きコロナのために妨げられているが、この初めての苦難を皆の知恵と力を結集して乗り越え、想い出話として語り合える日がきつと来ると信じている。

創刊者であり、初代主宰として四十年間水明を守り抜いた長谷川かな女に倣い、各位が個性を活かした感性豊かな俳句づくりを心掛け、百周年への礎にしてもらいたい。

水明俳句会 会員 各位

水 明 俳 句 会  
主宰 山本鬼之介

## 「水明創刊90周年記念」全国大会・祝賀会 日程についてのお知らせ

水明7月号に掲載の記事の通り、7月14日の常任幹事会において方針を定め、ロイヤルパインズホテル浦和の責任者と話し合いの結果、「水明創刊90周年記念」全国大会・祝賀会の開催について下記の通り決定しましたのでお知らせいたします。

### 【全国大会】 令和2年11月9日（月）

ロイヤルパインズホテル浦和4階「ロイヤルプリンセスA・B・C」3室を繋げ、1テーブル1人掛けにして十分に間隔を保ち安全を期す。

### 【祝賀会】 無期延期とする。

新型コロナウイルス感染状況の好転をもって、改めて開催時期を検討し決定する。

### 全国大会開催要領

〔期 日〕 令和2年11月9日（月）13時～16時

※受付12時より

〔会 場〕 ロイヤルパインズホテル浦和4階  
「ロイヤルプリンセス」

〔会 費〕 6,000円

〔申し込〕 本記念号巻末に添付の申込書で、（既に申込み済の方も改めて）申し込んでください。

## 水明俳句会 会員 各位

水 明 俳 句 会  
主宰 山本鬼之介

今年は遅い梅雨明けから日を置かず立秋を迎え、厳しい残暑が続きましたが、皆様にはお変わりなくお過ごしでしょうかお見舞い申し上げます。

私の方は、幸いなことに新型コロナウイルスに感染することもなく、日々忙しく水明俳句会や外部の俳句関連業務に励んでおりますのでご安心ください。

さて今年、待ち遠しかった〔水明創刊 90 周年〕の偉大な節目の年を迎え、6月29日（月）に、記念全国大会と祝賀会を盛大に挙行するはずでしたが、ご承知の通り、コロナ災禍の脅威が日増しに増大する過程において、右ページのお知らせの通り、計画変更について苦渋の決定をした次第です。

11月9日（月）、万全な安全対策を講じた上で記念全国大会を開催し、久しぶりに会員一同が顔を揃え、再会を喜び合いたいと思っています。そして、お待たせしていた各賞の受賞者や新同人の方々を壇上に迎え、受賞者には晴れの賞状を、新同人には委嘱状をお渡します。私は、その時のことを思い描いて、今から胸を高鳴らせています。

来賓をお招きしての記念祝賀会を同時に開催することは、種々の観点から考えて無理であると判断しました。コロナ災禍の問題が何時解決するのか分からぬ現時点において、延期の期日は決められず、無期延期としました。今後好転への兆しが見えた段階で検討したいと思っています。

とにかく、90周年記念祝賀会は何時か必ず開催します。

それでは、皆様お元気で、11月9日（月）にお会いしましょう!!

---

---

# 祝

山本 鬼之介

水神の在す狭霧の姥淵

明月や巫女舞の鈴杜に染む

創業社主の銅像攻むる赤蜻蛉

---

刊を祝ぐ友の句集よ涼新たに  
九九を復誦する子励ます法師蟬  
十萬億土聞くだに遠し酔芙蓉  
周到な避難訓練けらつつき  
年頃のかな女の写真秋の昼

## 「円融自在」の境地へ

網野 月を

長谷川かな女は1887年10月22日、東京府日本橋区本石町（現、中央区）生まれである。本名は自身のエッセイに拠ると、本籍には「カナ」と表記されていたようである<sup>(i)</sup>。1909年に結婚する。結婚相手は、東京帝国大学薬学科卒でかな女の英語の家庭教師をしていた富田諧三、のちの長谷川零余子である。かな女は、夫零余子の友人の勧めで作句しはじめ、1910年には既に「毎日俳壇」に初入選し、「ホトトギス」へも投句するようになる。1913年には高浜虚子が俳句の世界へ女性参加を企図して始めた「婦人十句集」の回覧、婦人俳句会の幹事役を務めるようになる。文字通り「ホトトギス」の女性俳人の中心人物であったが1921年に「ホトトギス」を離脱した零余子が「枯野」を創刊すると、かな女も共に「枯野」へ移籍した。1928年に夫零余子を喪い、さらに自宅を全焼するという悲運に遭った。

「枯野」は「むかご」に改名して継続されるが、共選の形式をとった。つまり共同主宰のような形で、のちに分裂を余

儀なくされることとなる。1930年に「水明」を創刊し主宰となった。結社創立に先んじる第一句集『龍膽』の序文には「俳句のなかに生きて死んで」と決意を書き込んでいて、これより後は専業俳人としての生涯を送ることとなった。強靱な芯のある作品群は聡明さを秘めていて、日常にテーマを取材したものが多く平明で繊細な句作りが、その特徴と言えるだろう。ただその中には「女の句とは思へない程力強い句」と虚子に言わしめた句も在る。坂本宮尾は「初期には「かな」「けり」止めの渋滞のない安定した詠法が多くみられるが、戦後は表現に柔軟さを増し、円熟の度を深めた」と評している<sup>(ii)</sup>。

かな女は生涯に主な句集として六冊をものしている。『龍膽』1929年刊、『雨月』1939年刊、『胡笛』1955年刊、『川の灯』1963年刊、『定本かな女句集』1964年刊、『牟良佐伎（むらさき）』1969年刊の六冊である。最後の句集となった『牟良佐伎』<sup>(iii)</sup>の収録句から「表現に柔軟さを増し、円熟の度を深めた」句の幾つかを抽出してみた。『牟良佐伎』といえはかな女の代表句の一つ

面白くて傘をさすならげんげん野

が掲載されている句集である<sup>(iv)</sup>。傘寿のお祝いに詠んだ句である。上六の「面白くて」が圧巻でこれを超える句作は未だにない。句集題名の『牟良佐伎』については「あとがき」にある通りだが、この句からのイメージに繋がると筆者は考え

ている。

句集は吉屋信子の序文の後に、昭和三十八年(134句)、昭和三十九年(125句)、昭和四十年(116句)、昭和四十一年(94句)、昭和四十二年(116句)、昭和四十三年(109句)、あとがき、というように五年間の作句を年毎に編年の編集がされている。

焚火明かりに押しあげし碑ぞ小春に立つ

冷たき碑あたたため咲けり白山茶花

炭俵 届き極月朝を迎へけり

磯馴松の実を青くしぬ冬の雨

冬の雨火花の音すセーター着て

いずれも昭和三十八年の章に入っている。日常にテーマを求めているように読めるが、昭和四十二年の章になるとダイレクトな感情表現が躊躇なく現れる。

雛壇のなき虚しさを櫻草一と鉢

山吹に夢をもらへり猥にはやらぬ

足が冷たくてかなしさくらんぼ

死を急がず曼殊沙華見れども見れども

老の戀もあるものよ丘の曼殊沙華

など散見される。椿はお好きな花であったらしく

紅き椿の實を拾ひ溜め女となる

契れる人の数だけ拾ふ椿の實

がある。前述の「表現の柔軟さ」とは何を指しているのだろうか？その要素の一面に破調があるように考えられる。

各章の破調の句は、それぞれ昭和三十八年の章は134句中57句、昭和三十九年の章は125句中61句、昭和四十一年の章は116句中65句、昭和四十一年の章は94句中50句、昭和四十二年の章は116句中58句、昭和四十三年の章は109句中52句ある。合計で694句中343句が破調の態になっている。詠句のテーマの自由さが、定型には収まりきらないのである。五七五の形からはみ出している情感が独自なリズム感を演出しているのであって、読み手は違和感を感じない。むしろ受け容れ易いであろう。「牟良佐伎」の帯には大野林火による「牟良佐伎を推す」と題される帯が付されている<sup>(v)</sup>。「作風ますます円融自在、老いのゆたかさを示して尽きるところがない。」とある。この「円融自在」は、かの女の晩年における独自なリズム感を指していると解しても間違いではないだろう。

(i) 長谷川かな女著、『小雪』、水明発行所、1959年。

(ii) 坂本宮尾著、『長谷川かな女』、『現代俳句大事典』、三省堂、2005年、447～448頁。

(iii) 長谷川かな女著、『牟良佐伎』、東京美術、1969年。

(iv) 前掲書、166頁。また『長谷川かな女全集』(星野光二編、東京四季出版、2013年刊)の巻末の「長谷川かな女年譜」の昭和四十一年六月には「埼玉会館こけら落としに、小ホールで、「かな女傘寿祝賀会」を催し、三笠宮殿下をお迎えする。講演は楠本憲吉氏。とある。(なお年譜中の昭和四十四年の記載「八十二歳にて没」は「八十一歳」に要訂正)

(v) 前掲書、「帯」。

## 長谷川かな女句鑑賞

本欄は「水明創刊九十周年特別企画」として長谷川かな女の創作の世界から幾つかの句を会員が鑑賞するものです。

掌中の／由良ゆら女、湯がへりを／高島寛治、油  
団しき／保坂翔太／以上三句は『龍膽』以前に発表

時鳥／野田静香、羽子板の／日高道を、願ひ事／  
河野はるみ、蘘苳に／渋谷きいち、新蕎麦の／梅澤  
佐江、書齋出ぬ／井口俊晴、この辺り／曲淵徹雄／  
以上七句は『龍膽』収録

蝶のやうに／越田栄子、なき母を／加藤でん治、  
拾ひたる／近藤徹平／以上三句は『雨月』収録

西鶴の／正木萬蝶、ねばりひき／原田想子／以上  
二句は『胡笛』収録

竜胆枯れ／大塚茂子、北風に／青木鶴城、帯織る  
や／染谷正信／以上三句は『川の灯』収録

面白くて／神田治江／『牟良佐伎』収録

## ◇掌中の珠とまろめて蓬餅

由良ゆら女

春一番一面に萌え出す蓬、やわらかな蓬のみどりを見ると私は直ぐに啄みたくなり虫か小鳥でないことを残念に思うが、人も食に医療にその恩恵に与つてきた。

私は掲出句がどの句集にあるか知るべく「かな女全集」を繙いたがなかなか分らずお陰様で先生の御句を熟読する好機となった。お人柄のごとく素直で大らかで巧まぬ故の面白さ強さを実感、学ばせていただいた。「雨月」に蓬餅の句で（小道具の蛇ほど青し蓬餅）があるが既成概念では作れぬ句。五年程前京都四条の何必館で廬山人の大きな陶の鉢の上に「芸術や文芸は決して作意を持たず一刻一刻生れるもの」という氏の書が掲げられており深く同感したが、かな女先生の御句もあれこれ予断なく己の感覚を自由に率直に詠まれることに既成概念を超えた新しさが生まれると思う。

掲出の蓬餅の御句。ご自分で摘まれた大地の命を大切に大切に丸めておられる。何事にも真摯に対されるお姿が見える。素朴な蓬餅に（掌中の珠）の措辞。お子様のお孫様の薫様は勿論、ご自分の産み育てられた「水明」への思いが自然に込められたものと思う。今私もその一分子として先生の御掌の内にある。この蓬餅が今再び新しい力を得てますます丸く大きくなることを願うばかりである。またかな女先生の龐大な随想は実に面白く、水明の歴史であり宝である。改めて纏めて下さった御苦労に感謝の念を捧げたい。



## ◇湯がへりを東菊買って行く妓かな

高島 寛治

あまねく知られている事ではあるが、かな女はまだ江戸情緒が色濃く残る明治二十年、日本橋本石町（現日本銀行の傍）で生まれ、同年すぐ隣りの川瀬石町（現日本橋高島屋の裏手辺り）で二十歳まで多感な青春時代を過ごした。それ故、粋な日本橋の面影を詠んだ句も多く見られる。日本髪をこよなく愛し、晩年に至るまで下町気質のお洒落を通したという。又若い時から芝居が好きで、明治三十年代後半（かな女十代後半の頃）日本橋の中洲の真砂座（現在は真砂座跡を示す石文がマンシヨン敷地の植込みに設置されている）に足繁く通ったこと等が随筆「ゆきき」の中にも書かれている。

さて本句、作句の年代は定かではないが、晩春の下町の麗らかな午後、湯の帰りの若き芸妓（芸子）が楚楚とした風情の東菊を買い求め、胸にだき抱えてゆく姿を眺めるかな女、戦前の下町の風情を感じさせる如何にもかな女らしい句である。東菊はキク科の多年草、東日本に多い事からこの名がついたという。湯がえりという下町の風情、情景の中で芸妓が晩春の花の東菊を胸に抱えてゆく様が目に浮かぶ。

さらに本句での助詞の使い方の巧妙さが際立つ。普通の表現では「湯がへりに」となるところを「湯がへりを」と詠んだところがかな女らしい表現である。東菊を胸に抱えて、湯の帰りをゆく若き芸妓を目で追うかな女の心情と彼女らに対する深い愛情が滲み出て、本句の情感をさらに豊かに表現している。

## ◇油団しき雄猫大きく飼はれるる

保坂 翔太

季語「油団」は、江戸時代から伝わる日本伝統の夏の敷物です。大量の和紙を厚く貼り合わせ、油または漆をひいたもので焦げ茶色の渋い色をしています。暑い季節に長時間座つていても、ひんやりとした心地を保つことができるそうです。電化製品のクーラーが普及している現在では、ほとんど使用されていませんが、今も伝統技術を引き継いで作っているところがあります。価格は一畳十二万円以上もするそうです。

大正十年、かな女は、夫である長谷川零余子が「枯野」を創刊したことに伴い、高浜虚子の「ホトトギス」を離れませんが、かな女の句は、虚子にも「柱影映りもぞする油団かな」という句があるので、「ホトトギス」時代に詠んだ句ではないかと想像します。そこは虚子の家だったかも知れません。昔も高価であったと思われる油団、猫専用の油団に一匹の雄猫が手足を大きく伸ばし、涼しげに寝そべっているのです。飼い主の猫に対する心根とともに猫の満足げな様子が目に見えるようです。

かな女は、大正二年に虚子が始めた婦人俳句会で頭角を現すようになります。ともに活躍していた杉田久女は、昭和十一年に「ホトトギス」の同人を除名されています。かつて競い合ったかな女は、「ホトトギス」を離れた後も婦人俳句会のリーダー格として依然活躍を続けてのを見て、「虚子ざらひかな女嫌ひのひとへ帯」と詠んだのではないかと言われており、女性同士の葛藤を連想することができま

## ◇時鳥女はものゝ文秘めて

野田 静香

女性はなぜか、昔の恋文をいつまでも捨てられないのです。かな女先生も御多分に洩れず、抽斗の奥の文箱に仕舞っておられたのでしょうか。

ある時、捜し物をしていたら、偶然に忘れていた昔の恋文を見付けました。懐かしさでいっぱいです。胸が高鳴ります。その頃の想い出が走馬灯のように浮かんできます。その頃とは、上語に時鳥があるように、「ホトトギス」時代を表していると思われまます。そして時鳥は夜も鳴き、人恋しさが募ります。

藻の花にうすうすの恋なりしかな

火の燃ゆる石を抱きぬ秋の夢

という句もあります。控え目なかな女先生は、燃えるような恋に胸を焦がします。恋のお相手は、大勢の女性から慕われる素敵な男性なのでしょう。

止め処ない想い出に浸っていると、何処からか時鳥の鳴き声が聞こえてきました。ふっと我に帰ります。又恋文を元の場所にそっと仕舞い込みます。

さて、捜し物は何でしたっけ？

## ◇羽子板の重きが嬉し突かで立つ

日高 道

この句は、かな女自身が「年の暮れになると或る家から毎年羽子板を贈って下さる事になってゐた。(中略) 其の中の一つを抱へて、そつと門の前に立つて、人が羽子を突くのを眺めてゐる。夫れだけでよかつたのだ。」と解説し、彼女の少女時代の淡い思い出を基に、そのころの下町の面影を見事に映し出すとともに、素直な幼い少女の心の高ぶりを表現して、師の虚子に「女でなければ感じ得ない情緒の句」と称賛された、かな女初期の代表作とされている。

私なりに少し鑑賞を加えると、この句は、結婚し俳句や夫との生活など様々な苦楽を経験し始めた、かな女二十七歳の時に、幼い日の楽しかつた思い出を詠んだ句です。

正月遊びの定番の羽根つき、小さなかな女も一緒に突きたかつたに違いありません。家の床の間に飾られていた飾り羽子板の一つを持ち出し、家の前の子供たちの羽根つきを眺めている。「夫れだけでよかつたのだ」と断定調に言い切っている言葉の裏に、かな女の心中が察せられる。

## ◇願ひ事なくて手古奈の秋淋し

河野はるみ

手古奈とは？願ひ事が無いとは？兎に角真間に行かねば始  
まらぬと、電車で飛び乗り「国府台」で下車、川沿いの道を  
暫く行くと土地の方らしいお婆さんに出合い「手兒奈様です  
ねっ」と言って一緒に歩いて下さった。まもなく朱塗の欄  
干が目に入って来た。三・四歩の真間の継橋を渡ると目の前  
には真間山・ここですよっと言われ右手には大きな石碑に  
「手兒奈霊堂」と刻まれてあった。門を入り御堂へと向かっ  
た。現在は安産・育児の神様として多くの人が詣でるとあつ  
た。その昔葛飾郡真間に手兒奈という世にも稀な美しい娘が  
おり多くの男に言い寄られ一人を選ぶ事が出来ず煩悶して投  
身。将又、手兒奈は国造の娘でその美貌を請われ、ある国  
の国造の息子に嫁したが親同士の不和から海に流され、漂着  
したのが故郷の真間の浦辺であった。その地に祠を建てたと  
される。

山部赤人・高橋虫麻呂が悼んで詠んだ歌が真間顕彰碑とし  
て立ててある。かな女先生三十歳（大正五年の秋）の時訪れ  
このお句を詠まれた。御堂の前に手を合わされた時、あまり  
にも儚く悲しい伝説の手兒奈の霊に願ひ事なくて、いや願  
ひ事など出来なかつたのではないだろうか。手兒奈を手古奈  
としたのも先生のこだわりでは。伝説の海へと通じる川の近  
くにある祠、秋の日の川風が少しばかり芒を揺らしなご一層  
秋淋しと慕つたのではないだろうか。秋にもう一度訪れて、  
このお句を口ずさんでみたい。

## ◇藁苞に寒鮎生かし送りけり

渋谷きいち

この句の鑑賞依頼が私のもとへ届きました。少々荷が重い  
と思いましたが特別企画とのこと、私なりにしっかりと詠んで  
みました。

まず藁苞と言うと納豆を思い浮かべてしまいますが、昭和  
の初めまで麦藁を束ねて物を包み土産物や贈り物用として大  
変重宝したと聞きます。特に生きた魚を送るには当時として  
は最適な方法ではなかったかと思えます。今ならさしずめお  
洒落なラッピングでしょうか？

季語の寒鮎は冬の寒さで水温が下がると泥の中へ潜ってし  
まいますが、日中暖かくなると泳ぎまわります。この頃の鮎  
は癖がなく、脂がのつて栄養価が高く滋養強壯、疲労回復に  
大変美味で珍重されております。

かな女先生はこの生きた寒鮎をおそらく病み上がりか、妊  
婦さんのような方の健康を気遣いお送りしたに違いありませ  
ん。送られた方は甘露煮か煮付で大変美味しく、有り難く頂  
いたことでしょう。

この一句、女性俳句の草創期に多くの女性俳人を束ね、そ  
の地位を確立した情熱家と聞けば、台所で寒鮎を前にして、  
割烹着姿で奮闘する強くて、優しい姿が目には浮びます。

## ◇新蕎麦の袋を縫ひぬ赤き糸

梅澤 佐江

現代の蕎麦粉は湿気を調整する為に紙の袋に入れてある。その袋の口を閉じてあるのが赤と白の糸である。しっかりと縫い込まれているが、赤い糸を引くとその縫い目がさつと解けるようになっていく。中味が新蕎麦ともなればその赤い糸さえ特別なものに見えるであろう。

しかし、この句では(袋を縫ひぬ赤き糸)と、助動詞の「ぬ」で完了を表しているのに、新蕎麦用の袋を赤い糸で縫ったという事になる。

かな女の時代は蕎麦粉を入れる袋を持参する計り売りであったのだろうか。新蕎麦粉を入れる袋を赤い糸で縫ったところが眼目である。

浮き立つ女性の心模様が鮮明な赤に凝縮されていて、色調に対するセンスは褪せることなく現代にも通じる。

高浜虚子は、大正七年に出した「進むべき俳句の道」で二四回にわたる連載の中で三二人のホトトギス作家を取り上げ評しているが、その中でかな女は唯一の女流であった。

虚子はそこで、かな女の句風を「其一は女でなければ実験する事もしくは気の付かぬ事実の描写、其二は女でなければ感じ得ない情緒、其三は女と思えない句」という三つの傾向に分けて論じている。

虚子の言う、女でなければ実験する事もしくは気の付かぬ事実の描写、女でなければ感じ得ない情緒が、まさにこの(赤い糸)に他ならないのである。

## ◇書齋出ぬ主に客や漱石忌

井口 俊晴

漱石が亡くなって十年、大正十五年冬の句である。忌日は十二月九日。一般に詠むのが難しいとされる忌日を詠んだのは、かな女にとって、この句が初めてのようだ。

ところで、漱石が「吾輩は猫である」の作者だということは常識だが、高浜虚子が主宰する「ホトトギス」の人気小説だったと知っている人は少ないのでは。連載のお陰で、それまで俳句に興味がなかった人まで「ホトトギス」を買い求めたというからすごい。

つまるところ、かな女にとって漱石は無縁だとは言いきれない存在なのだ。「吾輩は猫である」が出た明治三十八年、かな女はまだ十八歳。交友関係があるはずはないが、漱石への関心はあったろう。東京・牛込の「漱石山房」の書齋に籠って「三四郎」「それから」など数多くの作品を執筆した漱石、来客が多く、寺田虎彦はじめ多士済々が出入りして、なかなか外出もままならない。その様子は、小説の苦沙弥(くしゃみ)先生を囲む客の姿とだぶる。小説では死んでしまったが生きていたら「吾輩」も傍に寝るべって、客たちの賑やかなおしゃべりに耳を傾けたことだろう。

猫好きだったかな女なら、きつと美貌の「かな女猫」となつて書齋に潜り込み、主人や客たちのそばで目をくりくり、耳をぴくぴくさせ、「吾輩」がやり残した、ちよつぱり辛辣な人間観察を続けたかったのでは…と、これは筆者の乱暴な想像である。

## ◇このあたり母は座りしちゝろ啼く

曲淵 徹雄

この句は昭和三年（かな女四十一歳）秋の作で、第一句集『龍膽』と第二句集『雨月』に所収されている。生前の母がよく座っていたこの辺りに蟋蟀が啼いている。その母は、前年の二月に亡くなっている。この句が詠まれた新宿柏木へ、生まれ育った日本橋から、母・孝（たか）と一緒に引越したの  
は、かな女二十歳の明治四十年秋であった。移って一年ほど後には零余子と結婚して、二十年ちかく住んでいる。

随筆『雨月抄』で、この句について記されているのは、「この句は俳句音楽として琴五面で演奏された。発表会は帝国ホテルであった。」の一行のみである。この年夏の零余子の「逝からほどない作である掲句の音楽は、かの女の胸にどう響いたのだろうか。同書で、「裁ち縫ひの傍に置く子や梅雨の入り」の句の自註には、亡き母がしていたように縫物をしながら、母の無い後の一年間で憶うかけがえのない母と、養子に迎えて一年余りの愛息・博（ひろし）とを記している。

掲句は、「ちゝろ鳴く母の座りしこのあたり」でも句の形になるだろうが、句を発意した「このあたり」を上五に置き、「母は」と「啼く」に思いがこめられたおり、かな女ならではのしなやかさと強さで詠われている。

掲句が作られてほとんど日をおかずに火難に遭い、東京を離れて終の棲家となる浦和へ移ることになるとは知る由もなかな女であったが、その後のかな女の苦難をこの句が暗示しているかのように思える。

## ◇蝶のやうに畳に居れば夕顔咲く

越田 栄子

この句は、昭和八年かな女四十八歳の時の句である。年譜によるとこの頃のかな女は、各地に出向き句会を開き、ラジオ放送に出演するなど多忙な毎日を過ごされていたようである。

蝶の様に自身を喻えられたのは、各地を精力的に飛び回っていた自分の姿を蝶に重ねたのかも知れません。

この句は畳に居れば、なので蝶が花に止まり翅を畳んで休んでいる様に、かな女自身も畳に身を置き、安らぎの一時を過ごしている様子が想像されます。静かな午後の時間がゆったりと流れ、机に向かっていたかな女が、ふと簾越しに外の景色に目を向けると真っ白な夕顔が咲き始めている。

何とも絵になる素敵な映画のような光景が目に見えます。夕顔は、夕方から咲き始め朝にはしぼんでしまう白く美しい花ですが、夜に咲く純白の花は、艶治でありながらも、上品で凜としたかな女のイメージと重なり合います。

この句は、かな女の自画像のようである、とよく言われる句である。数あるかな女の句の中でも、筆者にとっては、憧れと心惹かれる一句である。

## ◇なき母を知る人來り十二月

加藤でん治

長谷川かな女第二句集「雨月」（一九三九年刊）の一句。  
句意は難解ではない。何かと心急かされる十二月、年末までに片付けるべきことは片付けたいという思いがある。「なき母を知る人」も何かしらの過去を清算したい思いで訪れたのかも知れない。「なき母を知る人」と少し他人行儀な言い方が畏まった雰囲気醸し出している、と鑑賞できようか。

だが読み返すたびに、この句の背景が広がってくる。「なき母を知る人」とは一体どんな人で、何故来たのか。私は水明の同人として日も浅くかな女の研究者でもない。かな女のこととて、通りすがりに覗き見をしている様なもので、「なき母」にいたっては全くの無知。だが、俳句初心者であれ一読者として自由に推測し鑑賞してみたい。

十二月のある日、母の死を悼み、旧知の仲と名告る御婦人が訪ねて来た。遺影を見つつ、彼女は話し始めた。久し振りの再会以来、ことある毎に旧交を温めてきました。そして、突然の喪中の報せに驚き訪れたのです。と。身近に居ながら、まだまだ知らぬことの多かった母の人生。ドラマの序章を思わせて、背景を探ることも楽しみな一句。読者は経験をもとに、空想の世界に遊び虚を实とすることも、実を虚にすることも可能である。私はこの一句に出合い背景を推測しながら自由な鑑賞の機会を得たことは喜びである。

## ◇拾ひたる石に色あり吾亦紅

近藤 徹平

長谷川かな女水明創刊主宰の句を現代の視点から読み解き、再評価するとの趣旨で、表題句を頂いた。咄嗟に脳裏に浮ぶのは、女史が昭和三年夫の零余子「枯野」主宰に先立たれ、直後に新宿の自宅全焼の悲劇に遭遇した経歴である。この句は自宅全焼の翌朝焼け跡に立ち、焼け爛れた石を拾う女史の心境と想像した。か弱き女性がこの逆境に直面し、大東京から文人の町の浦和に転居し、親しんだ俳句を抛り所に水明句会を創設する転機となった句と勝手に想像してしまった。

先学の師からお借りした資料では、女史の昭和十四年刊第二句集「雨月」を自解した昭和二十三年刊『雨月抄』に「吾亦紅の咲くやうな野で拾つたつまらない石は石なりにそれらしい思ひ出をもつてあるもの」と記している。その前頁に「火の燃ゆる石を抱きぬ秋の夢」の句があり、「ほんとうに見た夢であつて其のときは面白いと思つたが今見るとこのやうなことは珍しくも何ともないやうな気がする」と自解している。女史の深層心理に自宅全焼があつたかは全く謎だが、女史は悲劇を悲劇にさせない強い女性であつたことは確かだ。

私事で恐縮だが、筆者の亡母は旧満州で難病を発症し治療のため、昭和十八年七歳の私と弟妹を伴い日本に引き揚げた。早速帝大病院で受診したが、芳しくなかつた。やがてソ連軍の侵攻で父の消息は途絶えたが、幼子を心中もせず守り抜いた強い女と思っている。女史の生涯に亡母が重なって見えた。

## ◇西鶴の女みな死ぬ夜の秋

正木 萬蝶

俳句は写生とは別に虚の世界を詠む楽しさがある。鑑賞するにはこちらの方が想像力を掻き立てられ鑑賞に奥行が出て面白さがあると思う。

西鶴の作品の女はみな死んでいない、と或る句会でどなたかが呟いたのを聞いた事があった。例えば「好色五人女」。この作品の女達は色々な死に方で人生を終えているが皆は死んでいない。人生の暗闇でうごめき身をやつし世間にそしられてそれでも女は生き抜いて死ぬ。本能の赴くままに、自分だけが知る幸せ。女の裏には必ず男がいる。西鶴は雅俗語を使い分ける事により欲に支配されていく人間を生き生きとエロティックに見せているのだ。夜の秋という清涼感を持つ季節が西鶴の女によって淫靡な世界に変わる。西鶴の描いている女は古今東西未来永劫、業そのものである。いつの世もスキヤンダルは蠱惑的だ。「好色一代男」は菱川師宣の挿絵入りの刊行とある。やがて歌舞伎、浄瑠璃や演劇界へも深入りを見せるとか。みな死ぬ、と言いつつしてしまうとそれが恰も真実になってしまふようだ。情緒のある季語と力強い言い切りとのアンバランスに魅せられた。俳人としての西鶴より作家としての西鶴に魅力を感じたのであろうか。

ちやきちやきの江戸っ子のかな女の氣質が曖昧さを避けて死ぬと言いつつ切らせたのだろうか。あの時代に独学で英語まで修めたとの根性に感服した。かな女の男性的な一面に改めて惹かれた。(敬称略)

## ◇ねばりひきでもあろうかと田向づの初蛙

原田 想子

かな女先生が「若狭は水明のふるさとですよ」と仰って、若狭をこよなく愛し足繁く通って下さいました。

いつの折りか田水で鳴く蛙の合唱と、勢いよく唄う「ねばりひき」の唄がどこかしこたなく聞こえてきた。これがそのときの一句である。ねばりひき唄は、旧上中町指定民俗文財になっており、昔、鳥羽村や瓜生村では、冬になると屑米を石臼でひいて、その粉を蓬餅に混ぜて食べる習慣があった。重い石臼を廻す重労働で、唄でもうたわんと長時間続かない。若い衆の社交のまたとないチャンスでもあった。娘さんの居る家には、青年が大勢集まったそうや。今は、白米にした米が袋に入れて何処にでも売っており、この粉ひき唄も、夢物語りになった。昭和五十九年、かな女句碑除幕式には大勢の村人達と水明有志が集まり、めでたく式典が挙行され、アトラクションとして「ねばりひき」が唄われた。

かな女作品の魅力とは一体何であらうか。気どらず勿体ぶらず純真謙虚に自然観照が行われ、日常の生活感情が諷詠されていることを言うのであって、私もまた素直にすつと這入ってゆけるのである。



若狭民謡「ねばりひき」を唄う人々 昭和59年7月  
若狭水明会 鳥津城子ほか

## ◇竜胆枯れ叩く狐の尾がむらさき

大塚 茂子

かな女俳句には狐が度々登場する。狐は人をだます賢いと言えられる反面、山の神、稲荷神の使いとも言われている。その狐に、枯れかかった竜胆を今一度甦えらせて欲しい、と願うかな女の心の声が届いたのであるうか。

狐が枯れ枝に息を吹きかけ、尻尾で触れると次々に竜胆の花が甦えった。そして最後の息で、太く長い狐の尻尾も花と同化して紫色に染まった。下五の「尾がむらさき」が、かな女のロマンと願望を表わしている。竜胆の花の色「むらさき」は、正にかな女にぴったりの色であると思う。

この句は、昭和二九年かな女が七十歳を前にして詠まれた。かな女がこの先を生き抜き力強さと心構えが私にひしひしと伝わってくる。

かな女の掲句の句碑は、群馬県鬼石町の桜山に建っている。と知って、平成二八年熊谷句会の草太郎さん、藤十郎さん、栄子さんと私で桜山に出掛けた。当日は鬼石の野口和子さんに案内して頂いた。桜山は二日前に降った雪と、冬桜がきらきら光り句碑とゆっくり語った。今でも桜山のかな女の句碑と、その隣に見守る様に建つ零余子の句碑が脳裏に浮かぶ。そんな光景を思い出させてくれる大切な句です。

## ◇北風に腹を叩いて牛通す

青木 鶴城

東京新宿から浦和へ越して来たかな女は、「浦和駅の東側はまだ水田が広がり……（中略）……西側は中仙道に通じる商店街があり、交差路の突き当りに県庁があった。鎮守調神社と駅の真ん中辺にこれから住む家がポツンと建っていた。」と記している。当時の浦和は、まだ家屋の数が少なく周りは田んぼと畑で、公道を当然の如く荷車や農耕用の牛を牽いて歩いていたのであるう。

さて、掲句の「腹を叩いて」だが、腹を叩いているのはいつたい誰なのか。牛を牽いている人物か、かな女か、第三者か……丸みを帯びて、ふくよかで、温かそうな牛のお腹を見ていると何だかポンポンと叩いてみたくなる。日本橋生まれ育ちの、着物姿のかな女が牛の腹を叩いたとしたら、何とも面白い句になる。「北風の真直ぐに歩く中仙道」とも詠んでいる中仙道の北風が一気に暖かみを醸し出す。

かな女は「埼玉に来て初めて大地、土地を良く見たような気がした。少しずつ自分の句が変わってくるように覚えた。」とも記している。当時の浦和を詠んだ句として、地元人にはなんとも親しみを覚える句である。

また、虚子がかつて、かな女の句を評したとされる『女でなければ気の付かぬ事実の描写』ではなく『女でなければ感じ得ない情緒』でもなく、この句こそが『女と思えない句』なのである。



## ◇帯織るや中庭に咲く冬菫

染谷 正信

掲句は、かな女の第四句集『川の灯』に収録されている昭和三十七年の作品である。「古都を読む」の前書がついている。句形は、上五を「や」で大きく切り、中七・下五でひとつながりのフレーズを作り、下五を体言でしっかり止める。我々初心者が最初に覚える俳句の基本中の基本の型である。前書があるため解釈はさほど困難でない。場所は京都西陣である。西陣は絹織物の伝統工芸の街であり、その生産方法は従来からの家内工業である。その作業場に招かれて、帯の生産工程を見学する。筆者は、織られている帯は金襴、緞子と推測する。豪華な帯が織られている工程を見入っているその時、ふと目を中庭に転じると庭の隅に小さな冬菫が咲いている。春に先んじて冬枯れの庭に咲いている可憐な冬菫は、かな女の心をしっかりと捉えたに違いない。

ぜひたくで、あでやかな西陣の帯と、冬枯れの庭に咲いている健気な冬菫との取合せであり、雅と鄙との取合せである。この句の主題は、はなやかな西陣の帯ではなく、小さな健気な冬菫の姿である。身辺の、名もなき小さなものを労るかな女の優しさが良く表れている句と思う。

今回、かな女の第二句集『雨月』の全九〇二句の季語を集計分析した。結果は植物の季語が一番多く、二四八句・二七%であった。「女性ならではの情緒や心情をうたうみずみずしい句風」というかな女評も十分頷けるものと思われる。

## ◇面白くて傘をさすならげんげん野

神田 治江

昭和四十一年にかな女の傘寿を祝う水明春の大会が行われました。その年に詠まれた句が「げんげん野」であります。かな女晩年の句であります。遡れば夫零余子に勧められて、「ホトトギス」に関り高浜虚子の勧めで、女流俳句会の幹事などを受けた様です。敬服の一語につきます。句の中の「げんげん」は、一般には「蓮華草」と呼び、花言葉は「無邪気」「心が和らぐ」等で正にかな女の姿が浮かんで来ます。童女の頃には、生き生きとした大自然の中に、蓮華草が咲き広がり、匂いを嗅ぎ、花冠を作り、無邪気に遊んだ思い出が、傘寿を迎えて浮かんで来たのでしょうか。句の始まりの「面白くて」を見たときは「えー」の一言でした。私には及ばぬ叙法です。かな女独自の観照としか言い様がありません。傘寿にしての躍動感と若々しさは、読み手の心を捉えて放さない。又、傘寿をもじり、「傘をさすなら」は極め所です。花を愛し月を好んだかな女の知性と感性は、十七音の文芸であると確信します。感動を見きわめ、対象物を十分に見つめ、自然諷詠と人生諷詠を融和させながら、俳句とは何かと、自問自答し俳句の道が続けたいと思います。

## 悠久の旅へ

— 發刊の言葉 —

澤 本 知 水

向日葵が燃えてる——。

粗末な一本の洋傘を抱えて、果てもない悠久の旅に私は立つのです。行程も準備も無い、すべては不用意なこの旅立ちに就いて、私の周囲の友だちは、いろ／＼心記して呉れる、私は其の厚意に對して、たゞ微笑を以て答えました。

この見すほらしい私といふ旅人は、何を目的に、この定めない旅を企てたのであらう。それは私にも解らない、たゞ、山川草木の中に身を打ち込むことに依つて、先師故零余子先生の藝術と、たましひが見たいといふ念願が、私しをこの果てもない旅に馳り出したのです。たゞ私しは足に任せて、とぼ／＼と歩いて行こうと思ひます、其處には恐らく、あらゆる艱難が、私しを待ち設けてゐることでせう。だが、その艱難の中に身を打ち込んでこそ法悦は生れやう。求めるものは、かくて與えられるであらう。

若し、この極みない旅が、輝かしい歸路に向つてくるときがあれば、その時こそは、生ける零余子を見て來た時でせう。私しはそれを神に念願しつゝ一個の修業者として、艱難の旅路に靴を鳴らして行かねばなりません。(五・八・一〇)

# 澤本知水と医者様そして坊や

山本鬼之介

右ページの一文は、筆者の伯父・澤本知水が、俳誌「水明」の創刊に向けての並々ならぬ覚悟を表したものである。文末に示されている昭和五年八月十日の日付から見、筆者の家はその当時北海道の小樽に居た。勿論筆者は生まれて居らず、直ぐ上の姉・服部みどりが満一歳四ヶ月の時である。

澤本知水が、日本初の電力会社である東京電燈株式会社の出張所長の職を擲って自ら黒衣となつて先師・長谷川零余子の妻・長谷川かな女を輔け、水明の発刊に漕ぎ着けた次第であるが、創刊號が発刊された時の知水の喜び様が、伯父の没後出版された澤本知水句集『夏爐』の中の句友・高木丁二氏の『猪鍋』と題する文章に表されているので引用する。

—昭和五年の初秋の或る朝早く、私の宅へ駈け込んで來た。その腕には、かな女師筆のあの酸漿の繪の表紙の水明創刊號數冊を抱えていた。その時の君の顔は、喜びを滿面に湛えて、恰も初孫を抱えて來たような格好で、嬉しくてたまらないというような表情たつぷりで、そこには稚氣

満々といつてもよいような君獨得の風情があつた。こうした雑誌編輯發行ということには、全然ずぶの素人であつた君が、その手で、しかも助手もなく一人で、つくり上げたといふ喜びだけでも、私は充分に同情して、共に喜び合うに吝かでなかつた。—（表記文字は原文のまま）

澤本知水の「古武士のような風格で常にその言動に一貫した気骨があり、どんな苦境に直面しても泣き言を言わない」という天晴れな性格と態度が原動力になつたことは間違いないだろうが、何故職を擲つてまで水明の創刊に力を尽くし得たのか、文無しで家庭はどうなつたのかと、誰もが疑問を持つところである。そこで、澤本家の家庭を維持する金銭面について説明すると、伯父・頼が内科・小兒科の医者で、その収入によつて成り立つたのかと思う。

伯父と同郷の若狭の旧家の娘であつた頼は、東京に出て医



若い頃の  
伯父・澤本 知水  
伯母・澤本 頼

学を学び女医になった。今と違って当時の医者の権威はすこぶる高く、まさに医者様であった。昭和十三年、父の転勤によって山本家は小樽から当時の東京市杉並区天沼二丁目に移り筆者が出生。家は日大二中（現・二高）の直ぐ近くで、澤本家まで徒歩十分ほどの場所であった。筆者は幼少時や虚弱体質で、扁桃腺を腫らして熱を出すことが多く、その度に、頼医者様が往診に来てくれた。自宅を兼ねた澤本醫院にお抱えの人力車夫が常駐していて、人力車に威儀を正し、砂利道を揺られながらやってきた。男子に恵まれなかった伯父夫婦は、筆者を『坊や坊や』と言って可愛がってはくれたが、伯母は羨に敵しく『姿勢が悪い、箸の持ち方が違う』など、度々注意された記憶がある。知水伯父の豪放磊落さと頼伯母の身に備わった威厳が、幼少時の記憶の中に根付いている。

伯父は、白毛の紀州犬を番で飼っており、生まれた牝の子犬を貰い「ゆき」と名付けたが、庭で遊ばせていて隣家との板塀の下に挟まってしまい、死んでしまった。伯父は、動物や鳥が好きで、木菟も飼っていたし、日本鶏保存会の有力メンバーで、日本三大長鳴鶏の「東天紅・聲良・唐丸」こゑよし・しやうまるほか、数々の日本鶏を飼っていて、年に一回上野で開催されていた全国長鳴鶏コンクールに出場させて、その喉自慢を競わせたようだ。筆者の遠い遠い記憶の中に、出場した鶏の声が尽きぬよう、顔を真っ赤にして鶏を励ましている伯父の姿がある。父に連れられて応援に行った日のことであろう。

知水伯父（本名・和夫）と筆者の父・山本嵯迷（本名・信夫）



文中の「坊や」こと  
その当時の山本鬼之介

の祖先は代々庄屋であり、二人の祖父は明治維新前に若狭の藩主から苗字帯刀を許され、父・澤本常治郎は、明治・大正・昭和の三代に亘って戸長・村長を五十年も続け、その間に敦賀から小浜へ国道沿いに敷設する計画の鉄道を、自分の村に駅（現在の小浜線・大鳥羽駅）を設けるように変更させるなど、地方自治に尽力し、家財を使い果たしてすっからかんになったという。和夫が子供の頃、常治郎の妹・山本みちの嫁ぎ先へ養子に出されたが、腕白小僧の本性を出して親元へ逃げ帰ってしまい、困り果てた両親が、弟の信夫に因果を含めて再び養子に出した。常治郎には四人の息子がおり、上から隆三・和夫・信夫・静夫で、みな若い時から俳句を嗜み、それぞれの俳号が、六六・知水・嵯迷・素風であった。

面白いもので、長男と三男、二男と四男が性格や人柄が似ており、前者組の酒が嗜む程度なのに対して後者組は文字通り

の酒豪であった。知水伯父が酒を呑んで大声で話しかけてくると、子供心に恐かった。また、素風叔父はとても剽軽な人で、戦後疎開先の若狭から東京の中央区に戻って数年間父の会社の中に仮住いしていた頃、夏に名古屋から社用で出張してきた叔父を、徒歩三十分の銭湯に案内することになった。叔父は、縮みの下着のシャツには越中ふんどし一丁で下駄を鳴らしながら歩いて行く。道行く人がちりちりりと目を向けるが、叔父は何処吹く風であった。筆者は、後悔しつつも逃げ帰るわけにもゆかず、全くの他人を装って先を歩いた。

昭和二十年三月十日の東京大空襲を機に、澤本知水一家と共に兄弟の郷里である若狭へ疎開した。疎開した当初一週間ほど、鳥羽村黒田の澤本本家に両家族が寄宿し、その後知水一家は大鳥羽駅の次の三宅駅近くの三宅村へ、嵯迷一家は、大鳥羽駅至近の檜鼻家に数部屋お借りして移った。

知水伯父は、帰郷を待ちかねていたのである。郷土の自然や善良な村人を相手に充実した日々を過ごしていた。特に住まいから近い北川に日課のように出かけ、釣りや投網打ちに興じていた。村の子供を十人ほど呼び集め、円陣を組ませ、てんでに拳大の石を投げさせる。鮎が中心に集まった処へ伯父が投網を打つ。日光にさらさら光る鮎が一度に十匹ほど捕れる。捕獲した川魚を竹串に刺して囲炉裏の周りに立てかけ、じっくりと焙る。それを肴に、大徳利を傾けてぐびりぐびりと酒を呑んでいた伯父の姿が今でも目に浮かぶ。

若狭の鳥羽谷地区には、昔から「天神講」という子供を対象

にした自治教育の場があり、そこで冠句も教えているので、それが大人になってから俳句に活かされている。知水・嵯迷の兄弟が、村々の青年に俳句指導を行ったのも疎開中のことであり、現在の若狭水明会と鳥羽谷俳句会に繋がっている。

医者様の頼伯母は、三宅村の他、鳥羽村大鳥羽にも診療所を設け、毎週日を決めて診療に来ていた。しかし、疎開地の環境が幸いして健康児になった坊やは、医者様の世話になることもなく、村の悪童達と野山を駆け回っていた。

水明創刊に多大な貢献を為し、以後編集責任者として水明の基盤作りをした知水伯父が、昭和二十七年八月十八日夜、日々愛して止まなかった北川の清流に足を入れ、其処の磧で倒れた。享年六十四歳。まだまだ多くの人に惜しまれる年齢であった。高血圧が原因と聞いていたが、「知水山人」と皆から親しまれていた伯父らしく、自分の大好きだった場所でのあつけなくも、実に潔い大往生であった。

筆者は、五代目の主宰に就任した時、子供の頃から接してきたかな女師との深く繋がった縁を感じた。そして知水伯父が目指した「悠久の旅」は未だ終わっていないのだと思った。いま水明俳句会が直面している環境は大変厳しい。であるから、「伯父の旅」を引き継ぎ、水明創刊の原点に立ち返って長谷川かな女が敷いた俳句道を、会員各位と共に歩み続けることが己に課せられた使命であると思っている。創刊百周年に向けて更なるご支援ご協力をお願いする。

(令和二年文月)

## 若狭水明会の先人を偲ぶ

鳥津 初花

私が、故・鳥津城子先生の勧めで、昭和四十八年に鳥羽谷俳句会に入会して二年後、先生が、どうしても私を水明全国大会に連れて行くと言われ、若狭水明会の先輩男女八名の一行に加わったのです。それが縁で、それから毎月若狭水明会の句会にも出席し、皆さんと共に俳句を学び、吟行会や時には楽しい宴席にも参加しました。

この頃、若狭水明会の先人方の俳句を読み返しますと、一人一人のお人柄や声までもが想い出され、ついつい懐かしく、私の宝箱を開けてみたくなりました。これから思うがままに綴らせていただきます。

若狭水明会の源は、昭和二十年の敗戦後に、疎開されていた澤本知水・山本嵯迷の両先生が、若狭鳥羽谷地区の青年達に俳句指導を始められ、「水明」との絆を作ってくださいったことによるものでした。戦後二回来若狭されて若狭ご自身の故郷のように愛してくださいだったかな女先生が昭和四十四年に亡くなられ、二代目主宰を継いだ秋子先生も僅か四年目に急逝され、更に秋子先生の後を追うように嵯迷先生も逝かれ、

城子先生ほか一堂悲嘆のどん底に落ちたのでした。

しかし、その後、若狭勢の団結と全国水明の皆様の熱い応援によって、鳥羽公園に知水・嵯迷の兄弟句碑、瓜割名水公園に、かな女と秋子の句碑、そして、三代目主宰の星野紗一と妻・明世の夫婦句碑が建立され、若狭が水明にとって重要な地となったのです。鳥羽公園の知水・嵯迷兄弟句碑に並んで、甥の宇田翠保氏（宇田白鷺の父で永年若狭町長を勤めた）の句碑も建てられました。城子先生が、これらの句碑建立の陣頭指揮を執られ、多大な貢献をされました。城子先生は、自分の句碑は生前においても、また、死後においても絶対に建てるなど、頑に言われていましたが、没後に功勞者であった鳥津城子を称える水明の記念事業として、水明俳句会の会員の皆様と地元有志者の熱意によって、鳥羽公園の一等地に、城子句碑が建立されました。また、ささやかなものですが、若狭水明会の長老であった内藤並樹氏の句碑が、自宅の庭に建てられています。

平成九年、「鳥羽谷」誌の復刊二十周年を記念して、十七名で合同句集「鳥羽谷」を刊行、また、同年に「鳥羽谷」誌の通巻百号記念大会を開催し、水明本部からも多くの方々が来られて盛大な祝賀会を催しました。しかし、その年の秋から無情の風が吹き始め、城子先生を支えていた重鎮の会員が、相次いで他界される悲劇が続きました。

その時々を振り返り、私がお世話になった先人達が遺された俳句の中から自分好みの句と、亡くなられた時（平成九年

十月（三十年一月）の私の追悼句を披露させていただきました。

夏の海大橋渡る僧見たり

笑はせて泣かせて消えし冬の虹

青芒野武士のやうに立つ農夫

花時雨衣桁の喪服片付かず

穴を出て峽の清水を汚すまじ

桐箱の紐解きゐたる菊の夜

能面の無言の語り春兆す

奥の細道終着駅は寒の雨

初吟の袖の女や寒椿

生涯を少女のごとく百千鳥

文月や夜の会合は細き帯

大輪の紅い椿が全開す

わが胸の乙女は老いず野紺菊

「先生」と呼んで野菊を摘みをりぬ

大怪我をして下萌に猫戻り

夕東風や籠の菜つ葉がこぼれ落つ

父の世の播鉢大きとろろ汁

秋茄子アヤさん好みのやたら漬け

濃山吹母といふ字を金色に

うつくしき白髪之母送り余寒

宇野 常人

初 花

松宮 柚二

初 花

宇田 翠保

初 花

霜中 孫左

初 花

檜鼻 敏子

初 花

松宮スガ栄

初 花

島津 城子

初 花

福谷 達二

初 花

出口 綾

初 花

島津よしの

初 花

昭和の戦中戦後から平成の時代を、強く時に優しく精一杯生き抜き、俳句を通して様々なことを教えてくださった若狭水明会の先人を思う時、令和の時代の私達に何が出来たのか、そして、先人に近づく力があるのだろうかと思ひます。それでも俳句に情熱を燃やす若狭水明会に近年待望の新人が加わったので、これからも先人を偲び語りつつ前進して行きたいと思ふ今日この頃です。

鳥羽公園に城子句碑が建てられてから、毎年四月二十日を乙花会（か）の句碑記念日として、桜の下で句会を開き会食します。この日は、鳥羽谷俳句会の仲間を誘い合同句会を行うこともあり、城子先生に慣い、短冊に句を書いて桜の枝に吊します。毎年七月を先人を偲ぶ月に定め、二十日の午前中に、鳥羽公園と瓜割名水公園の句碑の周辺清掃と剪定、句碑磨きを実施しています。同日の午後は句会と会食ですが、その前に、会員の松島寛久和尚に従って般若心経を唱え、先人の一人一人を心に描いて合掌します。句会の最中や、会食の時に先人の想い出やエピソードが語られるのが毎年の楽しみで、若狭鳥羽谷地区にとつて、大切な年中行事の一つです。

水明創刊九十周年の記念すべき年にあたり、若狭水明会を創設し、発展させてくれた先人諸兄弟を偲び、それぞれの方の俳句を吟詠することで、大きなパワーをいただきました。先人の皆さん方も、水明俳句会の偉大な慶事を天上から祝福し、拍手を贈ってくれていると思います。〔令和二年水無月〕

## 第二例会の今昔

### 山中みどり

水明創刊九十年、誠におめでとうございます。かな女師から歴代の主宰は、そのお力の大きさに加えて、強い人運（という言い回しは無いかも知れませんが）をお持ちであったと思います。山本鬼之介現主宰も勿論です。

さて、私が俳句を始めたのは四十代の初めでした。友人宅の句会に小泉小泉さんがお出になり、そのご縁で上野文化会館の第二例会をご紹介頂きました。初心者なりに、中山玲子さんが「私の隣にいらっしやい」とお声を掛けて下さいました。毅然とした佇まいとカリスマ性を漂わせる美しい方でした。第二例会は、上野不忍池畔の待合茶室「無極亭」でかな女師が始めた句会で、「私（玲子）がその句会に出て居た頃、紗一は黒の詰襟の学生服で廊下に座っていたのよ。」と当時の主宰を呼び捨てにするのにびっくりしました。そうして実に沢山の事を学ばせて頂いたと感謝しています。

玲子さんの御父上の所謂お婆さんに女の子が生まれた時、名前を依頼されて、『たけくらべ』の「美登利」と命名したそうです。その異母妹と私が同じ名前であった事で、私を可愛がって呉れたのかも知れません。当時の第二例会は、吉田静二・永瀬千枝子・堀敬子・菊池ひろこ・金子はる子・堀井

せつといった才能豊かな方々が綺羅星の如くいらして、濃密な時間が流れていました。時には、静二さんと玲子さんの見解が分かれて激しいやりとりが起きることもありましたが、大抵静二さんが矛を納める形で終わるのです。足の悪い玲子さんはご主人の翔さんに腕を預けて、ご不自由ながら仲睦まじいご様子でもありました。

紗一主宰ご逝去の際の玲子さんの落胆ぶりは傍らにいる私にも痛いほど判りました。ご自分の弟のように思っていたらっしやったのでしょうか。

百合句ふ枢に千の季語抱きて  
頬近く百合を捧げて涙ぐむ

沙羅の花行く船止めよ汝止めよ

魂飛びし師よ虹の橋渡らむか

そして、紗一主宰に続いての奥様明世さんのご逝去が、玲子さんにとって更に大きな痛手になったと思います。

咲き満ちて花の戦ぎに明世ゐて

花の雲隠れてしまふ明世姫

昏き世の涙石とや散る桜

そして金子はる子さんの訃報が続きます。

寒菊の赤き軌跡にはる子消え

玲子さんの訃報に際して、第二例会は迷走しましたが、光二前主宰に依って再生しました。大川富美代・岩谷精一・島崎ゆきき・長澤健次・井上けい子他のご参加を頂き蘇る事が出来たのです。現在は隅田川厩橋近くの本所ビックシップに会場を移しました。若い層が増えている地域ですから、ここに俳句の種を沢山蒔きたいと考えています。



## 「水明」の更なる歴史を

青木 鶴城

私が俳句を始めた切っ掛けは、ご他聞に漏れずテレビのプラバトであった。ゲストと先生の掛け合いの面白さや見事な添削が気に入り、毎週楽しみに見ている内に何となく自分にもやれそうな気がした。

勤めを完全リタイアし、自宅でのんびり過ごしていたある日、さいたま市報が届いた。暇に任せて、催しや講座の案内ページで健康体操や古文書解読など面白そうなものを見つけていた中に、偶然なのか必然か、二日間の俳句教室が何と千円だと云う小さな記事を見つけてしまった。

「初めての俳句教室」初日は、水明俳句会の歴史や組織の紹介、俳句のいろはや俳句の喜びなる講義を受け、午後には席題による初めての俳句を作った。今読み返すと顔から火が出そうな稚拙な俳句だったのだが、何と講師を務められた山本鬼之介主宰が、その句をちゃんと残して頂いていたのは大変な驚きであった。

二日目は、水明季音同人のお姉様講師の先導で別所沼公園の吟行。二句を投句して午後の句会へと移り、合評。この時に、ぎこちなくも名乗りを上げる感動を少し味わえたのかも

知れない。結局、二十四名の受講者の内、十名が水明入会を決めた。その十名で始めた「新樹の会」も、残念なことに当時の会員は現在半分になってしまっている。

さて、皆様は何処で、どんなタイピングで俳句を作られているのだろうか。私の場合は、自宅の食卓での作句が一番多い。次にパソコンのデスク。費やす時間は圧倒的にこれらの場所が多いのだが、数多の兼題をただ眺めて宙を見つめることが殆ど。中には機関銃のように句作りが出来る同人もお有りのだが、残念ながら私にはそのような能力の持ち合わせはない。他には、電車の中や散歩の途中もあるが、案外このタイピングで思わぬ俳句が出来るが多々ある。そう思っ

て、俳句手帳を手に電車に乗り、散歩をするのだが、そんな打算があると残念ながら全く句が出来ないのが世の道理。全

てにおいて肩の力が抜けた自然体が良いのであろう。俳句は、発想力と言葉の斡旋力が必要な文学だと思ふ。発想力は、多岐にわたる経験、生活の知識や知恵、想像力で、これまでに備わってきた要素の占める割合が殆どである。一方、言葉の斡旋力は、勿論元々の語彙素材が必要ではあるが、辞書や書物やインターネット等の情報を活用する事で自分の知識をはるかに上回る言葉の斡旋が可能になる。

虚子を師として長谷川かな女に始まった「水明」に於いて、花鳥諷詠の客観写生句、心眼の立体写生句はもとより、自由奔放な現代俳句或いは無季俳句に至るまで、様々な俳句にチャレンジしてみたいと思っている。九〇年の歴史を経た「水明」の更なる歴史と共に。

## 紫黄の旗印

網野 月を

「水明」のご本尊は長谷川かな女なのでしようが、文殊菩薩と至勢菩薩は二代目の長谷川秋子と俳壇で、俳句の職人、と称された山本紫黄でありましょう。残念ながら秋子先生にはお目にかかる時機を逃してしまいました。紫黄先生には先生の晩年の十年を師事する機会を得ました。私には最大の財産です。

父目覚むことなし稲妻の消えたれば  
師の没後はじめ萩の紅とのふ

以上は秋子先生の御句です。続いて紫黄先生の御句は、春の昼絶命のあと人まかせ（悼 西東三鬼）の前書有）かな女忌や石の平らに水を盛り

以上です。いずれも第一句集『早寝島』収録の句です。第二句集『瓢箪池』には「秋子抄（五句）」が載っています。

春の秋子は赤い鳥居に照らさるる

夏の秋子は黒地の服の草模様

秋の秋子は微熱の源氏物語

冬の秋子は神の匂ひの防空頭巾

秋子の忌瘦身の鳩なかりけり

夜中の一時過ぎに電話がありました。季節は冬です。

「横月（おうげつ）十七年前までの私の俳号）呑んでるか？」  
「今日は仕事があつて、まだ呑んでません」  
「今、品川だ。終電に行かれちゃってな！」

それから品川駅前までお迎えに行き、お宅のある日の出町までの二人のドライブは楽しい会話が続きました。当時の私を評して、池田澄子さんは「まるで蘭丸ネ」と言われたものでした。

紫黄先生からは「俳号をかえなさい」と常々言われました。「そんな爺みたいな俳号はだめだ」と。そこで「小紫黄を名乗っても良いでしょうか？」と強請つてみたところ、「お前の句は俺に全然似てねえよ」とけんもほろろに遣つ付けられました。それでも二〇〇三年に「月を」に改名した時には、「俺が何度言つても改めなかつたのに、澄子（池田澄子）さんに言われたら直ぐにかえやがって！」と詰られました。そして「敏雄（三橋敏雄）さんの弟子だからな、流石に良い名だ」と喜んでくれました。

紫黄先生からお叱りを頂くことも多々ありました。その中でも辛いのが「月を！お前、それは野暮だろう！」です。「下手」と言われるよりも辛かった。そこで、紫黄流格好の付け方を探求したものです。『瓢箪池』の「あとがき」に「俳句とはよれよれでかつこいものーこれが昔からのわが旗印。」と記されています。この十三年間というもの迷路に入った時、『瓢箪池』の四〇二句を読み続け、「よれよれでかつこいもの」に行きつきます。決まって涙が出ますねえ。合は足元に及んだかなあ、と思える昨今です。私にとっては、『早寝島』は旧約聖書、『瓢箪池』は新約聖書なのです。

## 椿の木

石山かつ子

ある日、長男が神隠しに会ったように突然あの世に逝ってしまった。まだ十八歳で大学入学式まであと数日の出来事であった。

頭の中ではもう居ないと分かっている、少年達の白いシヤツの通学の姿を見るとその中に長男がいるのではないかと探している自分がいた。そして、いつの間にか家にこもりつきりになってしまった。

そんなとき、お友達が「俳句の会に来るだけでよいから」と俳句の日には家まで迎えに来てくれた。

当時、岩槻には明世先生の指導する会が二つあり、雛の会は若い人達が多かった。どうでも思っ入れてもらった句会にいつの間にか心癒され今ではどっぷりと浸かっている。今では生活の一部となっている。

実家の庭に大きな椿の木がある。隣の杉の木に雷が落ちてその木と共に枝が折れて、幹に洞を作っていた。傷ついた幹でも枝葉を伸ばし生きつづけている。幼い頃、かくれんぼをするたびこの木に登って葉の中にかくれたが、その生命力の

強さに感動したのを覚えている。先日里帰りしたとき庭を歩いた。昔より小ぢんまりしているような気がするの聞いて見ると、二階より大きくなってしまったので植木屋さんに丈を詰めてもらったと言う。一本の椿で赤白絞りと咲き分ける木は当時としては珍らしかったと思う。

母が「いつかこの椿を俳句にしてね」と言ったのを思い出した。でも椿を見たから俳句を詠めるという訳にはゆかない。私の場合、椿を見ることが俳句を作ることとは同じではなく、その物を見たから俳句を作るのではなく、椿を見ることも俳句を詠むことも何かを知る喜びとして同等なのだ。だから椿の花を見た時の嬉しさや驚きを思い出しながら、その時の感動を引き起すものが存在しないか探す。

最近では生活が便利になり、一年中温度設定した家に住み、果物も花卉もいつでも手に入れることが出来る。季節が薄れてきているのではないかと思う。

昔は「藤の花が咲いたら綿の種を播け」「つつじの花が咲いたら藤取り」「葵の花がてっぺんまで咲きのぼったら梅雨が終る」「西瓜が早く出来ると秋冷が早い」などと、自然暦を聞いて育って来たが、最近では全くと言って良いほど聞くことも無くなってしまった。自然暦は先人達の経験と知恵の所産であるが、季節を覚えることとどこか通じていると感じる。こんな自然暦を忘れずにこれからも俳句に拘わってゆきたいと思う。

## 一雨先生の玉子焼

大村 節代

水明発行所は、浦和駅にほど近い、昭和初期に建ったクラシックなアパートの一階に居を構えている。

平成十九年に「浦和パルコ」が浦和駅前に開業するまでは、発行所夏行はじめ殆どの句会はここで行なわれていた。ご多分にもれず、今はパルコで行なわれている第一例会も、長い間、発行所が会場であった。

発行所は、日本家屋なので、襖で仕切られた六畳間三部屋と総務の部屋から成る。その襖を外し、机を並べ、人数分の座布団を押し入れから出して整える。第一例会に入会して、それらの作業を前日に茂木和子さんが下準備をして、当日は山本松枝さんがなさっているのを知って、お手伝いに何うようになった。

第一例会の日は、十二時頃に松枝さんと私、それに何時の頃からか山中順子さんも参加されて、会場の整備を始め、十二時半頃には会場が出来上がる。この頃には出井一雨先生も羽生から到着されて、四人の楽しいランチタイムになる。

私達のお弁当は皆それなりであったが、一雨先生のお弁当は素晴しかった。漆塗の二段重ねのお弁当箱に、奥様手作り

のおかずが綺麗に詰められている。おいしそうですなと私達が覗くと、先生はちよっぴり照れて、嬉しそうに笑っていらした。

ある時、一雨先生のお弁当に欠かさず入っている見事な玉子焼を、一切ずつ下さると言う。やった私は頂こうとしたが、一瞬早く、心やさしい松枝さんが「奥様が早起きされて作られて、二時間もかけて先生が持っていらした玉子焼を、申し訳なくて頂けません」と辞退された。すると先生はそうかあとバクツと召し上がってしまった。玉子焼が食べたかったなあ、残念だったなあと食いしん坊の私は今でも思う。

一時から第一例会が始まると、遥か上座に並ばれた紗一元主宰、左右に星野明世先生、山本紫黄先生、出井一雨先生等々のなつかしい先生方も、松枝さんはじめご出席の先輩の方々も、鬼籍に入られてしまった。目を閉じると昨日のように、あの時の光景、あの時の騒めきがよみがえる。

長い間続いた発行所の座布団文化も、五明昇さんのお力によって、その素晴らしい発想によって、一、二三年前にモダンな日本式洋間（畳の上に絨毯を敷きテーブルと椅子を置く）に生まれ変わった。

今や水明発行所では、正座して足の痺れる事や、座布団の出し入れ等は昔話になった。そして発行所の句会は、椅子に腰掛けて行なえるようになった。さらに総務部、編集部も専用の日本式洋間で快適に過ごしている。

発行所にいらした事のない会員の方は、日本式洋間を見物方々、遊びにいらして下さい。お待ちしております。

## わが青春後期

五明 昇

人生は一生だけではなく、二生を生きる気概が大切だと思う。社会人として、市井の生活者として、二つの人生を精一杯生ききってこそ本当の意味での意義深い人生と言えるだろう。その意味で、退職後に生来の希望である「文学するころ」（亀井勝一郎）にめぐり逢えた自分は本当に幸せ者だ。年齢は後期高齢者の仲間入りをしたが、精神的には青春後期真っ只中のつもりで頑張っている。

二〇〇九年一月二十三日、前年に社会人生活を卒業した私は「余生こそ本生」の信念のもと俳句修養を志し、星野光二前主宰が講師を務めておられたヨークカルチャー俳句教室の門を叩いた。この日が先生の暖かいお人柄に触れ、俳句の奥深さに魅了された運命の日となった。以来十二年、俳句と『水明』無しには夜も日も開けぬ日々を過している。

『水明』への投句は〇九年四月号の「新人集」（三句）が最初である。その後一年ごとに例会・句会への参加を増やす一方、姉妹誌ともいえる若狭の『鳥羽谷』にも入会（一〇年、十四年同人）して句域を広げていった。入会以来の総作句数は一万八千八百八十三句（年間平均千五百句、二〇〇七年七月現

在）で全てをパソコン内で管理している。

この間、新珠賞（一〇年）、水明賞（一四年）、季音賞（一七年）受賞を経て、一九年に季音・雪欄に昇格して現在に至っている。また第一句集『花林檎』（二四年）、第二句集『道草』（一七年）の上梓の機会を与えて頂いたのは身に余る光栄であった。なお水明の合同句集「水明抄」には『第十四水明抄』（〇九年）から参加している。

水明行事は入門以来出来る限り皆勤を心掛けているが、中でも実行委員、実務委員を務めた創刊八〇周年（二〇年）、通巻一〇〇〇号（一三年）、創刊八五周年・主宰就任一〇周年（一五年）の記念事業や、数度に及んだ若狭訪問、二度の高野山大会や有馬、舞子を含む関西夏行は忘れ難い思い出。運営面では一四年十月からは常任運営幹事・事務局長を命じられ、水明事業の円滑な遂行に微力を尽くしている。

前主宰を補佐した埼玉県俳句連盟（一一年〜）、さいたま文藝家協会（一二年〜）では、事務局、運営委員などを務めた後、現在は参与、理事の任にある。昨年からはさいたま市浦和俳句連盟（星野和葉会長）でも運営理事の末席を汚している。思えば変化に富んだ充実した「ひと昔」であったと思う。水明は今年、創刊九〇周年の記念すべき節目を迎えた。諸先輩が築かれた悠久無限の歴史に比べれば、その最後のただか十余年を駆け抜けただけの自分の経験は、まさに「蝸牛角上の争い」に過ぎない。しかし、現在の誌友・同人の全てが、それぞれのやり方で日々の俳句人生を充実させる以外に水明百年への王道はあり得ない。わが青春後期ももうしばらくは続くことになろう。

## 平成最後の秋

境 延昭

元号の平成は三十一年の四月で終り、五月から新しく令和に変わった。従って平成三十一年には夏と秋が無い。平成の最後の秋となった三十年秋のあの日が忘れられない。

この年水明第四代主宰星野光二先生は前年暮から入院のまゝ越年され、新春俳句大会は山本鬼之介副主宰が代行された。春には回復され三月に熊谷の春の吟行会、六月の紗一忌、そして七月の全国大会と夏行など多彩な行事に臨まれた。しかし八月末にはこの年二度目の入院を余儀なくされ、りんどう忌は副主宰の代行。九月の常任幹事会は中止した。

そのような折、幹事長の山中順子さんより電話、お見舞いの日時の指示があった。それが九月二十一日の夕刻、私の都合で三十分程にずらしてもらった。研修部長として十月に実施予定の水明塾の相談の積りであった。病院の玄関で副主宰、幹事長と落合い指示されるままにマスクを着けHCUに向かった。ナースセンターに隣接した高度治療室、普通の病室とは違う物々しい部屋の様子に驚いた。主宰を挟んで右手にご令室の和葉さん、左手に副主宰、幹事長そして私の順でパイプ椅子に座った。主宰の右足が私の面前にあった。痛々

しい様子にしては顔はふくよかで血色も良く見えた。

滞っている経理処理をはじめ水明誌上の主宰選など結社運営上急を要する懸案があった。光二主宰は朝から不具合の補聴器を頻りに気にされ、時に和葉さんが耳元に口を寄せ取り次いだ話が度々中断された。中断の時主宰の視線は足元に向き、そこに私の顔があった。水明塾のことなど話題に出来る状態ではなかった。私は咄嗟に自分の手帳に「入院・療養の間、主宰業務の一切を副主宰山本鬼之介に委任する」と走り書きして隣の順子さんに見せた。順子さんから副主宰へそしてそのまま和葉さんに渡された。主宰は一瞥の後、また補聴器の不具合をひとしきり零された。その間、私は足元に向く主宰の視線を感じていた。重い時間の経過であった。順子さんが「いかがでしょうか」に「これでいい」との一言。和葉さんがそのままを清書、水明主宰星野光二と記名された。平成三十年十一月号表紙裏に掲載された一文がそれである。月が替わって再度三人で主宰を見舞った。前回同様の高度治療室、一見して重篤な病状であった。腕が脚ほどにむくみ紫色に腫れ、話が出来る状態ではなかった。訃報に接したのはそれから間もない十月二十九日早朝のことであった。

星野光二先生には兄弟子として二年半、主宰として十三年を仕えた。主宰就任早々の春の吟行会で、現主宰鬼之介さんの兄上、紫黄さんが「度胸とは星野光二朝桜」と詠まれたのが昨日のこの様である。青森と金沢の二回の吟行旅行をはじめ高野山の関西夏行、若狭訪問など多くの旅を一緒に酒を酌み交わした。告別式の遺影は阿々大笑、ややおどけ気味の表情で磊落なお人柄そのものであった。

## 私と俳句

日高 道を  
(徹改メ)

私と俳句の出会い、それは今から三十年ほど前のことである。私は会社業務の関係で米国に約七年間赴任したが、その時現地の人たちとの交流に際して、日本文化の教養が非常に重要であることを痛感し、帰国後、たまたま手にした俳句入門書で俳句を少しかじることとなった。

「秋風や眼中のもの皆俳句

虚子」

しかしながら、その後私は社命で金沢、大阪、広島と足掛け十三年間の地方赴任となり、業務の多忙を言い訳に、俳句の書物は本棚の奥で埃をかぶることとなった。

その次の出会いは、私が十三年間の单身赴任生活を終え、埼玉への帰郷を許されたときである。

埼玉では高校の同級生達が待ち構えていて、さっそく浦和レッズの応援やら、飲み会やらで旧交を温めることとなったが、その同級生の中に、当結社同人の北山建治郎君がいて、彼から盛んに俳句への勧誘を受けた。

或る時同じ同級生仲間の一人が某大企業の社長となり、文藝春秋の「同級生交歓」欄に取り上げられることとなり、我々の写真が紙面を汚すこととなったが、その時の紹介記事

を書いた北山君の文頭の一句は私を瞠目させた。

「反戦のピラを片手に卒業す

建治郎」

その後も北山君からの勧誘に対して、「まだ仕事があるから」と断り続けていたのだが、ついに私も完全リタイアとなり、いよいよ私の句会デビューと相成った。

平成二十八年八月、北山君の勤務先の俳句倶楽部であった「りそな俳句会」にて初投句。

「初秋や風のゆくへを背伸びして

徹」

この句が故星野光二前主宰の特選を頂き、私を俳句の世界へと誘ってくれた。

その後「芽吹句会」「新樹の会」「円卓の会」に参加。この中で忘れられないのが芽吹句会の故半谷比奈子さんだ。平成二十九年の全国大会の席で同席した比奈子さんから芽吹句会へのお誘いを頂き、すぐに入れて頂いたが、その後ある意味母親のように親身にご指導を頂いた。

不幸にして病を得て帰らぬ人となられたが、その病床にも入室を許され、最後まで細かなご指導を頂き、本当に惜しい方を失ったと思っている。

「流さるる雛に一夜の灯をともし

比奈子」

一昨年の十一月より会の会計を担当させていただいているある時「なんで私が？」と思いつながら会計帳簿をめくっていると、中から「会計は徹さんへ」という光二前主宰のお言葉を書いた和葉さんのメモを発見。

これは前主宰のご遺言と思ひ、私の運命と思つて、今後とも会の発展のために微力を注ぎたいと思つている。

「春風や闘志いだきて丘に立つ

虚子」

## 水明に入会して七年

保坂 翔太

俳句を始めた当初は、松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶、正岡子規、高浜虚子を知っている程度で俳句の知識は殆どありませんでした。平成二十五年四月に、ネット検索で目にとまったのが大宮よみうりカルチャーセンターの俳句講座「たのしい俳句」(大宮読売俳句教室)でした。六十七歳の時です。

この俳句会は長谷川かな女が創刊した水明に属する句会であるということは暫くしてから分ったことです。当時の選者は主宰の故星野光二先生でした。俳句を一から教えていただけると思っていました。即実践ということで、宿題の兼題により三句を詠み、次回の句会に提出するようにとのことでした。こうして俳句人生が始まりました。

とはいっても、このままでは経験豊かな句友に追いついてゆくのはとても無理だと感じ、通信教育において、俳句の基本である一句一章と二句一章、取り合せと一物仕立て、比喩の直喩と暗喩、擬人法、リフレイン、オノマトベ、韻律と調べ、余韻、古文法、俳句の歴史、鑑賞の仕方等々を一から学びました。

句会での選句と句評にも戸惑いを覚えました。句友が詠

んだ句を短時間で評価し、選句した理由を述べることは難儀でした。自分の力量が問われていることを考えると緊張もしました。しかし、これらのことがすべて句作の源であることも事実です。水明に入会して七年余となりました。未だ浅学にして非才であることは言うまでもありません。

かな女が、高浜虚子のホトトギスへ投句するようになったのは明治四十二年、二十二歳の時と言われています。大正二年に虚子の始めた婦人俳句会で頭角を現すようになり、女流俳句の先駆者の一翼を担うことになりました。大正十年、夫である長谷川零余子が「枯野」を創刊したことに伴い、ホトトギスを離れ、その後、零余子が亡くなったのちの昭和五年に水明を創刊したことは、皆様がご存じの通りです。

昭和初期のホトトギス隆盛時の4Sといえは水原秋桜子、高野素十、山口誓子、阿波野青畝ですが、女流俳句の先駆者の4T+Hといえは中村汀女、星野立子、橋本多佳子、三橋鷹女、杉田久女といわれており、その中に女流俳句のリーダー格といわれている長谷川かな女の名前がないのは不思議なことです。

この度、水明の歴史の一端を顧みる機会が与えられ、長谷川かな女が創刊し、長谷川秋子、星野紗一、星野光二、そして現在の山本鬼之介主宰へと引き継がれていることを肝に銘じ、一代限りで廃刊になる俳句結社がたくさんある中で、九〇周年を迎えた水明の益々の隆盛を切に願っています。

今後も、人生を豊かにしてくれる俳句を「初心忘るべからず」「継続は力なり」という言葉を胸に皆様の熱心な論議に耳を傾け、参加し続けたいと思っております。



## かな女の城と紗一

星野 和葉

偶然出てきたA4紙一枚、何かの本からコピーしたものであるが、紗一先生が書かれたものである。タイトルは「かな女の城」。

紗一（以下敬称略）が旧制中学四年、俳句を始めたばかりの頃、父親（星野茅村）に連れられて、かな女宅で行われた俳句会に出席した。

かな女は、夫零余子が急逝して間もなく、新宿、柏木の家が火災に遭い、浦和に引越して来られた。その家は木造の平屋で、紗一の想像していた家とはかなり違って見えた。

父親の陰で恐る恐る玄関の前に立った。家の中に入ると、正面の床の間よりやや右手に座ったかな女が見えた。その姿は、かな女城の城主のようであった。日本で一番偉い女の俳句の先生と聞かされていた紗一少年には、そう映ったのである。城の女城主にまみえた時の感激は強烈であったようだ。その頃かな女は、まだ五十歳前後である。優しい眼差しであっても何処かきりりとしていたのである。この家が紗一にとっては、城か神社のような神聖な場所になったのである。

やっと俳句に傾きかけた紗一であったが、戦争が始まり、かな女の城で壮行会をやってもらい戦場に。

二十一年六月帰還。

南瓜葉の影す机に帰り来し

紗一

書店を開きたいという夢を持っていた紗一が、岩波文庫など集めた文学書が、四つの本箱に詰まって帰るのを待っていた。「これは私の城である」と言っている「南瓜葉」は戦後の食糧難に母親が作っていた南瓜が元気に育っていた。

紗一が真っ先に訪ねたのはかな女の城であった。すぐに俳句に復帰し、若手の俳人達と「七星会」という会を作り、活動を再開したのは二十一年の夏である。頼もしい若い力が、かな女をがっしりと支えたであろう。

虫の卵を育てていた冬の芝

第二句集「雨月」の最後の句（十三年）であり、かな女はこの後、二十年までは戦争もあり、冬の芝ではないが冬眠のように空白にしている。勿論、作句は続けていた。

水入れて春田となりてかがやけり

灯を明ふせよと新涼のみことのり

水が入った春田に、かな女は再び平和の来る日が近い事を予知していた。二十年八月十五日。はじめて聞く天皇のお言葉を、かな女は「灯を明ふせよ」で表わした。

野狐ほどもなし我身がさ春風

掲句は、かな女の自画像であると言われている。やさしい温みのある春風にも揺らいでしまいそうな小さな身で、かな女はかけがえのない城を、生涯守り続けたのである。

## 御縁

茂木 和子

私が浦和に移り住んで早や五十年余り、俳句と出合ったのはその十年余り後、当時公民館で行われた俳句講座に参加した事からだ。講師は嶋村花水さん。講師紹介では女流俳人で有名な長谷川かな女の従兄で俳句誌「水明」の重鎮にして、水明白萩句会の指導者であると云う。先生は八十歳位、体は小柄で丸顔に丸眼鏡、お元気でとても年齢には見えない。少し気難しく短気な感じだが面倒見がよく気遣いもあり、生徒には慕われていた。

講座は一週間に一回、季題又は雑詠で五句位。生徒は約十名位で五七五のリズムに乗れず指を何回も折って数えたりして楽しかった記憶がある。講座は四回位で終了し、あとは句会として続いた。句会は「つゆくさ」と命名し勉強をしていたが一年後先生が急逝された。その後公民館の計らいで新しい先生を迎え三十年余り続いたそうだが私は途中で退会してしまった。先生が亡くなられた後、酒井きん子さんより白萩句会へのお誘いがあった。生前花水先生が、そのうち新人が入会するからと私の事を話されていたという。素直に入会さ

せて頂いた。白萩句会の指導者は岡田銀溪先生だった。大柄な体格に包容力が一杯、指導も分り易く初心者には特に親切丁寧だった。この時期にもっと俳句にのめり込んで真剣に対峙していたならと後悔している。

酒井さんの紹介で遠山喜美子先生（当時水明編集長）が指導されている谷田公民館に月一回通うようになった。助手として小林美夜子さん（当時水明編集部員）と一緒に来られていた。しかし遠山先生も一年足らずで他界され、その後小林美夜子さんを中心に続けられた。小林美夜子さんが、主宰星野紗一先生の妹さんと知ったのはずっと後だった。その後美夜子さんの強引な勧誘で編集をお手伝いする様になった。当時の編集長は高島屋にお務めの小内春邑子先生、編集の仕事は古我菊治さんが一手に引き受けられていた。菊治さんは、かつて「日曆」と云う文学誌で編集に携わっていたと聞いた。菊治さんはとても厳しく常に緊張感が走った。咳一つ、頁をめくるのにも気を使う。後に編集長になられた池上貴誉子さんも御一緒だった。編集と発行所とは同じ場所にあったので、発行所の方とも顔見知りとなり佐々木久代・波多野寿子・長谷川エミ・山本松枝さんとも親しくさせて頂いた。

紆余曲折があったけれど現在まで沢山の先生、先輩、友人に恵まれ何と幸せ者と思わずにはいられない。

長谷川かな女が明治に俳句の種を蒔きその芽を大切に、大正、昭和、令和と受け継ぎ育てて来た沢山の人、更に成長を続け羽搏こうとしている現在の方々。今九十周年を迎えこの一隅に生かされている御縁に感謝、幸せを感じている。

## 水明全国大会の今昔

山中 順子

私が水明の行事部に係わったのは今から三十年位前からである。最初は大会資料の作成の手伝いからで当時はパソコンが無いので手書で、一日中かかり夜八時頃まで部員で作り上げた。その頃の大会の会場は常盤会館で、何とも地味な大会のように記憶している。しかし、会員は今の五倍は参加した

と思う。若狭の五人衆、和歌山、大阪、そして東北、北海道と全国から集って来た。大会は私は走り使いのためいわれた事を何とか手伝っていた。この時の行事部長は出井一雨さんその頃の部員は私の大先輩の方達ばかりで右も左も唯うろろうとしていた。次に東武ホテルに会場が変わり行事部長として吉田静二さんに初めてお目にかかった。この頃になると私も少しは分って来たので大会・前夜祭と忙がしく動きまわった。紗一主宰の下みんな若かった。

何年か東武ホテルで全国大会を開催していたが、ある日突然このホテルが倒産してしまったのを新聞で知り、五月の全国大会だけは何とかしてくれと頼みやつと五月に開催出来た。こんな記憶も今や遠くになった。

次の会場を部長とワシントンホテルに決定してここで二年

大会を開催した。二年目にトラブルがあり光二前主宰と相談し、この頃バインズホテルが出来たので今に至っている。

バインズホテルは少し高額であったが、思い切つて決めてよかつたと思つている。本格的なホテルのため全国大会も盛大で華やかで遠方から来て下さった会員の方達とも親しく語らうことが出来た。吉田静二部長の下、女性陣の活躍で充実した全国大会を開催出来ていた。そして、突然静二部長が病に倒れ私とその責を負うことになったが、何十年という経験は自然に体が動いた。それに加えて幹事会の応援と珊瑚の会が補助してくれたことは本当にありがたいことである。

私が部長を拝して十年になるが、いろいろ改革した点は多々ある。高齢化して来ている会員のことを考え前夜祭を無くしたこと、大会を一日で終了して夕方五時から親睦会に切り替えた。そして余裕も出来、親睦会では福引なるものを盛り込み会を参加者全員で作る方法を実行、成功した。又選者選を廃し主宰選だけにしてその受賞の内容もがらりと変えた。これも成功した。伝統ある水明の全国大会をがらりと変えたことはこれからの水明行事にとって何らかの力になればと考える。そして今年90周年の記念大会を期待していたのがコロナという得体の知れないウイルスに阻まれ十一月に延期したが、思い切つた大会が出来ないことが残念でならない。

かけ足で私の行事部三十年を記したが、私は水明に入会して俳句を学び、諸先生方と語つた何年かは宝だと思つ。これからも行事部に多大なるお力を頂きたくお願い致します。90周年のお祝の会は絶対に成功させたいと思つ。

# 水明創刊九十周年特別作品発表

実行副委員長 境

延昭

## 応募概況

水明創刊九十周年記念特別作品の募集案内が水明誌上で発表されたのは、令和元年九月号であった。年を越してコロナウイルスの蔓延による政府の緊急事態宣言もあり、記念大会・祝賀会については当初予定した六月から十一月に繰延べの判断を余儀なくされた。しかし特別作品の応募については、水明の記念特別号の発行もあり予定通り三月末で応募を締め切った。

応募総数は二十一篇、その内二部門への応募が一名あり、応募者総数は二〇名であった。五年前の八十五周年の際の応募総数二十九篇、応募者二十三名から減少は残念ではあるが、ここ数年の会員の極端な減少とコロナ騒ぎによる各種活動自粛の異常事態を思えば納得せざるを得ない。

その中で、応募者二十名の中で約半数の九名が前回から連続しての応募であり、そして十一名が新しい挑戦者であった。この結果を見て、その見事なバランスが喜ばしく確信をもって水明の未来に希望を繋ぐことが出来た。その上埼玉県内各地に加え若狭、神戸そして横浜からの応募があったことは大

きな喜びであった。

一方で論客の多い水明にあって、評論部門に応募者皆無であったことは意外で極めて残念であった。

## 応募作品一覽

### 【俳句部門】十六篇

- ① 音の狩人 行田 近藤 徹平
- ② ふるさとの正月 若狭 鳥羽 和風
- ③ 「生」 さいたま 青木 鶴城
- ④ 子年 狭山 矢島 清
- ⑤ 時を照らす さいたま 保坂 翔太
- ⑥ 四季を守る さいたま 井口 俊晴
- ⑦ 八十路爛漫 神戸 森本 早苗
- ⑧ 渋沢栄一翁を偲んで 深谷 井上 燈女
- ⑨ 秩父沿線 鴻巣 大塚 茂子
- ⑩ 一音一景 さいたま 日高 道を
- ⑪ 四季の神戸 明石 田寺 玲子
- ⑫ 産土点描 さいたま 丸山 マスミ
- ⑬ 無題 さいたま 田中 章嘉

- ⑭ 苦楽を共に  
さいたま 池田 雅夫  
⑮ 花菜明かり  
さいたま 井上 玲子  
⑯ 時の鼓動  
横浜 正木 萬蝶

【エッセイ部門】五篇

- ① 若狭水明会の先人を偲ぶ  
若狭 島津 初花  
② 無二  
さいたま 青木 鶴城  
③ 茶茶丸の戯言  
さいたま 白田 みち  
④ 災害奮闘記  
さいたま 橋本 京子  
⑤ 「象」のオムニバス  
東京 菊池ひろこ

【評論部門】応募無し

受賞作品

【俳句部門】

- 正賞 四季を守る  
さいたま 井口 俊晴  
準賞 音の狩人  
行 田 近藤 徹平  
佳作 時を照らす  
さいたま 保坂 翔太  
佳作 苦楽を共に  
さいたま 池田 雅夫  
佳作 時の鼓動  
横浜 正木 萬蝶  
佳作 「生」  
さいたま 青木 鶴城

【エッセイ部門】

- 正賞 該当無し

選考経過

応募作品は締切後早々に作者名を伏せてコピーされ選考委員の元に送付された。各選考委員は各自慎重に審査をし、各部門ごとに順位付けをした上で選考委員会に臨んだ。選考委員会は五月二十六日発行所で開催された。この日はコロナウイルスによる緊急事態宣言が四月七日に出され一か月半ぶりに解除された日であった。日頃にはない緊張感の中で、厳正かつ熱の入った議論を重ね受賞者を決定した。

ここで敢えて指摘しておかねばならないことがある。残念ながら応募規定を外れた作品があった。応募規定は応募者が守るべき最低限のルールである。水明の内外を問わず各種応募に当たっては是非心してほしい。

【俳句部門】

事前に各選考委員が全作品を吟味し順位を付けて持ち寄った。その段階でまず選考委員相互に意見を述べ合ったが、声の大きさで競う訳にはいかない。相对評価のため、各自の眼鏡による七位までの順位付けを計数化した。その結果、作品番号①⑤⑥がほぼ並び立ちその他に抜きん出た。その下に又一団で③⑭⑯が並んだ。この結果は予期以上に明瞭であった。改めてこれらの作品に立ち入って議論した。正賞は作品番号

- 準賞 無二  
さいたま 青木 鶴城  
佳作 災害奮闘記  
さいたま 橋本 京子

①⑤⑥のいずれかとの確認の元、表記の正確性・文学性・主題の良否の三点を中心に議論した。三作品の出来は伯仲しており、熾烈な議論を重ねた末、正賞を⑥、準賞を①と⑤にすることを決した。佳作には、その他の作品より数段優位にある作品番号⑭⑯⑰の三作品を選んだ。

作品の中に誤字そして文語、歴史的仮名遣いの誤記があったのが残念であった。今回、固有名詞の多用が目立った様に感じた。分らぬ地名などは読み手に負担がかかる。逆にイメージが定着した地名では、句が地名に凭れ掛かってしまう。

その上で、表題の大切なことを強調して置きたい。このことは選考委員共通の認識で、作品の評価に当たって相応のウエイトを占めた。タイトルは作品の顔と言ってよい。

## 【エッセイ部門】

エッセイは文芸の一ジャンルとして確固たる座を持つ。雑文では決してない。小説の様なフィクションとは違い、自らの体験、トピックスを基にそれに関わる感想や思索で構成される。短いが故に文章力が求められる。応募数が五作品でもあり、作品一点ごとを組上げて評価した。作品①は水明に深い繋がりのある若狭の歴史である。作品としての評価には至らなかつたが水明誌上に記事として掲載を考える事とした。③は八十五周年記念の折の準賞受賞作品と表題、テーマとも同じで二番煎じであった。⑤は評論の様でもエッセイの様でもあり、どちら付かずに終わった。エッセイと評論の二

つの作品に仕上げるべきであったと思う。作品②は今回応募の中では秀逸であったが過去の正賞作品のイメージが選考委員の記憶にあり、正賞には至らず準賞に止めた。④は身近なさいたまでの出来事、予期せぬ体験でありルポタッチのリアリティを買って佳作とした。

## 正賞準賞の作品寸評

### 俳句正賞「四季を守る」

前回八十五周年記念特別作品エッセイ部門正賞に続いての快挙となった。力みが無い素直な句柄に好感が持てる。応募作品三十句を並べるとなれば、エッジを効かすと言うかどこかに背伸びの跡が見えるものだがそのような銜いが全く無い。そのことが逆に作者の力量を見せる結果となっている。埼玉に住む者にとって、見沼田んぼは馴染み深い場所である。人呼び込む名所旧跡ではないが、手付かずの自然が広範囲にわたって残されている。

### 見沼田に春を告げんと鷺舞へり 雪晴の見沼の空へ鳶翔り

作品は冒頭と末尾に「見沼」を詠み込み、三十句全ての舞台がその地であることを示す。春夏秋冬、バランスよく句を並べ、四季折々何度となく足を運んだ結果の作品である。「其処を詠まずに其処で詠め」の先師の誡めがあった。観念に陥ることなく句の全てに具象性があり、情景が難無く読み手に伝えられている。

### 俳句準賞「音の狩人」

先ず表題が詩的で魅力的である。音があり、音を意識させる句を揃えた。テーマ設定と言うか、作品制作の意図が明確である。水明第三代主宰星野紗一師は「触感俳句」を提唱し、第四代主宰星野光二師もそれを踏襲された。作品は其中で聴覚、音に絞って作句に挑んだ。三十句の全てに音を意識できる。音そのものを詠まずとも、そこに音を感じ取るこゝとが出来た。水明創刊九十周年を寿ぐ挨拶句を入れ込む余裕も見せている。惜しむらくは言葉遣いにやや乱暴さが見えた。具体的には、古典的な助詞「や」の後の口語調の表現や片仮名の多用はマイナスに作用した。何分タイトル「音の狩人」で「音」を以って挑戦の作者である。舌頭百篇、句のリズムにも配慮が欲しかった。

盃を添水鳴るまで宙に置く

酒に目がない作者が盃を口に運ぶ途中で添水の音を待つている。まだ音は無い。しかしやがて鳴る添水の音を確認してじっと待っている。正に音の狩人である。

### 俳句準賞「時を照らす」

当初一読した時、最も多く句に印を付けたのはこの作品であった。二読、三読吟味する間に幾つかの句に疑問符が付いた。推敲が過ぎたのかも知れない。作者の詩心がストレートに響いてこない。例えば「嫋嫋と……」漢詩では赤壁賦以来

手垢の付いた言葉は極端に評価を下げた。表題についても今一步工夫が欲しかった。三十句を束ねる表題として作者が意図したことが伝えられたのか疑問が残った。

すかんぼや山鳩の声篋せり

今回出会った秀逸の句であった。修辭を避け、野趣と言うかひなびた味わいと風格を相備えている。比類のない素質を見せてもらった。

### エッセイ準賞「無二」

硬筆のお手本のような端正な手書きの文字に好感を持つ。誤字脱字などは勿論、言葉の用法にも誤りは無い。

中年、相手は定年退職後の大人の男との十五年間にわたる交友の記録である。例によって酒、カラオケ、ゴルフに始まる交友が年に一度の登山で親密を深めていく。その山行記録を太い縦糸にした作品である。「無二の親友」と言ったのは相手、その彼が「気持ちの整理がつかない」と疎遠になる結末。友情とは……戦友はともかく旧制高等学校の寮生にあつたような友情、既に過去のものなのだろうか。作者が読者に問うている。「エッセイ」を遺したモンテニユにとつても友情は男女の愛以上に哲学的テーマであった。

作品に挿入の八句が違和感なく作品に馴染んでいる。

今回の記念特別作品、受賞者は勿論応募の各位が水明の現在に続く次の時代を背負ってくれるのは間違いない。更なる精進と活躍を期待して止まない。

正賞 四季を守る 井口 俊晴

見沼田に春を告げむと鷺舞へり  
親子して桜並木を一万歩  
転びしが子は花びらを手放さず  
犬の背に光こぼれて花吹雪  
菜の花の道にちんまり道祖神  
風そよろ川辺に群れる花薊  
せせらぎを覗き込む子や蝌蚪の群れ  
空よぎるへりの爆音黄砂降る  
光降る青葉の道を閘門へ  
朝日浴び萱草の花あかあかと  
梅雨に入る鴉は一羽枝に濡れ  
蒲の穂に風さはさはと鉾揺らし  
初蟬や肩車して男の子



雪川寒妖川冬時み秋穠粟稻土稲夕農炎  
晴底林し沿耕雨空深田輕刈の光焼道天  
のにをきひの去澄むの緑なへ雀と朝の轟に影に  
見鯉は抜はきを驅ける翁は正し歌くち息  
沼は動て尊伝説枯尾白し  
の動か尊伝説枯尾白し  
空か尊伝説枯尾白し  
へずき一枯尾白し  
鳶寒のの尾白し  
翔のの尾白し  
り朝宮花

# 準賞 音の狩人

近藤 徹平

二拍子を揃へ三代四方拝  
初場所や全館揺らしよいしよーつ  
初緑迎賓館のファンファーレ  
春北斗タクトの始動待っ奏者  
日輪を背に眩ます揚雲雀  
終バスの尾灯消え去り啼く蛙  
ママちやりのドミノ倒しや春疾風  
「幸福」駅の鐘撞く子連れ風光る  
藤棚やスキヤットハモる媪衆  
ぴーひやらら結社卒寿の祭笛  
雲海や法螺貝響く剣ヶ峯  
蝉時雨鎮守の森の土俵  
渋滞や窓いつぱいの揚花火

山里やラジカセに舞ふ夏神楽  
目眩めく弁財天の佞武多かな  
玉音聞きし妣の泣きぼくろ敗戦忌  
進駐せしジープの車列色なき風  
虫時雨信号赤の車輛基地  
「全戸避難」を喚くスマホや颯風来  
天の川耳を澄ませば腕時計  
独房の静まり返る朝や鴟  
鳴き砂にニンフの気配寝待月  
「東洋の魔女」の伝説視る夜長  
盃を添水鳴るまで宙に置く  
虎落笛山河を裂きし震度七  
呼鈴やパジャマの羽織るちやんちやんこ  
津軽路の哮る太棹吹雪の夜  
寒柝や無愛想なる胴間声  
十二がつ「ふろいで」うたふ一ねんせい  
境内の爆ずる篝火除夜の鐘

準賞 時を照らす 保坂 翔太

樽酒に氏子の木槌初日の出  
硬券の「幸福駅」や年迎ふ  
初雀軒の混声カルテット  
猫の髭引つ張る幼児冬ぬくし  
薄氷の解くる童のたなごころ  
下萌や乳歯を見せて笑ひをり  
押し寄する潮のほひ山笑ふ  
少年の瞳が光る春の海  
春の海処女航海の練習船  
桜貝愛しき日々を拾ひけり  
畦道を点すがごとく露の臺  
虎杖や集落つなぐ細き道  
すかかんぼや山鳩の声訝せり

冬 茜 手 話 の 少 女 の 笑 み と 笑 み  
ハ ン ド ベ ル 幼 稚 園 児 の ク リ ス マ ス  
間 歇 泉 の 如 き S L 山 眠 る  
枯 蠟 螂 意 固 地 を 通 す 山 男  
よ み が へ る 父 の 故 郷 通 草 の 実  
秋 扇 話 し 上 手 に 聞 き 上 手  
無 花 果 や 禅 問 答 の 爺 と 婆  
静 寂 の 写 経 の 御 堂 ち ち ろ 虫  
秋 日 和 九 輪 の 上 の 千 切 れ 雲  
寝 つ か れ ぬ 秘 境 の 宿 の 鹿 威 し  
溪 流 に 星 降 る ご と く 螢 の 夜  
ふ る 里 の 田 ん ぼ の 匂 ひ 夏 帽 子  
老 農 の 五 尺 五 寸 の 草 を 刈 る  
青 葉 風 歩 荷 の 通 ふ 尾 根 の 径  
遠 山 の 白 より 青 へ 夏 近 し  
朝 日 射 す 大 断 崖 を 岩 燕  
嫋 嫋 と 水 色 の か ぜ 糸 柳

準賞 無 二一

青木鶴城

「俺たちは無二の親友、出合いは運命だね。」彼はいつもそう言った。

彼との出合いは、一五年ほど前のことである。大手の建設会社を定年退職し、私の会社へ入社してきた彼は、背丈が一八〇センチもあるうかの大男であった。

さばけた仕事ぶりが気に入って、彼とは間もなく酒やカラオケ、ゴルフと、何十年も前からの友宜しく一気に親交を深めた。

夕涼みいつもの席の繩のれん

仕事帰りの一杯のある日、彼から毎年一つづつ百名山への登山をやってみないかとの提案。山などやったことがなく戸惑いはあったものの、酔った勢いで何となく同意をしまっていた。

霊山へ踏み出す一步雲の峰

間もなく彼から「富士登山計画書」が渡された。それは几帳面に手書きで書かれた実に立派な計画書であった。行き帰りの車のルート、泊まる宿や山小屋、登山ルートと食事の場所、準備する備品や必要な経費までがびっしり、詳細なタイムスケジュールとイラストを交えて見事に作成されていた。

二〇〇八年八月二四日夕刻、埼玉を発ち、富嶽温泉に宿泊。

翌早朝に富士吉田の浅間神社に車を停め登山を開始した。五合目までは順調に着き、殆どの登山者がここからスタートするのを恨めしく思いつつ昼食。その後疲労感の中、予定時間より少し遅れて七合目の山小屋に到着した。

碧空へ行列長く夏の富士

この日は閉山間近の八月最後の週末とあって登山者の数が最高で、登山道は大渋滞。早々に出かけないと頂上でのご来光には間に合わない、というので短い仮眠をとり、夜の九時には小屋を出発した。

ところが暫く歩かうちに頭痛と眠気で私の足が石の様に重くなった。立ったまま居眠りしていると、彼がリュックをツンツン突いて歩けと促した。

結局ご来光は九合目で迎えた。雲海の間こうから昇る太陽は感激ではあったが、高山病と寒さで兎にも角にもこの大変な状況から解放されたい、との思いの方が強烈に記憶に残っている。

山を下りる頃になると、私はすっかり元氣を取り戻したのだが、今度は元々持病を抱えていた彼の膝が須走の下りで悲鳴を上げ出した。彼は途中で「タクシーを呼べないか。」などと冗談ともつかない弱音を吐きながらも何とか下山するこ

とが出来た。

### 踏み入らば無心とならむ夏の山

その後毎年、二〇〇九年に筑波山、二〇一〇年に雲取山、二〇一一年に御嶽山、二〇一二年に大菩薩嶺、二〇一三年に谷川岳、二〇一四年に立山、二〇一五年に八ヶ岳、二〇一六年に乗鞍岳、二〇一七年に燧ヶ岳、と登山を続けてきたが、思い出せば色んなエピソードが残っている。

雲取山では、登る途中で彼の体調が悪くなってしまう下山を決めたが、何と下りのルートを間違える失態で大変な帰路となってしまう。勿論、後日改めて登頂。

### 雪渓を下る 霊風木曾の山

御嶽山では、雪渓を横断するなど思いもよらず、雪渓を避け岩場を登り始めた。他の登山者に戻れと注意されなければ危うくルートを外れるところであった。下りでは、最終のケーブルカーに乗り遅れてしまい、二人途方に暮れてしまったが、幸い、温泉宿の主人が途中で車で迎えに来てくれて事なきを得た。

当然のことではあるが、まさかこの山が間もなく大噴火を起す事など当時は夢にも思わなかった。

燧ヶ岳でも下山中に彼の膝が悲鳴を上げ、歩が進まなくなつた。おまけに濡れた木道で滑って転倒した私までも右肩を負傷。痛みは脂汗が出るほどで、満身創痍の二人は下山することが出来るのか泣きたくなる状況であった。

### 風涼し空と交はるオホーツク

燧ヶ岳での出来事を機に山は卒業することにして、翌年には北海道の周遊旅行を企画した。登山計画書と同様彼の旅行計画書は、手書きの地図を交えた見事な物であった。

### 根室路に地獄を見たる海霧の夜

二〇一八年七月二四日、旭川でレンタカーを借り、彼と運転を交代しながら、留萌、宗谷岬、浜頓別、網走、斜里、根室へと進んで来た四日目の七月二七日のこと、濃い海霧で何も見えない納沙布岬にがっかりで、ホテルに早めのチェックインをした。

夕食までにはまだ時間があったので、酒とつまみでも、と買い出しに行く途中の霧の交差点で、何と大事故を起こしてしまった。

幸い彼も私も命に別状は無かったものの、衝突で逆さになつて大破したレンタカーは、最早廃車状態で使い物にならなかった。

### パノラマとビールの泡と登山靴

彼とはその後も山や北海道旅行の事などを肴に酒やカラオケの回数を重ねていた。そんなある日、彼がどうしても最後に奥穂高岳をやつて終わりにしたいと言いつ出した。

出来上がった登山計画書が、かなりハードなスケジュールだったので、一泊増やした計画への変更を強硬に申し入れたものの、登山日が近づくにつれ不安が募りに募つた。

ましてや、選りに選つて前年に北海道で大事故を起こした七月二七日を跨ぐ日程だった事もあり、出発の一週間前には胸騒ぎが最高潮に達し、とうとう登山を止めたい意思を彼に伝えた。

その日はいつもと変わらず酒を飲みカラオケもやつて、また次回も、と別れた。だが、その後は、「気持ちの整理がつかない。」と私は誘いを断られている。

いつよりか疎遠となりて山眠る

# 水明年譜

## 九十年のあゆみ

昭和5年9月創刊号より  
令和2年8・9月号まで

五明 昇 編

昭和五年

・水明創刊：九月一日  
・発行兼編集人：澤本知水  
・発行所：東京府豊多摩郡杉並町天沼四七七  
水明社

・雑詠選者：長谷川かな女

・表紙絵：長谷川かな女：九月

・座談会「創刊号を評す」：十月

（出席者）長谷川かな女、はる子、佐藤松枝、

高木てい子、開原冬草、高木丁二、草香薫

春、佐藤浩悠、花輪山思郎、尾崎木星、新

田豊、西野川々、澤本知水、杉山十枯

・長谷川かな女王主宰推戴祝賀会（浦和市太田

窪幸楽）：十一月

・常任幹事委嘱：十二月

開原冬草、佐野規魚子、岩崎樂石、高木丁

二、澤本知水

昭和六年



長谷川かな女



・長谷川かな女主宰就任：一月  
・課題句選者推薦発表：一月

開原冬草、佐野規魚子、金子せん女、岩崎  
楽石、亀井初九、高木丁二、尾崎木星、草  
香薫春、庭山曉雲、新田豊、澤本知水

・最初の零余子忌特集号発行：八月

・最初の夏行句会報発表：十月

・長谷川零余子句集刊：十二月（序文：飯田  
蛇笏 装幀：森田恒友 解説：長谷川かな  
女）

## 昭和七年

・課題句選者推薦発表：七月

浅井竜男、佐藤浩悠、星野茅村、石原洪舟、  
久岡杏南子、奥田雀草、半谷絹村

・発行所町名変更：十一月

東京市杉並区天沼二丁目四七七

・表紙絵 島田柏樹：一月から 森田恒友：

五月から

## 昭和八年

・夏行句会：七月（上野無極亭）

・表紙絵 高取稚成：七月から 島田柏樹：

九月から

## 昭和九年

・課題句選者推薦発表：一月

洪木三思、山本嵯迷、加藤不二也、宗久月  
文、山田蛙郎

・金子せん女句集「夏草」刊：一月

・表紙絵 高取稚成：一月から 島田柏樹：

五月から 高取稚成：九月から

## 昭和一〇年

・岩崎楽石句集「鳥の巢」刊：一月

・座談会「水明の前衛」第一回：六月

（出席者）長谷川かな女、高木丁二、澤本  
知水、草香薫春、尾崎木星、山田蛙郎、新  
田豊、関口懷石、森山奇山他

・俳句手帖（水明版）発行：七月（拾八銭）

・岩崎楽石（常任幹事）逝去：十二月

・表紙絵 島田柏樹：一月から 川崎小虎：

五月から 島田柏樹：九月から

## 昭和一一年

・新選者推薦発表：一月 伊藤瓢石

・夏季講習会開催 八月（西多摩郡三田村楽々  
園）

・表紙絵 川崎小虎：一月から 眞垣武勝：

五月から 長谷川泰由：十月から

## 昭和一二年

・長谷川零余子句碑除幕：四月（堀ノ内福相  
寺）

「木蓮に翔りし鳥の光哉



長谷川零余子

零余子

・課題句選者推薦発表：七月

船渡葱月、森山奇山

・表紙絵 島田柏樹：一月から 華宵：六月  
から 島田柏樹：九月から

## 昭和一三年

・山本嵯迷東京転任：六月

・座談会「水明の婦人作家を語る」：八月

（出席者）長谷川かな女、神野三巴女、さ  
くら、高木丁二、澤本知水、森山奇山、森  
田桂城、杉五樹、高橋梨丘、村尾芦舟、研

水、入交露舟、田幸志々

・表紙絵 中川芳雄：一月から

## 昭和一四年

・長谷川かな女隨筆集「ゆきき」刊：六月

・水明十周年記念大会：九月（上野無極亭）

・水明十周年記念号発行：十月

・長谷川かな女句集「雨月」刊：十月

・新選者推薦発表：十月

森田桂城、多田てりな、嶋村花水、伊藤笛舟、木村立桐、服部一木、渡辺俳瞳、高木てい子、内田わかな、佐藤松枝

・表紙絵 島田柏樹：一月から

昭和一五年

・新選者推薦発表：八月 高橋梨丘

・船渡葱月逝去：十二月

・表紙絵 眞垣武勝：二月から 島田柏樹：六月から

昭和一六年

・昭和一五年度新人水明賞作家に高橋梨丘：一月

・新選者推薦発表：三月 田幸芯々、白子きくよ

・雑詠第二集選者に左記追加：四月 関口懐石、村尾芦舟、鴨田芙蕖、松本朱塔、森脇飯之、筒井野耕人、吉沢ひさ子、大作十九楼、藤井みつ子

・太平洋戦争勃発：十二月

昭和一七年

・神野三巴女句集「松の華」刊：十月

昭和一八年

・関口懐石逝去：八月

・日本出版会整備本部の要請に基づき水明終刊決定：十二月

昭和一九年

・情報局雑誌資格審査委員会に於て水明の存続認めらる：二月

・久岡杏南子逝去：三月

・金子せん女逝去：十月

昭和二〇年

・戦局激化に伴い自然休刊

・澤本知水 若狭に疎開

昭和二一年

・澤本知水上京、水明復刊に尽力

・復刊第一号（第一六卷第一号）発行：五月

・発行所：浦和市岸町四丁目一五〇

・七星会創立：十一月

・長谷川博、沢本秋子結婚：十一月

昭和二二年

・長谷川かな女作「真紅の衣」：大阪中央放送局：五月

「春の夜の灯を消せばなほ真紅の衣

かな女」

昭和二三年

・長谷川かな女還暦記念百幅頒布会：十月

昭和二四年

・星野紗一、山本明子（明世）結婚：四月

・編集委員会左記陣容により結成：六月 高木丁二、佐藤浩悠、山本嵯迷、尾崎木星、大作十九楼、星野茅村、嶋村花水、森山奇山、森田桂城、高橋梨丘

・三國十四逝去：六月

・長谷川かな女随筆集「雨月抄」刊：九月

・神野三巴女句集「初時雨」刊：九月

・大熊輝一句集「土くれ」刊：九月

・編集委員会へ左記三氏参加 星野紗一、片平杜翠、亀井新一

・長谷川零余子句碑除幕：四月  
（群馬県鬼石町）

「山水瞭乱たり新芋生れけり

零余子」

・若松句会発足：十月（銀座若松）

### 昭和二十六年

・長谷川かな女 高浜虚子との初句会放送に  
参加：一月

・第二回水明賞 伊藤笛舟（俳句作品）、佐

藤浩悠（俳論）：五月

・長谷川零余子・かな女比翼句碑除幕：六月

（北海道美唄）

「雪を見ねば蝦夷ものたらず秋の蝶

零余子」

「花路をわけて石狩川となれり

かな女」

・水明二〇周年記念俳句大会：十月（鶴見総  
持寺）

・水明二〇周年記念関西大会：十一月（宝塚  
中山寺成就院）

・岩崎築石句碑除幕：十一月（桐生市岡公園）

### 昭和二十七年

・水明二〇周年記念特集号発行：一月

（特別寄稿）高浜虚子、水原秋櫻子、石塚

友二、石田波郷、星野立子、阿部みどり女、

高橋淡路女、飯田蛇笏、島東吉

・第三回水明賞：五月

森山奇山、高橋梨丘、相沢静思

・澤本知水（初代発行兼編集人、長谷川秋子  
実父）逝去：九月



澤本 知水

・表紙絵 別車博資：一月から 渡辺武夫：九  
月から

九月から

### 昭和二十八年

・第四回水明賞：五月 山本嵯迷、片平杜翠

・大作十九楼逝去：五月

・長谷川かな女句碑 松の花会の発起により

浦和調公園に建立：十一月

「生涯の影ある秋の天地かな

かな女」

・表紙絵 高田誠：四月から 長谷川博：十  
月から

月から

### 昭和二十九年

・第五回（昭和二十八年年度）水明賞：四月

高木てい子、高橋梨丘、森山奇山、片平杜  
翠、長谷川秋子

・「水明会」を拡大強化して、「水明維持会」  
が結成され、左記五氏に常任委員委嘱：

十一月

山本嵯迷、星野茅村、古橋桂花、岡田銀溪、  
大畑南海魚

相沢静思・綾女句集「銀婚」刊：十一月

・表紙絵 増田三男：一月から

・神野三巴女逝去：一月

・長谷川かな女第三句集「胡笛」刊：三月

・昭和二十九年水明賞：四月

・正岡陽炎女、中島花楠、大畑南海魚

・水明三百号記念祝賀会 九月（上野韻松亭）

・編集委員を左記七氏に委嘱：九月

山本嵯迷、星野茅村、岡田銀溪、大畑南海  
魚、中島花楠、星野紗一、石塚まさを

・水明三百号記念特別号発行：十一月

・第一水明抄刊：十二月

・開原冬草（元常任幹事）逝去：二月

・阿部三婦句集「化転」刊：三月

・阿部三婦句集「化転」刊：三月

・阿部三婦句集「化転」刊：三月

・阿部三婦句集「化転」刊：三月

・阿部三婦句集「化転」刊：三月

・阿部三婦句集「化転」刊：三月

・阿部三婦句集「化転」刊：三月

・昭和三〇年度水明賞：四月

山本嵯迷、長谷川秋子、岡田銀溪

・星野茅村句集「くぬぎ」刊：六月

・新珠賞の新設：九月

・第一回新珠賞 藤巻静子、星野紗一

・長谷川かな女古稀祝賀会：十月（上野・韻松亭）

・表紙絵 島田柏樹：十月から

### 昭和三二年

・吉沢ひさ子句集「あじさい」刊：三月

・昭和三一年度水明賞 藤巻静子：四月

・第二回新珠賞 玉置石松子、西村晴子：五月

月

・中島花楠逝去：十二月

### 昭和三三年

・「季言欄」新設：一月

・発行所委員（編集委員兼任）左記九氏に委嘱

山本嵯迷、星野茅村、星野紗一、大畑南海魚、岡田銀溪、森山奇山、石塚まさを、福岡徳郎、長谷川秋子

・昭和三三年度水明賞：四月

山本嵯迷、大畑南海魚、東早苗、森田桂城、長谷川秋子

・昭和三三年度題詠選者、左記四氏に委嘱：四月

森山奇山、木村立桐、正岡陽炎女、半谷絹村

・長谷川かな女句碑除幕：四月（群馬県三名湖畔）

「むさし野の鳥くる松の芯無限

かな女」

・第二水明抄刊：四月

・第三回新珠賞：七月

佐藤緑芽、勝野百合子、中尾寿美子

・正岡陽炎女句碑建立：七月（北海道美唄市）

・故澤本知水句集「夏炉」刊：八月

・島田柏樹（表紙絵作者）逝去：十一月

・故中島花楠句集「花楠」刊：十二月

昭和三四年

・昭和三三年度水明賞：四月

石塚まさを、藤枝加津江、佐藤緑芽、福岡徳郎

・第四回新珠賞：八月

落水水尾、吉田正、小田鳥迷子

・内田わかな逝去：八月

・水明三五〇号記念大会：十月（浦和市医師会館）

・長谷川かな女隨筆自伝「小雪」刊：十一月

・表紙絵 直原玉青：七月から

昭和三五五年

・水明三五〇号記念特集号発行：一月

・NHK新春初句会として水明句会放送：一月

（出席者）長谷川かな女、山本嵯迷、佐藤浩悠、大畑南海魚、石塚まさを、高木てい子、長谷川秋子、藤巻静子

・昭和三四年度水明賞：四月 島津城子

・第五回新珠賞：七月 富田よし、大木紺青

・故内田わかな句集「わかな句集」刊：九月

・「青苑集」新設：十一月

・第三水明抄刊：十二月

昭和三六年

・大畑南海魚句集「火喰鳥」刊：三月

・昭和三五年度水明賞：四月 落水水尾

・長谷川かな女句碑除幕：四月（浦和・別所沼畔）

「曼珠沙華あつまり丘をうかせけり

かな女」

・水明関西大会：七月（芦屋会館）

・第六回新珠賞：七月

浅野耕月、薄井登美女

・星野茅村（元常任委員、編集委員、星野紗一主宰実父）逝去：九月



星野 茅村

・神野溪石逝去：九月  
・小松原秀峰句集「あわ雲」刊：九月  
・正岡陽炎女句集「雪炎」刊：九月  
・長谷川かな女、埼玉文化賞受賞：十一月  
・落合水尾句集「青い時計」刊：十二月  
昭和三七年

・昭和三六年度水明賞：四月  
小泉小泉、福岡浪子、小田鳥迷子  
・竹村やす子、松本朱塔逝去：四月  
・第七回新珠賞：七月  
中山玲子、木村秋峰、小川久夫  
・星野茅村遺句集「くぬぎ第二集」刊：九月  
・長谷川零余子句碑除幕：十一月（名古屋市八事音聞山）

「岐阜行灯の白さ好もしともし見る

零余子」

### 昭和三八年

・昭和三七年度水明賞：四月  
横道秀川、佐野蹊子  
・第八回新珠賞：七月  
荒木美也子、宍戸祥二  
・長谷川かな女句集「川の灯」刊：十月  
・長谷川かな女喜寿 水明四〇〇号、「川の灯」出版記念会：十月（上野・精養軒）  
・長谷川かな女、浦和市名誉市民に推される：十一月

### 昭和三九年

・藤井みつ子句集「なぎさ」刊：十二月  
（特別寄稿）富安風生、山口青邨、阿部みどり女、星野立子、飯田龍太、石川桂郎、殿村菟絲子、柴田白葉女、池内たけし、石塚友二、高柳重信、楠本憲吉その他  
・論説委員左記三氏に委嘱：一月  
伊藤通畦、横道秀川、木村立桐  
・新田豊逝去：三月  
・「定本かな女句集」限定版刊：三月  
・昭和三八年度水明賞：四月  
神野ともえ、佐野蹊子、杉本文彦  
・長谷川かな女、埼玉県文化功労賞受賞：五月

### 月

・第九回新珠賞：七月 坂本欣司、榎本具子  
・渋木三思逝去：八月  
・山本嵯迷句集「ばらの虫」刊：八月  
・原黙杉逝去：十月  
・佐藤浩悠・松枝合同句集「檜垣」：十一月  
・玉置石松子「葉草歳時記」刊：十一月  
昭和四〇年

・伊藤通畦句集「冬の峰」刊：三月  
・昭和三九年度水明賞：五月  
西村晴子、中山玲子  
・高木丁二、てい子合同句集「水流」刊：五月  
月

・第一〇回新珠賞：七月  
大内敏子、瀬下黄昏  
・川口土曜会合同句集「冬扇」刊：九月  
昭和四一年

・力石郷水句集「橘香」刊：二月  
・日吉登美女句集「蒲公英」刊：四月  
・水明春の大会・長谷川かな女傘寿祝賀会：六月（埼玉会館小ホール）  
三笠宮臨席、楠本憲吉氏講演  
・昭和四〇年度水明賞：六月  
石原宇苗児、大木紺青

- ・河合利仔子句集「里桜」刊：六月
  - ・第一一回新珠賞：七月
  - ・田中幹青、阿部正一郎
  - ・林間俳句学校四〇年振りに再開（第三回）：八月（谷川温泉相沢山荘）
  - ・長谷川かな女、紫綬褒章受章：十一月
  - ・守都千賀女句集「二本の柳」刊：十一月
  - ・相沢綾女逝去：十一月
  - ・高木丁二（常任幹事）逝去：十二月
- 昭和四二年**
- ・正岡陽炎女逝去：一月
  - ・山崎薫永句集「ふるさと」刊：三月
  - ・みなみ句会合同句集「みなみ」刊：三月
  - ・長谷川秋子句集「菊風ぎ」刊：五月
  - ・昭和四一年度水明賞：五月 小内春邑子
  - ・第一二回新珠賞：七月
  - ・石上しまえ、白石のぶ子
  - ・藤巻静子句集「未明」刊：九月
  - ・相沢静思・綾女合同句集「撒華」刊：九月
  - ・福岡穂邨句集「山鳩」刊：十月
  - ・岡田銀溪句集「溪泉」刊：十一月
- 昭和四三年**
- ・鈴木瑛女句集「篠の子」刊：四月
  - ・昭和四二年度水明賞：五月 小内春邑子

- ・玉置石松子句集「手品師」刊：五月
  - ・東頼遺句集刊：五月
  - ・古橋桂花句集「灯船」刊：六月
  - ・第一三回新珠賞：七月
  - ・佐々木久代、飯村清子
  - ・相沢綾女句碑除幕：八月
  - ・長谷川かな女自叙随筆「続小雪」刊：十一月
  - ・西村晴子句集「朱甕」刊：十一月
- 昭和四四年**
- ・古橋桂花句集「虎落笛」刊：三月
  - ・昭和四三年度水明賞：五月 穴戸祥二
  - ・長谷川かな女第六句集「牟良佐伎」刊：五月
  - ・伊藤通睦句集「解水期」刊：五月
  - ・第一四回新珠賞：七月
  - ・富田恒則、内田吾亦紅
  - ・長谷川かな女永眠：九月二二日午前三時一〇分 享年八二歳
  - ・長谷川かな女浦和市民葬：九月二七日（長久山円蔵寺 法名慈宏院水明日照大姉）
  - ・長谷川かな女勲四等宝冠章受章
  - ・長谷川秋子 水明主宰推戴：十月

- ・長谷川かな女追悼号発行：十二月（特別寄稿）富安風生、山口青邨、山口誓子、池内たけし、角川源義、安住敦、瀧春一、渡辺桂子、殿村菟絲子、柴田白葉女、鈴木真砂女、細見綾子、稲垣きくの、野沢節子その他
  - ・伊藤笛舟逝去：十二月
- 昭和四五年**
- ・表紙絵 長谷川かな女遺作より：一月から
  - ・長谷川秋子新主宰のもとに左記陣容により水明運営委員会結成：一月
  - 委員長 山本嵯迷
  - 副委員長 佐藤浩悠、吉沢ひさ子
  - 総務担当委員 石塚まさを、大畑南海魚
  - 相沢静思、福岡浪子、藤枝加津江
  - 経理担当委員 岡田銀溪、福岡穂邨
  - 編集担当委員 星野紗一
  - 「水明集」同人作目録として新設：四月



長谷川秋子



山本 睦迷

- ・倉上八重子逝去：五月
- ・山本睦迷句集「風蘭の帖」刊：六月
- ・落合水尾句集「谷川」刊：六月
- ・保泉秩舞逝去：六月
- ・第一五回新珠賞：七月
- 梅原啄朗、広瀬秋良
- ・藤枝加津江句集「杉の背」刊：八月
- ・横道秀川句集「青き繁殖」刊：八月
- ・第一回りんどう忌・かな女句碑除幕式：九月  
月（堀ノ内福相寺）
- 「羽子板の重きが嬉しつかで立つ」  
かな女
- ・中山惟紅子句集「ゆふき」刊：九月
- ・木村秋峰句集「獅子座」刊：九月
- ・小内春邑子 埼玉文学賞受賞：十一月
- ・第五水明抄刊：十二月
- 昭和四十六年**
- ・第一回水明同人会：四月（浦和市民会館）

同人規約を一部改訂、運営委員会を運営同人会とする。

- 新運営同人 落合水尾、小内春邑子
- ・昭和四五年度水明賞：七月 広瀬とし
- ・西村晴子句集「原生林」刊：五月
- ・藤田隆子句集「独楽」刊：五月
- ・内田菊江句集「花の輪」刊：五月
- ・第一六回新珠賞：七月 星野明世、水野麗
- ・長谷川秋子句集「鳩吹き」刊：九月
- ・神野ともえ句集「山椿」刊：十月
- ・半谷絹村遺句集：十月
- 昭和四十七年**
- ・福岡徳郎（運営同人）逝去：一月
- ・木村秋峰第二句集「妊子稲」刊：一月
- ・大畑南海魚句集「愛河」刊：二月
- ・水明五百号特集号発行：四月  
（特別寄稿）富安風生、阿部みどり女
- ・長谷川零余子句碑除幕：四月（群馬県境町）
- 「行秋や長子なれども家嗣がず」  
零余子
- ・水明五百号記念大会：五月（上野精養軒）
- ・昭和四六年度水明賞：五月 星野明世
- ・第一七回新珠賞：七月
- 小林京子、波多野寿子

・木村立桐逝去：十一月  
**昭和四十八年**

- ・長谷川秋子主宰急逝：喘息発作のため、二月二日午後一時一五分 享年四十六歳
- ・水明葬による葬儀並びに告別式：二月十一日（浦和市玉蔵院 法名釈尼秋華）
- ・新主宰に星野紗一推戴：二月二日



星野 主宰

- ・山本睦迷（元水明運営委員会委員長（星野紗一主宰夫人明世の美父）永眠：二月二十五日午後九時三五分 享年七八歳 法名光寿院釈睦迷居士）
- ・星野紗一明世合同句集「ねばりひき」刊：二月
- ・編集長に遠山喜美子就任：四月
- ・長谷川秋子追悼号発行：四月  
（弔辞）畑和知事、相川曹司市長、水原秋櫻子、殿村菟絲子、五所平之助、金子兜太、柴田白葉女、松沢昭、加藤知世子、滝春一、

高柳重信、鈴木真砂女、古賀まり子、土岐雄三、古橋桂花、神保光太郎、南部憲吉

・表紙絵 長谷川かな女遺作から直原玉青氏に替る：四月

・長谷川秋子句碑除幕：四月（群馬県鬼石町神流湖畔）

「空と空つなく吊橋風光る

秋子」

・澤本知水・山本嵯迷句碑除幕：四月

（福井県大鳥羽松の鼻公園）

「山女やく煙入りぬ花しぐれ

知水」

「沖の石にかざす照葉ぞ山帰来

嵯迷」

・昭和四七年度水明賞：六月 田村九路

・第一回水明吟行会：七月（桐生 吾妻・水道山）

・昭和四八年度新珠賞：七月 水沢竜星

・村尾芦舟（蕉雨女夫君）逝去：九月

・「水明の旗」制定 各支部へ伝達：十一月

### 昭和四九年

・第一回如月忌（秋子忌・嵯迷忌）：二月

（浦和市民会館）

・昭和四八年度水明賞：五月 小林京子



山本 紫黄

・行事部長に山本紫黄就任：六月

・昭和四九年度新珠賞：七月

・松原歌子、大澤玲子（準賞）小林美夜子

・長谷川秋子句碑除幕：十月

（若狭上中町天徳寺瓜割公園）

「大吠ゆる冬山彦になりたくて

秋子」

・第六水明抄刊：十月

### 昭和五〇年

・新春座談会「実作のために」：一月

・（出席者）星野紗一、小内春邑子、落合水尾、山本紫黄

・佐藤浩悠（元水明運営委員会委員長）逝去：一月

・古橋桂花句集「続虎落笛」刊：四月

・佐藤松枝（季音同人）逝去：五月

・落合水尾「長谷川秋子の俳句と人生」刊：五月

・昭和四九年度水明賞：五月

・松原歌子、中村千絵

・新運営同人委嘱：六月 草香薫春

・昭和五〇年度新珠賞：九月

・小林美夜子（準賞）市田一虚生、山本松枝

・嶋村花水（季音同人）逝去：十一月

### 昭和五一年

・新春女流放談「水明男性作家を語る」：一月

・

（出席者）星野紗一、星野明世、遠山喜美子、中山玲子、西村晴子、小林京子、佐々木久代

・「長谷川秋子全句集」刊：四月

・水明五五〇号記念特別号発行：六月

・水明五五〇号記念祝賀大会：六月（目白・椿山荘）

（祝辞）井本農一、三谷昭、柴田白葉女、若杉慧、草間時彦、岸風三樓、原裕、松沢昭、阿部完市、三橋敏雄、河野南睦

・玉置石松子句集「水晶婚」刊：三月

・水明バッジ制定：六月

・新運営同人：六月 小泉小泉、駒崎柿帝

・昭和五〇年度水明賞：六月

古我菊治、佐々木久代



・古橋桂花句集「敗荷」刊：六月

・平井山淑子・しのぶ句集「青炎」刊：六月

・関西例会発足：七月（第四日曜日）

・昭和五一年度新珠賞：九月

・須永洋子、関口正子（準賞）市田一虚生、

台野たけを、高橋さだ子

・横道秀川句集「銀杏並木」刊：九月

・伊藤通哇（季音同人）逝去：十一月

## 昭和五二年

・座談会「新春放談」：一月

（出席者）星野紗一、小泉小泉、遠山喜美子、

山本紫黄、落合水尾、小内春邑子、星野明

世、駒崎柿帝

・森山奇山（元発行所委員）逝去：二月

・星野紗一句集「木の鍵」刊：五月（現代俳

句選集）

・昭和五一年度水明賞：五月

立川京子、山本鬼之介

・花輪恒太郎逝去：五月

・小森里桐逝去：六月

・古橋桂花句碑除幕：六月（浦和調公園）

「大銀杏おのが落葉の中に立つ」 桂花

・昭和五二年度新珠賞：九月

高野万里、市田一虚生、山本松枝

・合同句集「麗和」刊：十一月

## 昭和五三年

・座談会「新春放談」（発行所例会代表によ

る）：一月

（出席者）星野紗一、山本鬼之介、小泉小泉、

日吉登美女、草香薫春、国領恭子、立川京

子、星野明世、遠山喜美子

・新運営同人：二月 出井一雨（行事担当）

・季音賞の設定：二月（昭和五三年度より）

・季音作家の創作意欲を促進させ、季音欄の

充実を図るため、新たに「季音賞」を設け

表彰する

・小内春邑子句集「岩畳」刊：二月

・昭和五二年度水明賞：五月

波多野寿子、出井一雨、大澤玲子

・昭和五三年度新珠賞：九月

柳田智江、西山貴美子、松本孝太郎、松坂

正男

・村田邑亮（季音同人）逝去：九月

・運営同人の異動：退任 落合水尾

・わが愛する俳人第二集「長谷川かな女篇」

星野紗一執筆刊：十月

賞：十一月

## 昭和五四年

・座談会「新春放談」：二月

（出席者）草香薫春：司会、森脇仮之、中

村とみを、別軍茅夜女、岡谷徳津代、前田

余子生、高橋さだ子、谷口とし子、守都千

賀女

・編集長に小内春邑子就任：一月

・土井みとし逝去：一月

・星野明世句集「馬槌」刊：三月（現代俳句

女流シリーズ）

・水明創刊五〇年記念号発行：五月

（特別寄稿）水原秋櫻子、山口誓子、阿部

みどり女、横山白虹、飯田龍太、森澄雄、

渡辺桂子、瀧春一、柴田白葉女、殿村菟絲

子、野澤節子、高柳重信、三橋敏雄、松澤

昭、成瀬櫻桃子、阿部完市、飯島晴子、岡

本眸

（対談）「実作者の立場」金子兜太、星野紗

一 水明創刊五〇年記念大会（東京目白・椿山

荘）：五月

・昭和五三年度水明賞：五月 小林美夜子

・第一回（昭和五三年度）季音賞：五月

小内春邑子、星野明世、松原歌子、佐々木久代

・尾崎木星(季音同人) 逝去：八月

・昭和五四年度新珠賞：九月

・十倉和子、谷口とし子(準賞) 三沢容一

・遠山喜美子句集「回遊」(水明選集第一集)

刊：十二月

### 昭和五五年

・新春座談会「俳句の実作について」：二月

(出席者) 星野紗一、山本紫黄、遠山喜美子、

佐々木久代、小内春邑子

・水明運営の人事：一月

・新運営同人 佐々木久代、星野明世、山本

鬼之介

・新行事部長 出井一雨

・第一回星野紗一海外俳句教室(韓国紀行)：

三月

・石塚まさを句集「途上小景」(水明選集第

二集) 刊：四月

・昭和五四年度二賞発表：五月

・水明賞 関口正子、森せん、柳田智江

・季音賞 小林京子

・加藤不二也(水明最長老) 逝去：六月

・古橋桂花(元水明編集長、浦和市俳句連盟

会長、元埼玉県俳句連盟会長) 逝去：六月  
・横道秀川句集「寒銀河」(水明選集第四集)

刊：七月

・水明創刊六〇〇号特別号発行：八月

(特別寄稿)「洛陽」藤堂明保、「星野紗一

の俳句」三橋敏雄、「紗一秀句抄」池上樵

人

・昭和五五年度新珠賞：九月

・長谷川エミ、中村とみを、島津よしの

・小林京子句集「音域」(水明選集第三集) 刊：

九月

・浜田餘子房(季音作家) 逝去：九月

・水明六〇〇号記念大会(東京日比谷松本

楼)：十月

### 昭和五六年

・新春座談会「俳句初学のころ」：一月

(出席者) 星野紗一、石塚まさを、西村晴子、

松原歌子、出井一雨、日吉登美女、小林美

夜子、小内春邑子

・山本紫黄句集「早寝島」(水明叢書) 刊：

一月

・新運営同人の委嘱：一月 広瀬とし、立川

京子

・遠山喜美子(前編集長) 逝去：一月

・中山玲子句集「白日」(現代俳句女流シリ

ズ) 刊：三月

・第二回星野紗一海外俳句教室(台湾紀行)：

三月

・昭和五五年度二賞発表：五月

・水明賞 高野万里、三沢容一、松本愛

・季音賞 遠山喜美子、中山玲子

・古橋桂花句集「星」刊：六月

・木村秋峰句集「陽炎」刊：七月

・内藤貞子句集「野鳩」刊：七月

・島津城子句集「雁渡し」(水明選集第四集)

刊：八月

・かな女賞の設定：九月

昭和五六年度分から、新たにかな女賞を設

定。本賞は、水明の創設者である長谷川か

な女の功を讃え、その名を永遠にとどめる

ため、かな女十三回忌を機会に設定。

・昭和五六年度新珠賞：九月

・出口唄子、大橋迪代

・森宏二長崎県芸芸大賞受賞：十月

・久保りき句集「糸遊」刊：十二月

### 昭和五七年

・新春座談会「旅と日常」：一月

(出席者) 星野紗一、山本紫黄、小内春邑子、

杉本文彦、島津城子、広瀬とし、立川京子、小泉小泉

・自註現代俳句シリーズ(第四期)「星野紗一集」刊：一月

・第三回星野紗一海外俳句教室(シンガポール・タイ紀行)：三月

・梅原啄朗(季音作家) 逝去：三月

・昭和五十六年度三賞発表：五月

・水明賞 十倉和子、松宮柚二、長谷川エミ

・季音賞 山本鬼之介、立川京子



吉沢ひさ子

かな女賞(第一回) 吉沢ひさ子

・松原歌子句集「烏賊火」(水明選集第五集)刊：八月

・昭和五十七年度新珠賞：九月

・永瀬千枝子、森宏二

・村野喜代句集「今年竹」刊：九月

・水明合同句集「第八水明抄」刊：十月

・杉本文彦句集「母の関」(水明選集第六集)

刊：十二月

昭和五八年

・新春座談会「今の俳句」：一月

(出席者) 星野紗一、大畑南海魚、星野明世、小林京子、大澤玲子、田口鷹生、小内春邑

子

・岡田銀溪句集「米寿抄」刊：二月

・第四回星野紗一海外俳句教室(台湾紀行)：三月

・星野紗一主宰十周年記念号発行：三月

・特別寄稿「紗一主宰『水明』十周年を祝して」 井本農一

・星野紗一主宰十周年記念水明全国大会(東京目白・椿山荘)：五月

(特別講演) 金子兜太

・昭和五十七年度三賞発表：五月

・水明賞 松坂正男、岸仙峡

・季音賞 島津城子、山本紫黄、波多野寿子

・かな女賞 岡田銀溪、森脇仮之

・星野紗一句集「鹿の斑」並びに随筆集「木の鍵」刊：五月

・昭和五十八年度新珠賞：九月

・門馬志都子、塩谷美津子、島津初花

・佐々木久代句集「螢舟」(水明選集第七集)

刊：十月

昭和五九年

・新春座談会「写生ということ」：一月

(出席者) 星野紗一、小内春邑子、星野明世、佐々木久代、山本鬼之介、勝海信子、池上貴誉子、栢尾さく子、小泉小泉

・第四例会新設(大宮公民館第二水曜日)：一月



森脇 仮之

・森脇仮之(季音同人) 逝去：一月

・桐生かね子句集「魚遊」刊：二月

・小澤登志句集「小松石」刊：三月

・梅原啄朗遺句集「浜木綿」刊：三月

・槻の会合同句集「槻の花」刊：三月

・第五回星野紗一海外俳句教室(中国紀行)：三月

・新運営同人の委嘱：五月 波多野寿子

・昭和五十八年度三賞発表：五月

・水明賞 栢尾さく子(準賞) 大橋迪代、

山本松枝

季音賞 西村晴子

かな女賞 大畑南海魚、鈴木瑛女

・広瀬とし句集「青い実」刊：五月

・治田みちる句集「五月」刊：五月

・内田しげり（季音同人）逝去：五月

・富田よし（季音同人）逝去：五月

・西村晴子句集「銀閣」刊：六月

・関口祥子句集「檜山杉山」刊：六月（現代俳句女流シリーズ）

・長谷川かな女句碑建立除幕：七月

（福井県上中町中央公民館広場）

「ねばりひきでもあろかと田向ふの初蛙

かな女」

・峯岸たつ子句集「冬紅葉」刊：八月

・昭和五九年度新珠賞：九月

山本啓江、北川栄子

・水南通巻六五〇号記念号発行：十月

架空対談「また何時か何処かで」星野紗一

・吉沢ひさ子句集「米の春」刊：十月

・星野紗一句碑建立除幕：十一月（群馬県鬼

石町桜山）

「頂に駕籠を置きたし冬桜

紗一」

・原美美子（元季音同人）逝去：十一月

・立川京子句集「桜紅葉」（水明選集第八集）

刊：十二月

・野地好子句集「雪吊」刊：十二月

昭和六〇年

・新春新風放談「俳句の新しさ」：一月

（出席者）星野紗一、向井鶴郎、永瀬千枝子、

椎野美代子、小内春邑子、川村悠太、西山

貴美子、菊池ひろこ

・永野史代句集「喇叭音」刊：四月（処女句

集シリーズ）

・長村春竹句集「蒼天」刊：四月

・石塚まさを浦和市俳句連盟会長に就任：五

月

・昭和五九年度三賞発表：五月

水明賞 池上貴登子、門馬志都子

季音賞 小林美夜子、佐藤緑芽

かな女賞 石塚まさを、横道秀川

・別車茅夜女句集「海幸」刊：七月

・昭和六〇年度新珠賞：九月

川村悠太、山口素子

・大澤玲子句集「石筍」刊：十一月（現代俳

句女流シリーズ）

・椎野美代子句集「鱈酒」刊：十一月（処女

句集シリーズ）

・北川栄子句集「華」刊：十一月

・岡田銀溪（元運営同人）逝去：十一月



岡田 銀溪

・野本千代遺句集「花菖蒲」刊：十二月

昭和六一年

・新春座談会「されば還暦、されど虎」：一

月

（出席者）小内春邑子、星野明世、中山玲子、

木下露女、谷野家代子、波多野寿子、小林

美夜子、長谷川エミ

・水明運営の人事・組織：一月

・新運営同人 小林美夜子

・新総務部長 佐々木久代

・大阪水明合同句集「森の宮」刊：三月

・横道秀川句集「狼煙」刊：四月

・市田一虚生句集「山茶夷」刊：四月

・昭和六〇年度三賞発表：五月

水明賞 山本松枝、谷口とし子

季音賞 大澤玲子、関口祥子

かな女賞 草香薫春、別車茅夜女

・木暮三津子遺句集「西陣」刊：六月

・高橋さだ子句集「嵯峨野」(水明選集第九集)

刊：八月

・昭和六一年度新珠賞：九月

田村照子、山中順子、吉田蒼生子

・小林美夜子句集「羽」(水明選集第十集) 刊：

九月

・星野明世句集「藝」刊：九月

・長谷川かな女生誕百年記念号発行：十月

(特別寄稿) 阿波野青畝、加藤楸邨、金子

兜太、清崎敏郎、野澤節子、能村登四郎、

丸山海道、三橋敏雄、草間時彦、殿村菟絲子、

久保田月鈴子、中村苑子、飯田龍太、井本

農一、加藤郁乎、原裕

・自解一〇〇句選「星野紗一集」星野紗一著

刊：十月

・長谷川かな女生誕百年記念大会(東京目白・

椿山荘)：十一月

昭和六二年

・表紙絵作者本号より川村親光画伯：一月

・新春座談会「俳句の発表」：一月

(出席者) 星野紗一、立川京子、小林京子、

高野万里、松本孝太郎、吉田静二、山中順子、小内春邑子

・波多野寿子句集「麦笛」刊：二月

・「山本嵯迷全句集」刊：三月

・水明運営の人事：四月

・新行事部長 山本鬼之介

・昭和六一年度三賞発表：五月

水明賞 西山貴美子、勝海信子

季音賞 栢尾さく子、長谷川エミ

かな女賞 福岡浪子、星野明世

・第六回星野紗一海外俳句教室(中国吟行

会)：六月

・昭和六二年度新珠賞：九月

伊藤敦子、鈴木さとみ

・小内春邑子句集「明王」刊：十月

・星野紗一・明世 現代俳人墨筆集「赤絵Ⅲ」

出版：十二月

昭和六三年

・新春座談会「関西の人柄、俳句柄」：一月

(出席者) 星野紗一、草香薫春、高橋さだ子、

野田勇泉、十倉和子、小島一予、谷口とし

子、伊藤敦子、小内春邑子

・水明運営の人事：一月

新運営同人 小林京子

・田村九路句集「碾臼」刊：二月

・長谷川エミ句集「蕪汁」刊：二月

・昭和六二年度二賞発表：五月

水明賞 大橋迪代、川村悠太

季音賞 広瀬とし、高野万里、池上貴誉子

・山本松枝句集「幻日」(水明選集第十一集)

刊：五月

・松本親枝句集「川狩」(水明選集第十二集)

刊：五月

・佐藤緑芽句集「凍鶴」刊：五月

・二賞発表：六月

かな女賞 花輪山思郎、川島喜由

新珠賞 黒沢みさお、森あい子

・堀敬子句集「涅槃」(女流シリーズ句集)

刊：六月

・小川千穂遺句集「微笑」刊：六月

・西村晴子随想集「晴れるや」刊：六月

・菊池ひろこ句集「露台」(処女句集シリーズ)

刊：七月

・栢尾さく子句集「五位」(俊英俳句選集) 刊：

八月

・池上貴誉子句集「放下」刊：九月

・俵谷美智子句集「青柿」(処女句集シリ

ズ) 刊：九月



星野 明世

・星野明世句碑除幕：七月（群馬県鬼石町桜山）

〔袋掛来世はどこで袋掛

明世〕

・川村悠太句集「馳か侏儒」（結社賞作家選集）刊：十一月

・水明創刊七百号記念号発行：十二月

（特別寄稿）「羽子板」桂信子、「秋の寒さ」草間時彦（対談）「秋、夜長、ものにする」

中村苑子、星野紗一

・大畑南海魚（運営同人・元編集長）逝去：十一月

### 昭和六四年

・水明運営の人事：一月

新運営同人の委嘱

大澤玲子、川島喜由、田口鷹生、中山玲子、

長谷川エミ、日吉登美女

運営幹事の分担

編集部 編集長 小内春邑子

行事部 部長 山本鬼之介

総務部 部長 佐々木久代

### 平成元年

・水明創刊七百号記念大会（東京目白・椿山荘）：一月

・草香薫春（元運営同人）逝去：一月



草香 薫春

・星野紗一随筆集「続木の鍵」刊：一月

・森あい子「扇開き」刊：一月

・大畑南海魚句碑開眼：三月（大畑家墓所）

「菜の花や隠岐は蝶々のみない国

南海魚〕

・石塚まさを（運営同人、元編集長、浦和市俳句連盟会長）逝去：三月

・昭和六三年度三賞発表：五月・六月

水明賞 椎野美代子、岡村一郎

季音賞 西山貴美子、堀敬子

かな女賞 山本紫黄、小内春邑子

・平成元年度新珠賞：六月

岡崎るり子（準賞）田原重子、中西磨智子

・片平杜翠（季音同人、元編集長）逝去：七月

・ほしのとおり（同人、星野紗一主宰長男）天折：七月

・谷野家代子句集「小春日」刊：七月

・星野家墓地内に句碑：八月（茅村、紗一、明世、とおる）

・水明誌「季音欄」の編成替え：九月

季音「雪」新設（かな女賞受賞者欄）

季音「月」従来の「I」に相当

季音「花」従来の「II」に相当

・関根碧子句碑建立除幕：十月（群馬県鬼石町桜山）

〔零余子を生みし土壤や冬桜

碧子〕

・別車茅夜女（季音同人）逝去：十月

・永瀬千枝子句集「貝覆ひ」刊：十月

平成二年

・大場香波（季音同人）逝去：一月

・鈴木瑛女（季音同人）逝去：五月

・平成元年度三賞発表：五月・六月

水明賞 故ほしのとおり、山中順子

季音賞 吉田静二

かな女賞 村尾蕉雨女、杉本文彦

・平成二年度新珠賞 該当作品なし

〔準賞〕 田原重子、戸沢可伊、茂木和子、

和田光子

・運営幹事会の人事：六月

新行事部長 出井一雨

・大川まつ江句集「襟山」刊：六月

・ほしのおおる句集「紫荊」刊：七月

・星野紗一句集「置筏」〔現代俳句選集〕：七

月

・星野紗一句集現代俳句の百冊「地上の絵」

刊：八月

・吉沢ひさ子（季音同人）逝去：八月

・水明創刊六十周年記念号発行：九月

（特別寄稿） 加藤楸邨、飯田龍太、金子兜太、

能村登四郎、中村苑子、清崎敏郎、三橋敏

雄、松澤昭、飯島晴子、有馬朗人、渡辺恭

子、倉橋羊村、伊藤敬子

・星野紗一主宰第三三回埼玉文化賞芸術部門

賞受賞：十一月

・水明創刊六十周年記念全国大会（川口市総

合文化センター「リリア」）：十一月

・長谷川零余子句碑建立除幕：十二月（群馬

県鬼石町）

「鶯や人を恐れて松深く

零余子」

平成三年

・新春放談「題名のない座談会」：一月

（出席者） 星野紗一、山本紫黄、星野明世、

佐々木久代、小内春邑子

・小内春邑子句碑開眼除幕：三月

（埼玉県長瀨町宮澤山光明寺）

「初蝶や指の先まで僧の緒

春邑子」

・岸仙峡（季音同人）逝去：三月

・黒沢美紗緒句集「唐辛子」刊：四月

・瀬戸富美子句集「唐草」〔現代俳句女流シ

リーズ〕刊：五月

・平成二年度三賞発表：五月・六月

・水明賞 俵谷美智子、黒沢美紗緒

・季音賞 出井一雨、大橋迪代

・かな女賞 島津城子、広瀬とし

・平成三年度新珠賞：六月

田原重子、茂木和子

・星野明世句集「青信濃」〔現代俳句十八人集

刊：六月

・高野万里句集「正午」刊：七月

・新運営同人の委嘱：七月

池上貴誉子、高野万里、永瀬千枝子、松本

孝太郎、吉田静二

・地方運営同人の新設：七月

岡谷直津代、島津城子、杉本文彦、高橋さ

だ子、谷野家代子、野田勇泉

・宮本誠句集「ひまらやほしよりの風」刊：

七月

・森山奇山遺句集「背振山」刊：十月

・川島喜由句集「映光」刊：十一月

・渡辺俳瞳（季音同人）逝去：十一月

平成四年

・新春座談会「男の俳句 女の俳句」：一月

（出席者） 星野紗一、川村悠太、岡村一郎、

椎野美代子、山中順子、俵谷美智子、黒沢

美紗緒、田原重子、茂木和子、小内春邑子

・日吉登美女（運営同人）逝去：一月

・御影庭石（季音同人）逝去：二月

・横田さだ子句集「源流」刊：四月

・森千代子句集「薯の花」刊：四月

・星野紗一句集「ねばりひき」完全復刻版の

刊行：四月

・平成三年度三賞発表：五月・六月

・水明賞 神田九十九、森あい子

季音賞 椎野美代子

かな女賞 中山玲子、日吉登美女

・平成四年度新珠賞：六月

・田川澄絵（準賞）河村真里、酒井佑子

・新運営同人の委嘱：六月

・国領恭子、山中順子

・島津城子第二句集、島津よしの合同句集「風の盆」刊：六月

・西原草二（季音同人）逝去：十二月

・鈴木松風句集「峡の宿」刊：十月

・第十水明抄発行：十二月

平成五年

・新春座談会「かな女を語る。そして……」：一月

（出席者）小内春邑子、神田九十九、川村悠太、松本孝太郎、田口鷹生

・新運営同人の委嘱：一月

・川村悠太、山本松枝

・谷本溪流（季音同人）逝去：一月

・大塚絹芳（季音同人）逝去：一月

・水明創刊七五〇号記念号発行：二月

（対談）「古典俳句はものさし」山下一海、星野紗一

・鑑賞秀句一〇〇句選シリーズ「長谷川かな

女」星野紗一著刊：二月

・星野明世現代俳句協会賞受賞：二月

・水明七五〇号記念会、星野紗一主宰就任二十年祝、星野明世現代俳句協会賞受賞祝（浦和市東武ホテル）：三月

（来賓）井本農一、金子兜太、三橋敏雄、加藤克己、深見けん二、有馬朗人、伊藤敬子、松澤昭、高橋一郎、岡田日郎、松本旭

・「魏」創刊一号、小内春邑子により水明の僚誌として発刊：四月

・平成四年度三賞発表：五月・六月

・水明賞 田村照子、中西磨智子

・季音賞 川村悠太、俵谷美智子

・かな女賞 立川京子、佐々木久代

・平成五年度新珠賞：六月 河村鞠

・埼玉新聞社企画、水明共催オーストラリア吟行会：十一月

・桐生かね子（季音同人）逝去：十二月

・新春座談会「季語と定型」：二月

（出席者）星野紗一、小内春邑子、岡村一郎、池上貴誉子、栢尾さく子、椎野美代子、富川三枝子

・運営幹事会の人事：一月

・新編集長 川村悠太

・新行事部長 立川京子

・星野紗一句集「鳥の句」刊：一月

・日吉登美女遺句集「花俵」刊：一月

・堀内歌子句集「水琴窟」刊：一月

・藤田隆子（季音同人）逝去：四月

・花輪山思郎（季音同人）逝去：五月

・久保りき（季音同人）逝去：五月

・平成五年度三賞発表：五月・六月

・水明賞 茂木和子、吉田蒼生子

・季音賞 山中順子、上岡正子、黒沢美紗緒

・かな女賞 出井一雨、波多野寿子

・平成六年度新珠賞：六月

・清水緑子、三浦文子

・松宮百栄（季音同人）逝去：七月

・服部永嶺（季音同人）逝去：十月

・西原草二遺句集「片栗の花」刊：十一月

・長谷川かな女句碑建立除幕：十二月

（群馬県鬼石町三波川桜山）

「龍胆枯れ叩く狐の尾がむらさき

かな女」

（星野紗一の碑文）

・上岡正子句集「軽梟の子」刊：十二月

・藤井寛聲句集「舞子」刊：十二月



・松宮百栄遺句集「白暖簾」刊：十二月  
・木曜会合同句集「韻」刊：十二月  
平成七年

・新春鼎談：一月  
（出席者）星野紗一、西村晴子、中たけし  
・水明運営の人事・組織：一月  
・運営同人：運営同人会を設け定期的に開催する。地方運営同人についてはこの組織とは別とする。  
・運営幹事の分担

運営全般 小内春邑子、星野明世、出井一雨

編集部 川村悠太編集長他  
行事部 吉田静二部長他  
総務部 佐々木久代部長他  
渉外部 運営幹事が夫々担当  
小委員会  
・脚註名句シリーズ「長谷川かな女集」星野紗一著刊：三月  
・岡野白穂句集「霧笛」刊：三月  
・田村九路（季音同人）逝去：三月  
・平成六年度三賞発表：五月・六月  
水明賞 富川三枝子  
季音賞 長谷川久枝、山本松枝、弥永信子

かな女賞 小林美夜子

平成七年度新珠賞：六月 松本光子  
・村尾蕉雨女（季音同人）逝去：八月  
・渡辺豊子（季音同人）逝去：九月  
・藤井寛聲（季音同人）逝去：九月  
平成八年

・新春鼎談「合せ技」をめくって：一月  
（出席者）星野紗一、大澤玲子、永野史代  
・星野明世句集「袋掛」（現代俳句の百冊シリーズ）刊：三月

・福井水明歩句会合同句集「歩」刊：三月  
・塩谷美津子他八名の合同句集刊：三月  
・平成七年度三賞発表：五月  
水明賞 高橋美枝子、常見知生  
季音賞 永瀬千枝子、吉田蒼生子、神田九十九  
かな女賞 該当者なし  
・平成八年度新珠賞：五月  
石山かつ子、酒井佑子  
・高田まさみ（季音同人）逝去：十月  
・松本咲句集「赤い椅子」刊：十一月  
・松永竹林第二句集「冬座敷」刊：十一月  
平成九年  
・新春鼎談「裾野の広がった俳句」：一月

（出席者）星野紗一、橋本圭好子、富川三枝子

・鳥羽谷創刊一〇〇号記念大会（大鳥羽）：三月

・水明創刊八〇〇号記念号発行：四月  
（特別寄稿）金子兜太、鷹羽狩行、有馬朗人、三橋敏雄、松澤昭、成瀬櫻桃子、伊藤敬子、岡田日郎、松本旭、深見けん二、佐藤和夫、倉橋羊村、蓬田紀枝子、弓削緋紗子、緋庵（William J. Higginson）橋本圭好子訳

・水明創刊八〇〇号記念全国大会（東京会館）：五月

（来賓）井本農一、金子兜太、成瀬櫻桃子、三橋敏雄、松澤昭、佐藤和夫、伊藤敬子  
・平成八年度三賞発表：五月  
水明賞 星野和子（準賞） 柚木治子  
季音賞 田村照子、茂木和子、中たけし  
かな女賞 小林京子、長谷川エミ、佐藤緑芽  
・平成九年度新珠賞：五月  
小倉和子、柚木治子  
・運営幹事の人事：六月  
新編集長 池上貴誉子

- ・中澤星古城（季音同人）逝去：六月
- ・白石のぶこ句集「杜氏の唄」刊：七月
- ・宇野常人（季音同人）逝去：十月
- ・内藤並樹（季音同人）逝去：十一月
- ・長谷川久枝句集「青き気孔」刊
- ・服部千枝子句集「旅靴」刊
- ・蛭間房栄句集「鏡」刊
- ・出井一雨句集「山上の鯉」刊：十二月
- 平成一〇年
- ・新春座談会「寅年そして還暦」：一月
- （出席者）星野紗一、柚木治子、北上正枝、大川富美代
- ・現代俳句鑑賞全集（第二回配本）星野紗一篇出版：水明の平成元年から九年までの巻頭句（作品評）から収録：三月
- ・平成九年度三賞発表：五月
- 水明賞 永野史代、杉田みつる、石山かつ子
- 季音賞 高橋美枝子、富川三枝子
- かな女賞 吉田静二、川村悠太、野田勇泉
- ・平成一〇年度新珠賞：五月
- 中澤妙子（準賞）加藤礼子、町野広子、増田くみ子
- ・横道秀川（季音同人）逝去：六月

- ・三木多美子句集「花鳥賊」刊
- ・福原幸子句集「夏羽織」刊
- ・星野紗一・明世俳句展（伊勢丹浦和店七階美術画廊）：十一月
- ・星野紗一主宰喜寿のお祝い会（浦和ワシントンホテル）：十二月
- 平成一一年
- ・新春座談会「これからの俳句」：一月
- （出席者）星野紗一、網野横月、町野広子、増田くみ子、長谷川佳子
- ・星野松路（季音同人）逝去：一月
- ・ヨークカルチャーセンター大宮（イトーヨーカドー大宮店二階（カタクラパーク））で星野紗一主宰が講師として新講座開講「はじめての方のための俳句入門」：二月
- ・平成一〇年度三賞および平成一一年度新珠賞発表：五月
- 水明賞 狩野睦子、柚木治子、戸沢可伊
- 季音賞 星野和子
- かな女賞 池上貴誉子、大澤玲子
- 新珠賞 町野広子（準賞）小林和枝
- ・山口華曳舟（季音同人）逝去：七月
- ・戸沢可伊（季音同人）逝去：十月
- ・松本孝太郎 第十七回現代俳句協会新人賞

- 並びに毎日新聞社賞のダブル受賞：十一月
- ・第五二回福島県文学賞（俳句部門）を小高水明会の宍戸祥二が受賞：十一月
- ・ニュージーランド大吟行（埼玉新聞文化ツアー）を埼玉新聞社と水明で共同企画、星野紗一主宰が同行アドバイザーとして実施：十一月
- 現地での「ジヤパンフェスティバル'99」に参加者の短冊を展示
- 平成一二年
- ・新春座談会「俳句の日常性と非日常性」：一月
- （出席者）星野紗一、出井一雨、常見知生、岩谷精一、黒田悦夫
- ・松宮柚二（季音同人）逝去：三月
- ・平成一一年度三賞ならびに平成一二年度新珠賞発表：五月
- 水明賞 山之上友江、岩谷精一、金谷和子
- 季音賞 石山かつ子
- かな女賞 永瀬千枝子
- 新珠賞 北上正枝、黒田悦夫
- ・新運堂同人の委嘱：五月
- ・星野和子、富川三枝子
- ・水明創刊七十周年記念号発行：九月

(特別寄稿) 金子兜太、鷹羽狩行、松澤昭、

岡本眸、成瀬桜桃子、伊藤敬子、加藤三七子、深見けん二、倉橋羊村、小宅容義、柴田白陽、松本 旭、山下一海、蓬田紀枝子

・水明創刊七十周年記念祝賀会(東京丸ノ内、東京会館)：十月

・星野紗一エッセイ集「柿の木」出版

・植木静香(季音同人)逝去

・磯美恵子( ) ( ) ( )

### 平成十三年

・水明本部の組織変更と人事：一月

新組織

○発行所事務局 事務局長 星野光二

○地方連絡部 部長 佐々木久代(西部)

〃 〃 〃 長谷川エミ(東部)

○編集部 部長 星野和子

○行事務所 部長 吉田静二(現行通り)

・高橋さだ子(季音地方運営同人)逝去：二月

・星野紗一主宰 埼玉県現代俳句協会会長に

就任：三月

・星野紗一・明世句碑若狭瓜割名水公園に建

立：四月

渡り鳥消えたるあとの置筏

瓜割の滝に樂あり新松子

紗一 明世

・平成十二年度三賞ならびに平成十三年度新  
珠賞発表：五月

水明賞 黒田悦夫、小林迪子、金子はる子

季音賞 原田栖子

かな女賞 高橋さだ子

新珠賞 井上けい子、西谷裕子

・三木多美子(季音同人)逝去

### 平成十四年

・松本親枝(季音同人)逝去：一月

・平成十三年度三賞ならびに平成十四年度新

珠賞発表：五月

水明賞 星野光二、三浦文子

季音賞 岩谷精一、柚木治子、山之友江

かな女賞 椎野美代子

新珠賞 小林和枝、鈴木花子、佐々木順子

・句集出版 鈴木ゆき「青蕪」

・星野紗一主宰就任三十年祝賀会：十月

浦和東武ホテル、アピオ大阪、若狭天徳寺

会館

・松原歌子(季音同人)逝去：十二月

長谷川久枝(季音同人)逝去

### 平成十五年

・水明運営人事：一月

運営同人及び幹事 新任 椎野美代子

退任 小林美夜子

・平成十四年度三賞ならびに平成十五年度新  
珠賞発表：五月

水明賞 大川富美代

季音賞 星野光二

かな女賞 大橋迪代

新珠賞 駒 牧乃

・句集出版 西谷裕子「掌紋」、伊藤愛子「風

知草」、横溝やす子「花の坂」

・水明運営人事

運営幹事 常見知生、茂木和子

・川島喜由句碑建立：十月

・岡野白穂(季音同人)逝去：十二月

### 平成十六年

・川村悠太(季音同人、元編集長)逝去

・水明「新入集」雑詠欄新設：四月

・平成十五年度三賞ならびに平成十六年度新

珠賞発表：五月

水明賞 西谷裕子、高島寛治、小林和枝

季音賞 三浦文子、小林萬二郎

かな女賞 堀 敬子、山中順子

新珠賞 田寺玲子、森本早苗、長谷川佳子

・句集出版 川島喜由「一滴」、若本末子「茅

淳の海」

・水明の人事：七月

運営幹事（運営同人）堀 敬子、地方運営

同人 大橋旭代、岡谷徳津代（退）

・水明運営組織の改正と人事：七月

新設 普及部 佐々木久代、常見知生

広報部 堀 敬子、小林萬二郎

新運営同人・運営幹事 小林萬二郎

新会計幹事 立川京子、大澤玲子

新地方運営同人 佐藤 進、田中幹青

運営幹事退任、運営同人へ 小内春邑子

・瀬戸富美子（季音同人）逝去：八月

・水明の人事

新副主席 星野明世

### 平成十七年

・文野 和（季音同人）逝去：三月

・清水八重子（季音同人）逝去：四月

・平成十六年度三賞ならびに平成十七年度新

珠賞発表：五月

水明賞 大村節代、内田恵子

季音賞 大川富美代、服部みどり

かな女賞 該当者なし

新珠賞 井上とも子、加藤むら子

（準賞）山岸光江

・句集出版 茂木和子「隠し壺」、栢尾さく

子「秋柏」、池上貴誉子「別の木で」

・水明通巻九〇〇号記念号発行：八月

・横田さだ子（季音同人）逝去：十月

・第十三水明抄（合同句集）出版：十一月

### 平成十八年

・新主宰に星野光二就任：一月



星野 光二

前星野紗一主宰病氣療養のため。名誉主宰に就任。

・野田勇泉（季音同人、地区委員）逝去：二

月

・松本孝太郎現代俳句協会研修部長に就任：

三月

・平成十七年度三賞ならびに平成十八年度新

珠賞発表：五月

水明賞 小林あきを、井上けい子

季音賞 田寺玲子

高島寛治、小倉和子

かな女賞 山本松枝

新珠賞 齋藤祐輔、小野寺左右志良

山岸光江

・星野紗一名誉主宰六月二十二日逝去、享年

八十四歳、告別式は市内蓮昌寺会館にて星

野家と水明俳句会の合同葬により執り行な

われた。戒名 水月院知風紗一居士

・広瀬とし（季音同人）逝去：八月

### 平成十九年

・第一回新春俳句大会開催、於別所沼会館：

一月

・水明の人事

行事部長 山中順子

・星野光二主宰句集「透明」出版

・星野明世副主席三月二十一日逝去、享年

八十一歳

・平成十八年度三賞ならびに平成十九年度新

珠賞発表：五月

水明賞 森本早苗、町野広子、谷中菊乃

季音賞 黒田悦夫、松本光子、小林和枝

かな女賞 西村晴子

新珠賞 新津英子、境 延昭、大塚沙智子

・句集出版 橋本圭好子「月の兔」

・第一回紗一忌、六月二十四日、於別所沼会

館

- ・山本紫黄（運営同人）逝去：八月
  - ・第一回埼玉大例会、於埼玉労働会館：十月
- 平成二十年

平成十九年度三賞ならびに平成二十年度新  
珠賞発表

- 水明賞 田村みどり、由良ゆら女
- 季音賞 大村節代、川野妙子
- かな女賞 岡谷徂津代

新珠賞 船山 律、土屋富子  
句集出版 田村照子「石兔」、吉住光弥「関  
の声」

・水明の運営組織：七月  
常任運営幹事 茂木和子、運営幹事 山本  
鬼之介

- 普及推進部 山本鬼之介
  - ・広川 鴻（季音同人）逝去：八月
- 平成二十一年

・平成二十年度三賞ならびに平成二十一年度  
新珠賞発表

- 水明賞 島崎ゆきを、境 延昭
  - 季音賞 井上けい子、内田恵子、網野月を
  - かな女賞 該当者なし
- 新珠賞 岩松比奈子

- ・句集出版 高橋美枝子「絵臘燭」
  - ・水明發展基金 会長 吉田静二：九月
  - ・水明通巻九五〇号記念号発行：十月
  - ・第十四水明抄（合同句集）出版：十一月
- 平成二十二年

・橋本圭好子（季音同人、主宰句英訳者）逝  
去：二月

- ・吉田静二（常任運営幹事、水明發展基金会  
長）逝去：二月
- ・水明の運営組織：三月

常任運営幹事 山本鬼之介  
運営幹事 高島寛治、大村節代  
水明發展基金 会長山中順子：三月

・平成二十一年度三賞ならびに平成二十二年  
度新珠賞発表：五月

- 水明賞 土屋富子、岩松比奈子、兼 千晴
- 季音賞 田寺玲子、菊池ひろこ、酒井佑子
- かな女賞 山本鬼之介、星野和子

新珠賞 菊池洋子、五明 昇  
句集出版 岩谷精一「光る虻」、井上けい  
子「雪はたる」

・出井一雨（常任運営幹事、元水明發展基金  
会長）逝去：五月

・水明創刊八十周年記念号発行：九月

（特別寄稿）金子兜太、宇多喜代子、松本旭、  
倉橋羊村、猪俣千代子、落合水尾、中里麥  
外、島田妙子、桑原三郎、三田 完

・水明創刊八十周年記念祝賀会（浦和ロイヤ  
ルパインズホテル）：九月  
・水明創刊八十周年を記念し「星野紗一全句  
集」刊行：九月

・星野光二・橋本圭好子英訳句集刊行：九月  
・川島喜由（季音同人）逝去：九月

・久岡 越（季音同人）逝去：十月  
・「新人集」廃止、通信指導開始（指導者山  
本鬼之介）：一月

・句集出版 城間弥生「冬の虹」  
平成二十三年

・新春座談会「俳句は生きる証」：一月  
・水明の運営組織：一月  
運営幹事 小林萬二郎

・星野光二主宰 埼玉県俳句連盟会長に就任  
・矢田志づ代（季音同人）逝去：四月  
・平成二十二年度三賞ならびに平成二十三年  
度新珠賞発表：五月

水明賞 山中みどり、新津英子  
季音賞 森田祥絵、吉澤純枝、白井由美

かな女賞 該当者なし

新珠賞 梅澤佐江、池田雅夫、藤井清子

・「水明の記事」を「風声」と改題：六月

・兼 千晴（季音同人） 逝去：十一月

平成二十四年

・表紙絵作者本号より本田晶子画伯：一月

・岩谷精一（季音同人）、原 晴朗（季音同人）

逝去：一月

・中西磨智子（季音同人） 逝去：二月

・星野光二主宰 第二句集「光年」を刊行：

三月

・平成二十三年度三賞ならびに平成二十四年

度新珠賞発表：五月

水明賞 大塚沙智子、長澤健次、石井喜恵

季音賞 境 延昭、島崎ゆきを、森本早苗

かな女賞 該当者なし

新珠賞 新谷鬼山

・星野光二主宰 第一句集「透明」・第二句

集「光年」出版記念祝賀会（浦和ロイヤル

パインズホテル）：八月

・田原重子（季音同人） 逝去：九月

・第一回鍛錬会（嵐山・国立女性教育会館）：

十月

・島津城子（元季音同人、俳誌「鳥羽谷」前

主宰、元若狭水明会指導者） 逝去：十月

平成二十五年

・水明の運営組織：一月

運営幹事 境 延昭

・田代未知（季音同人） 逝去：一月

・戸沢秀晃（同人） 逝去：三月

・平成二十四年度三賞ならびに平成二十五年

度新珠賞発表：五月

水明賞 井上とも子、宇田白鷺、鳥羽和風

季音賞 半谷比奈子、由良ゆら女、

大浜洋子

かな女賞 吉住光弥

新珠賞 和田隆一、荒井俱子

・星野光二主宰 さいたま市民大学で「水明

と浦和・星野兄弟の俳句」を講演：五月

・水明通巻一〇〇〇号記念吟行旅行（青森県

十和田（津軽方面）：五月

・「発行所夏行」を「水明夏行」と改め浦和

パルコで開催：七月

・「松中俳壇」（東松山中学校）の掲載開始：

十月

・水明通巻一〇〇〇号記念特集号発行：

十一月・十二月号

（特別寄稿）波多野寿子、長谷川知水、宇

野由希子、山本鬼之介、大橋旭代、永野史

代、服部みどり、菊池ひろこ、矢作アイ子、

宇田白鷺、島津初花

・水明通巻一〇〇〇号記念祝賀会（浦和ロイ

ヤルパインズホテル）：十一月

・水明通巻一〇〇〇号を記念し「長谷川かな

女全集」刊行：十一月

・水明通巻一〇〇〇号を記念し別所沼公園

内のかな女句碑の化粧直しと説明板設置：

十二月

・句集出版 西山貴美子「秘密」

平成二十六年

・水明の運営組織：一月

常任運営幹事 境 延昭

・佐々木久代（季音同人） 逝去：一月

・さいたま市公園緑地協会主催「はじめての

俳句入門教室」に全面協力開始：四月

・平成二十五年年度三賞ならびに平成二十六年

度新珠賞発表：五月

水明賞 五明 昇、丸山マスマ

季音賞 土屋富子、町野広子、田村みどり

かな女賞 該当者なし

新珠賞 井口俊晴、金 光月

・立川京子（元季音同人） 逝去：五月

- ・水南通卷一〇〇〇号を記念し調神社境内の  
かな女句碑の化粧直しと説明板設置：五月
- ・俳句初学の人を対象にした句会「皁月の会」  
誕生：五月
- ・水明運営体制を抜本改正：十月
- 副主宰 山本鬼之介
- 運営幹事長 山中順子
- 編集長 星野和葉
- 常任運営幹事 小林萬二郎、大村節代、  
五明 昇
- 運営幹事 網野月を、加藤草太郎
- 総務部長 茂木和子、
- 研修部長 境 延昭、
- 事務局長 五明 昇
- ・第十五水明抄（合同句集）出版：十一月
- ・句集出版 五明 昇「花林檎」
- 平成二十七年
- ・発行所簡易リフォーム（ブッシュホン電話・  
椅子式句会室）：二月
- ・虚子記念文学館「虚子に導かれた大正期女  
流俳句の変遷」展（四月一日から八月九日）  
に長谷川かな女の資料を貸与：二月
- ・網野月を 現代俳句協会幹事（事業部長）  
に就任：四月

- ・水明創刊八十五周年・主宰就任十周年記念  
事業 故島津城子句碑建立除幕式（若狹  
町）、祝賀会（小浜市）：四月
- ・星野光二主宰 埼玉県俳句連盟会長を退任、  
名誉会長に就任：四月
- ・平成二十七年四賞発表：五月
- 水明賞 松宮保人、宮崎雅訓
- 季音賞 石井喜恵、山中みどり、長澤健次
- かな女賞 茂木和子、小林萬二郎
- 新珠賞 宇野勘大、大場順子、松井由紀子
- ・水明創刊八十五周年・主宰就任十周年記念  
吟行旅行（金沢・能登・福井方面）：五月
- ・古賀恵美（季音同人）逝去：六月
- ・星野光二主宰 第三句集「弓勢」刊行：  
十一月
- ・水明創刊八十五周年・主宰就任十周年記念  
号発行：十一月二十月号
- ・（特別寄稿）長谷川知水、椎野美代子、山  
中順子、宇野由希子、鳥羽和風、波多野寿  
子、栢尾さく子、西山貴美子
- ・水明創刊八十五周年・主宰就任十周年記念  
祝賀会（浦和ロイヤルパインズホテル）：  
十一月
- ・水明創刊八十五周年・主宰就任十周年記念

- 事業打上げ旅行（信州方面）：十二月
- 平成二十八年
- ・表紙絵作者本号より内田恵子画伯：一月
- ・水明の運営組織：一月
- 運営幹事 長澤健次
- ・平成二十八年水明四賞発表：五月
- 水明賞 池田雅夫、藤沢喜久、荒井俱子
- 季音賞 矢作水尾
- かな女賞 該当者なし
- 新珠賞 近藤 徹、森 和子、森川義子
- ・リレーエッセイ「俳句のある風景」連載開  
始：五月
- ・星野光二主宰が平成二十八年度埼玉県文化  
団体連合会文化選奨を受賞：六月
- ・「文学の集い」星野光二のすべて」（文化  
選奨受賞記念、さいたま文学館）：八月
- ・星野光二主宰が「埼玉文学講座」文学者そ  
の人と作品」で長谷川かな女作品の講演  
（さいたま文学館）：九月
- ・人事 常任運営幹事 加藤草太郎
- 平成二十九年
- ・句集出版 境 延昭「山の子」：二月
- ・平成二十九年水明四賞発表：五月
- 水明賞 田中千穂、宇野勘大、大場順子



山本鬼之介

季音賞 五明 昇、井上燈女、宇田白鷺  
かな女賞 森 千代子

新珠賞 保坂昭一、大塚茂子

人事 監事退任 大川富美代：五月

監事 山中みどり：六月

・若狭句碑めぐりバスツアー（二泊三日）：  
五月

句集出版 五明 昇「道草」：九月

・鍛錬会を「水明塾」に衣替え：十月

・人事 常任運営幹事 長澤健次：十一月

平成三十年

・平成三十年水明四賞発表：六月

水明賞 福田藤十郎、井口俊晴、井上玲子

季音賞 丸山マスマ、鳥羽和風

かな女賞 該当者なし

新珠賞 渋谷きいち、飛水 鼓

・星野光二水明第四代主宰逝去：十月

・山本鬼之介水明第五代主宰就任：十一月

・第十六水明抄（合同句集）出版：十一月  
・半谷比奈子（季音同人）逝去

・人事 常任運営幹事退任 長澤健次：十二  
月

平成三十一年・令和元年

・人事 常任運営幹事 日高 徹：一月

・人事 常任運営幹事 網野月を：三月

・水明の運営組織：四月

・運営幹事 小林萬二郎、椎野美代子

・令和元年水明四賞発表：六月

水明賞 加藤草太郎、梅澤佐江

季音賞 藤沢喜久、荒井俱子、池田雅夫

かな女賞 大村節代

新珠賞 青木鶴城、野田静香、越田榮子

・如月忌（秋子・嵯迷忌）、紗一忌、光二忌  
を統合し「水明忌」を新設：六月

・人事 常任運営幹事 石山かつ子：六月

・人事 常任運営幹事 青木鶴城、保坂翔太  
：七月

・句集出版 吉住光彌「遍路」：七月

・水明俳句会のホームページ開設：八月

・吉澤純枝（季音同人）逝去：九月

・加藤草太郎（季音同人）逝去：十月

・水明創刊九〇周年記念魁旅行（信州方面）：  
十月

・発行所簡易リフォーム（総務・編集室の洋  
室化）：十二月

令和二年

・本号よりフロント面に「華の一句」欄新設  
：一月  
・本号より表紙裏面に「今月のかな女」掲載  
開始：二月  
・新型コロナウイルス感染拡大の影響で「春  
の吟行会」を十一月に延期：三月  
・新型コロナウイルス感染拡大の影響で水明  
創刊九〇周年記念祝賀会・全国大会を十一  
月に延期：四月  
・令和二年水明四賞発表：五月  
水明賞 正木萬蝶、近藤徹平、大塚茂子  
季音賞 大場順子、山田美佐尾、森川義子  
かな女賞 矢作水尾  
新珠賞 日高 徹、染谷正信、梅澤輝翠  
・人事 監事退任 町野広子：六月  
監事 新 曆文：六月  
・水明創刊九十周年記念号発行：八、九月号





昭和四三年	昭和四二年	昭和四一年	昭和四〇年	昭和三九年	昭和三八年	昭和三七年	昭和三六年		かな女賞								
									季音賞								
小内春邑子	小内春邑子	大木 紺青	石原宇宙児	中山 玲子	西村 晴子	杉本 文彦	佐野 蹊子	神野ともえ	横道 秀川	佐野 蹊子	小田鳥迷子	福岡 浪子	小泉 小泉	落合 水尾	水明賞		
佐々木久代	白石のぶ子	石上しまえ	阿部正一郎	田中 幹青	大内 敏子	瀬下 黄昏	榎本 具子	坂本 欣司	穴戸 祥二	荒木美也子	小川 久夫	木村 秋峰	中山 玲子	薄井登美女	浅野 耕月	新珠賞	
昭和五一年	昭和五〇年	昭和四九年	昭和四八年	昭和四七年	昭和四六年	昭和四五年	昭和四四年	昭和四三年		かな女賞							
										季音賞							
佐々木久代	古我 菊治	中村 千絵	松原 歌子	小林 京子	田村 九路	星野 明世	広瀬 とし	穴戸 祥二							水明賞		
関口 正子	須永 洋子	山本 松枝	市田一虚生	小林美夜子	大澤 玲子	松原 歌子	水沢 竜星	波多野寿子	小林 京子	星野 明世	水野 麗	梅原 啄朗	広瀬 秋良	内田吾亦紅	富田 恒則	飯村 清子	新珠賞

昭和五一年	かな女賞	季音賞	水明賞	新珠賞
昭和五二年				
昭和五三年				
昭和五四年				
昭和五五年				
昭和五六年				
昭和五六年	かな女賞	季音賞	水明賞	新珠賞
昭和五七年				
昭和五八年				
昭和五九年				
昭和六〇年				
昭和六一年				
昭和六二年				
昭和五六年	かな女賞	季音賞	水明賞	新珠賞
昭和五七年				
昭和五八年				
昭和五九年				
昭和六〇年				
昭和六一年				
昭和六二年				
昭和五六年	かな女賞	季音賞	水明賞	新珠賞
昭和五七年				
昭和五八年				
昭和五九年				
昭和六〇年				
昭和六一年				
昭和六二年				

昭和六三年	かな女賞	花輪山思郎 川島 喜由	季音賞	広瀬 とし 高野 万里 池上貴誉子	水明賞	大橋 迪代 川村 悠太	新珠賞	黒沢みさお 森 あい子
平成元年	山本 紫黄 小内春邑子	西山貴美子 堀 敬子	吉田 静二	椎野美代子 岡村 一郎	岡崎るり子 田原 重子 中西磨智子	故ほしのおる 山中 順子	田原 重子 戸沢 可伊 茂木 和子	田原 重子 戸沢 可伊 茂木 和子
平成二年	村尾蕉雨女 杉本 文彦							
平成三年	島津 城子 広瀬 とし	出井 一雨 大橋 迪代	依谷美智子 黒沢美紗緒	田原 重子 和子	星野 和子 柚木 治子	星野 和子 柚木 治子	星野 和子 柚木 治子	星野 和子 柚木 治子
平成四年	中山 玲子 日吉登美女	椎野美代子	神田九十九 森 あい子	田川 澄絵 河村 真里 酒井 佑子	高橋美枝子 富川三枝子	永野 史代 杉田みつる 石山かつ子	中澤 妙子 加藤 礼子 町野 広子 増田くみ子	中澤 妙子 加藤 礼子 町野 広子 増田くみ子
平成五年	立川 京子 佐々木久代	川村 悠太 依谷美智子	田村 照子 中西磨智子	河村 鞠	星野 和子	狩野 睦子 柚木 治子	町野 広子 小林 和枝	町野 広子 小林 和枝
平成六年	出井 一雨	山中 順子	茂木 和子	清水 緑子		戸沢 可伊		
平成六年					波多野寿子	上岡 正子 黒沢美紗緒	吉田蒼生子	三浦 文子
平成七年		小林美夜子	長谷川久枝 山本 松枝 弥永 信子	富川三枝子	松本 光子			
平成八年		永瀬千枝子 吉田蒼生子 神田九十九	高橋美枝子 常見 知生	石山かつ子 酒井 佑子				
平成九年	小林 京子 長谷川エミ 佐藤 緑芽	田村 照子 茂木 和子	星野 和子 柚木 治子	小倉 和子 柚木 治子				
平成一〇年	吉田 静二 川村 悠太 野田 勇泉							
平成一一年	池上貴誉子 大澤 玲子							

平成一八年	山本 松枝	高島 寛治 小倉 和子	小林あきを 井上けい子 田寺 玲子	齋藤 祐輔 小野寺左志良 山岸 光江	
平成一七年		大川富美代 服部みどり	大村 節代 内田 恵子	井上とも子 加藤むら子 山岸 光江	
平成一六年	堀 敬子 山中 順子	三浦 文子 小林萬二郎	西谷 裕子 高島 寛治 小林 和枝	田寺 玲子 森本 早苗 長谷川佳子	
平成一五年	大橋 廸代	星野 光二	大川富美代	駒 牧乃	
平成一四年	椎野美代子	岩谷 精一 柚木 治子 山之上友江	星野 光二 三浦 文子	小林 和枝 鈴木 花子 佐々木順子	
平成一三年	高橋さだ子	原田 栖子	黒田 悦夫 小林 廸子 金子はる子	井上けい子 西谷 裕子	
平成一二年	永瀬千枝子	石山かつ子	山之上友江 岩谷 精一 金谷 和子	北上 正枝 黒田 悦夫	
	かな女賞	季音賞	水明賞	新珠賞	
平成二五年	吉住 光弥	半谷比奈子 由良ゆら女 大浜 洋子	島崎ゆきを 森本 早苗	境 延昭 大塚沙智子 長澤 健次 石井 喜恵	
平成二四年		井上とも子	宇田 白鷺 鳥羽 和風	和田 隆一 荒井 俱子	
平成二三年		森田 祥絵 吉沢 純枝 白井 由美	山中みどり 新津 英子	梅澤 佐江 池田 雅夫 藤井 清子	
平成二二年	山本鬼之介 星野 和子	田寺 玲子 菊池ひろこ 酒井 佑子	土屋 富子 岩松比奈子 兼 千晴	菊池 洋子 五明 昇	
平成二一年		井上けい子 内田 恵子 網野 月を	境 延昭 島崎ゆきを	岩松比奈子	
平成二〇年	岡谷值津代	大村 節代 川野 妙子	田村みどり 由良ゆら女	船山 律 土屋 富子	
平成一九年	西村 晴子	黒田 悦夫 松本 光子 小林 和枝	森本 早苗 町野 広子 谷中 菊乃	新津 英子 境 延昭 大塚沙智子	
	かな女賞	季音賞	水明賞	新珠賞	

令和元年	大村 節代								
平成三〇年		丸山 マスミ	鳥羽 和風	井口 俊晴	井上 玲子	福田 藤十郎	飛谷 さいち	飛永 鼓	
平成二九年	森 千代子	五明 昇	井上 燈女	宇野 勤大	大塚 順子	田中 千穂	保坂 昭一	大塚 茂子	
平成二八年		矢作 水尾	荒井 喜久	森 和子	森 義子	池田 雅夫	近藤 徹		
平成二七年	茂木 和子 小林 萬二郎	石井 喜恵	山中 みどり	宮崎 雅訓	大場 順子	松宮 保人	宇野 勤大		
平成二六年	かな女賞	土屋 富子	町野 広子	丸山 マスミ	金 光月	五明 昇	井口 俊晴		
		季音賞	田村 みどり	新珠賞		水明賞			
			池田 雅夫						
			荒井 俱子						
			藤沢 喜久						
			梅澤 佐江						
			加藤 草太郎						
			青木 鶴城						
			野田 静香						
			越田 栄子						

令和二年	かな女賞	季音賞	水明賞	新珠賞
	矢作 水尾	大場 順子	正木 萬蝶	日高 道を
		山田 美佐尾	近藤 徹平	染谷 正信
		森川 義子	大塚 茂子	梅澤 輝翠

## 『長谷川かな女全集』

女流俳人の草分け的な長谷川かな女の全句集・随筆を  
纏めて、『長谷川かな女全集』とし、刊行しました。

刊行 平成二十五年十一月

監修 星野光二

出版社 株式会社 東京四季出版

購入ご希望の方は、代金を添えて、水明俳句会事務局  
宛にお申込下さい。なお、価格はご相談に応じますので  
お問い合わせ下さい。

皆様からの多くのお申込をお待ちしております。

水明俳句会

# 「現代俳句カレンダー 2021」

## 販売のご案内

昨年から体裁が一新され好評を博しました現代俳句カレンダーの注文を受け付けています。今年も引き続き多くの会員からのご注文をお待ちしています。

◆体 裁：B4判の上下二連

◆価 格：1,200円／1冊（定価の2割引）

◆注 文：下記の通りお願いします。

葉書に3項目を明記する。

①注文者の住所・氏名・連絡先電話番号

②注文冊数

③受取り方法[発行所で引取・自宅又は指定先に発送]

葉書の宛先は、〒330-0064 さいたま市浦和区岸町  
4-10-21 水明俳句会 カレンダー係

◆備 考：水明俳句会より4名の俳句が載ります。

3月 星野和葉・椎野美代子      6月 山中順子

8月 山本鬼之介（短冊揮毫）

※間違い防止のため、ご注文は葉書でお願いします。葉書以外の注文はご遠慮ください。

※ご不明の点については、[総務部 日高道を]

TEL 048-822-8370 090-2122-1223 へお問合せください。

主 宰 山本鬼之介  
総務部長 茂木 和子

# 近辺散策

鈴木康世

黎明の空 紫陽花は彩深く  
鴨足草群れ咲き抜け路明るくす  
藪草や恍惚顔した陶狸  
大瑠璃や恋しい人と逢へたよな  
多羅葉に記す一句や風薫る  
夏薊の棘に触れたる咎は何  
忍冬の花散る白き刻の失せ

野草を見ると兄達の植物採集について行き帰ってから押葉標本にしたことや、指導の先生の楽しいお話、起源、効用とか難しい言葉は解らなかつたが厭きることには無かつた。次は何時行くかと待ち遠しかつたのを覚えてゐる。八十年前の遠い記憶が昨日の様に甦る。

今も野草を見ると押し花にと思ふのを成る程と。朝の散歩を始めたので野草と接する機会が増えた。自然と親しく話をしながら残された月日を過ごしたいと思つてゐる。



# 梅雨の晴

石山 かつ子

並足の馬の調教梅雨晴間  
通し鴨動物園を住処とす  
草茂る狸の親子深ねむり  
本土狐ほつそりとして夏毛なる  
兎の声に縞馬縞をほぐし夏  
声張りて虎のいらいら梅雨の空  
牛蛙動物園の昼さがり

今年、コロナウイルスの緊急事態宣言に、友達と会うこともままならなくなってしまった。運動の為に又、季節の移ろいを身近に感じたくて家庭菜園に通っている。

消毒のしていない苺の大きな粒は、とても食べきれない。熟しすぎると虫の餌になってしまう。莢豌豆は毎日採らなければどんどん育ちすぎて豊作すぎて近所に配っても余って捨てる事になってしまった。毎年同じ作物を蒔いても同じとは限らない。素人の悲しさその年によりさまざまである。

# 冠木門

● 主宰作品の鑑賞

境延昭

五月号

目礼の様になるひと藤の苑

横目、目配せ、流し目、ウインク勿論色目とも違う。音は同じだが黙礼でもない。昭和の頃迄は確かにあった。声をかけるには憚られる場面にあつて、互いに視線を交わせた挨拶。それ自体たしなみ深い仕草だったと思うのだが、その目礼が様になる人に思いを巡らす。「眼を付けた」と凄まれた記憶があり男ではない。「目は口ほどに……」とは言うものの男女の間でもなさそうである。女性の女性に対しての目礼に違いない。まず余裕、優美そして少々上から目線。花に喩えれば藤の花を置いて無い。比喻でもべた付きでもなく、二物対応で詠む。藤八句冒頭に座る納得の句である。

藤浪と競ひあふかにフラダンス

代表句に「マネキン……」のある作者だが片仮名の句は極端に少ない。フラダンスはハワイのガイドの話では元は男だけの折りの踊り。それが転じて男女の愛を表す女の踊りになったという。八頭身ではなく、腰回り豊かで小太りの女性によく似合う。「フラガール」のファンからは異論有りそうだがあれはフラ、ショウの世界である。句は公民館の文化祭の

イメージに近い。比喻の巧みに脱帽する。

黒塀の窠れを慰する藤の房

サンフランシスコ講和条約から間もなく、未だ戦後色が強く残っていた頃「お富さん」の唄が流行った。涙垂れ小僧までが科白入りで歌っていた。あの黒塀である。昭和のオリンピックの頃までは日本橋や人形町など普通に目にした。

柿洪に松を焼いた煤を入れた洪墨、日本古来の技法で塗りを重ねて独特の黒色を出す。防虫、防腐、防湿の効果がある。同じような効果のある焼杉とは違った、しっとりとした風情の趣きがある。「窠れ」は毀れでも傷みでもなく、目立たないが何となくみにくい様。黒塀と藤の房をとりもつ中七の巧みに注目する。

出窓より藤に語らふ夜想曲

音楽にはほとんど知識が無い。夜想曲の元はノクターン、ラテン語の「夜の」に由来すると云う。その上でショパンの「ノクターン二番」を聴いてみる。正直、曲に夜のイメージは湧かない。しかし「藤に語らふ夜想曲」には納得する。交響曲や協奏曲では重過ぎる。窓辺で愛を語るセレナーデとも違う。ノクターンのピアノの音が似合っている。

## 六月号

### 乱取りの猛き乙女ら薄暑光

乱取りは格闘技である柔道の自由に出し合う練習法である。女子高生か、猛きと云うからにはさぞや荒々しい乱取りであろう。薄暑は初夏のやや暑さを感じる頃の気候、涼風や木陰を欲する気持ちが続く。下五の薄暑光には、乱取りの乙女らをまぶし気に見る気分が伝わる。

### 蠟石の落書のみち若葉風

粘板岩の薄板に木製の枠を付けた石盤と蠟石は小学校新入生に必須の筆記用具、繰り返し書くことで仮名や簡単な算数などを覚えた。昭和二十年代の中頃までは誰もが知る学用品であった。石盤や蠟石が学用のお役目を終る頃から徐々に道路の舗装が進んだ。未だ砂利道ばかりの田舎育ちには、蠟石で落書の出来る道は羨望の的であった。若葉風により羨望とはいかぬまでも爽やかな気分を感じ取る。今では都会に限らず、車の少ない路地ではどこでも可能。しかし道に落書する子供を見なくなった。

### 絵莫塵も半値廃業近き荒物屋

鍋釜から箒や束子など生活雑貨全てが揃った荒物屋、小さな町にも必ず在ったが見なくなった。ロードサイドのホームセンターに淘汰されたのであろう。絵莫塵も最近では使わなくなった。蘭草をいろんな色に染め上げて模様を織り出した絵

莫塵は畳の上、板の間そして縁側などに敷いて涼感を楽しんだものだ。町の生業と座ることから椅子への生活様式の変化を鋭く捉えている。

### 鞭声はただごとならず新樹邸

鞭声の文字面を見たとき、頼山陽の「鞭声肅々……」の漢詩が頭を過った。あの川中島の決戦を伝える詩の一節はこの言葉の持つ緊迫感、緊張感に因るところが大きいと思う。サド、マゾの家でもあるまいに、鞭の音のする邸とは何だろう。樹木の生い茂った広々とした邸宅を思い描く。若葉に覆われたみずみずしい新樹の枝は強い風に鞭のように撓る。季語「青嵐」の持つ季感に通じるものがある。

### 夕風や裏木戸あけて按摩さん

按摩さんには働き盛りの頃、幾人かに随分世話になった。腕がいいのは目が不自由で無口、耳と勘が鋭い人が多かったように思う。治療中の些細で断片的な会話を元に客を掴んでいた。そんな按摩さんに一種畏敬の気持ちもあり、勝新の「座頭市」のファンになった。

裏木戸を開けて按摩さんは、鼠の単衣に雪駄で細めの白杖を手に音も立てずに入ってくるに違いない。家と呼ぶことはなかったが、味気ない整体院ではなく昔の按摩さんが恋しくなりした時間が流れていた。

# 硯箱

◆季音六月

井口俊晴

化粧水肘を伝はるリラの冷え

椎野美代子

季節外れの暑い日が続き閉口していたが、今朝は肌寒いくらい。さわやかに目覚めることが出来た。ささっと洗顔をすませ、いつものように、化粧水をたっぷり手に取り顔に塗る。余分な化粧水が手首を伝って肘の方まで濡れてしまったが、それはそれで、また心地よい冷たさである。ふと、リラ冷えという言葉が頭に浮かんだ。朝食はコーヒートースト。おしゃれなパリジェンヌになった気分だ。

ももぞと又ももぞと小鳥の巣

星野 和葉

軒先に小鳥が巣を作ってしばらく経った。どうしているか、気になって時々見上げていたのだが、何も変わった様子はなさそうだった。ところが、たまたま小鳥が出かけた巣を見ると、何やらももぞと動いている。あれっ、またももぞと動いている。小さな雛が五羽、口ばかり大きくて、まだ眼はよく

見えていないようだ。しきりに首を振っている。餌を持って帰る親鳥を待っているらしい。

北斎の疫病退治図春惜しむ

山中みどり

コロナウイルス騒ぎの真ただ中。作者の地元にある「すみだ北斎美術館」には、葛飾北斎が八十六歳の時に描いた「須佐之男命厄神退治之図」(二七六<sup>ナシ</sup>×一二六<sup>ナシ</sup>、関東大震災で焼失)の復元された絵馬が展示されている。絵の中では、十五体もの疫病が、勇猛な須佐之男命にこっぴどくやっつけられ、今後は悪さを致しませんと約束をして、地べたに跪かされている。コロナウイルスだって、きつと退治される時が来るに違いない。

放牛の黒の光沢鳥雲に

森田 祥絵

渡り鳥が越冬の地を離れ、北の国へ帰る時がやって来た。群れの一羽が飛び立つと、後を追うように次々と空へ舞い上

がり、いつしか小さな点となり、雲の中へ消える。鳥たちが鳴き騒いでいた牧場では、枯草の下から緑の若草が伸びている。厩舎に閉じ込められていた牛たちは、朝の光の中、一斉に牧場に放される。太陽を浴びた牛の背は、がっしりと肉が盛り上がって黒光りしている。春が来て、去るものと送るもの、時の流れは絶え間ない。

## 囀りの真つ只中をペアルック

川崎 道子

雲一つなく晴れ上がった空、小鳥たちはピーチクパーチク、おしゃべりに余念がない。絶好の行楽日和。一組の若いカップルがこれ見よがしに、お揃いのプルオーバーを着て歩いている。ペアルックはちよつと気恥しいものだが、二人は全くそんな気配がない。同じブランドで同じデザイン、色までお揃いのピンクに統一している。恋愛真つ只中の二人が「囀りの真つ只中」を歩いている。

## 屈託の日の赤すぎるチューリップ

松井由紀子

真っ赤なチューリップが咲いている。午後の公園、柔らかな日差しの中、時おり吹いてくる風が、散歩する人の頬を撫でていく。地面をつついていた鳩が、歩く人の気配に慌てて飛び上がる。恵まれた家庭、穏やかな毎日、心配なんか全く

ないはずの私なのに、朝から気持ちが沈み、どうしようもない。それなのに、このチューリップの花びらは赤すぎる。いまの気持ちをどうにも制御出来ない私である。

## 楚楚として鎖骨の透ける春の服

梅澤 佐江

暑くなる季節のお出かけには、肌がほどよく見えて、風通しのよい「透け素材」のアイテムが今年のイチオシ。インナーが透けて見えるのも涼しげで、上品なお色気さえ感じさせる。娘たちのほつそりした、か細い鎖骨が透けて見えるデザインは、女性ファッションの原点回帰であり、マッチョな若者やオジサンを刺激すること間違いなし。作者ならではのファッション俳句である。

## 花の雲窓から見える五時間目

菅原 知子

学校はとても楽しいが、四時間目が過ぎて五時間目の授業ともなると、さすがに疲れる。校庭で体育の授業をしている声が、ここ三階の教室まで聞こえてくる。先生に気づかれないうちに欠伸をこらえ、横目で外を見ると、桜は今が満開。いい天気だというのに、陰気でややこしい微分積分の授業なんか放り出したくなる。と、そこへ先生の声。「知子さん、聞いていますか？」。

# 季音雪



水 輪 栢尾 さく子

夏の風海が大好き衣紋竹  
みなづきの山羊を繋ぎし縄湿る  
光琳の水輪が欲しき花菖蒲  
夏至の水長鳴き鶏の喉すべる  
父の日の箆筒ゲートル咬んでをり

噴 水 菊池 ひろこ

噴水と体内時計通ひ合ふ  
夏至の夜の夢のいつさい影絵劇  
夏至の日や太陽コロナ見しといふ  
夏至の夜置き跡かすか蓄音機  
異郷かな桜ん坊の樹を揺すり

涼 氣 五 明 昇

春 邑 子 先 生 椎 野 美 代 子

靈 山 へ 片 帆 の 揃 ふ 水 芭 蕉  
花 擬 宝 珠 馬 籠 の 坂 の 道 祖 神  
作 務 僧 の 涼 し き 立 居 著 莪 の 花  
ぶ ぶ 漬 や 宇 治 の 新 茶 の 役 ど こ ろ  
皿 鉢 な る 龍 馬 在 所 の 初 鰹

大 寺 の 畳 の 数 や 梅 雨 に 入 る  
僧 籍 を 背 な に 留 め し 梅 雨 の 月  
青 梅 雨 の 句 碑 の 文 字 よ り 翹 た ち ぬ  
梅 雨 寒 と 思 し 細 身 の 三 つ 揃  
青 梅 雨 や 虎 屋 の 金 の 虎 連 れ て

昭 和 の 調 べ 境 延 昭

立 葵 島 津 初 花

ハ ミ ン グ は 昭 和 の 調 べ 青 田 風  
釣 堀 に 胸 の 間 へ を 置 き に 来 る  
新 茶 売 る 小 旗 が 駅 の コ ン コ ー ス  
烏 賊 釣 の 船 が 海 猫 連 れ 帰 る  
山 懐 へ と ど く 波 音 著 莪 の 花

一 番 花 朝 の 笑 顔 や 立 葵  
父 の 日 や 六 方 焼 を 忘 れ ず に  
寝 返 り を 左 右 に う ち て 夜 の 雷  
鰻 屋 の 路 地 に こ も り し 火 の 句  
三 方 湖 の 鰻 と あ れ ば 持 て 囃 す

水羊羹 鈴木康世

際立ちし男の鼻梁水羊羹  
籠り居の読書三昧水羊羹  
好きな曲かけて緩りと水羊羹  
友の声今日は滑らか水羊羹  
生き死にを明るく語り水羊羹

短夜 田寺玲子

仏座す孤島の洞や風青し  
バンド組む八十路の四人星涼し  
短夜のねそびれて聴くノクターン  
短夜の天文台の灯のうるむ  
果実盛るギヤマン海の彩たたへ

女の業 永野史代

初鯉土佐の男の腕しまる  
往診カバン荷台にくくり麦嵐  
擬宝珠咲く脇本陣に雨つづき  
女の業ふと思ひつつ紫蘇を揉む  
無為の日の赤紫蘇強くつよく揉む

青水無月 西山貴美子

花菖蒲風に仕ふるかたちして  
こそばゆき首の後れ毛菖蒲園  
天下御免と水無月の髪切られけり  
髪切つて青水無月の風通す  
卓の百合然らぬ体して横を向く



梅雨深し 波多野 寿子

朝ぐもり 茂木和子

心地よく風吹きぬくる梅雨晴れ間  
津軽三味線ひびく楽器屋梅雨荒し  
逝きし友思へば滲む夏灯  
口ずさむ枕草子梅雨の月  
思ひ出は消えては浮かぶ螢の夜

樹の間より姦しき声朝ぐもり  
早起きの姉さん被り朝曇  
折り入つてと膝を寄せくる冷し酒  
茶道部の女子がサイダーを喇叭飲み  
くちなしの花の一日は清らかに

積ん読 星野和葉

十薬 矢作水尾

萍や人はいつまで手を繋ぐ  
萍や表裏なくして生きる道  
短夜や重き耳輪の置きどころ  
手近より積ん読くづす明易し  
別れ難き夢をひきずり明易し

十薬や昭和の戦くぐりぬけ  
十薬のかたまつてゐて孤独感  
白き歯が水泳帽を掴み上ぐ  
千年の樹液をためて山若葉  
鮑持つ手より浮み来稽古海女

夏の朝 山中順子

朝練の掛け声近く夏木立  
負け組にも明日があるさ夏の空  
露を煮てまこと清しき朝上がり  
まづ水を使ふ音から夏の朝  
ひと口の水胃に徹る青水無月

父の日 山中みどり

黄金色のクリームコロッケ父の日に  
受け継ぎし血のほの温し父の日来  
藍色の夢の続きや明易し  
短夜や真紅に塗りし足の爪  
捨てられぬ父の遺愛のパナマ帽

夏の祓 由良ゆら女

葉隠れにはにかむ少女梅実る  
飛びはねてみんな笑つてゐる実梅  
すべらかな幹の品格夏椿  
羅や老いの手足の置きどころ  
米寿へと宇治の水音夏祓

夏の虹 吉住光弥

牧の牛に給餌の銅鑼を朝曇  
奥の院雨に照り増す著莪の花  
空堀に雑兵の碑や著莪あかり  
釣堀や虹鱒にじを宙に描き  
せつなすぎる「となりのシムラ」朝の虹

片膝立てて 網野月を

雲の峰 石山かつ子

父の日や同じ薬を飲んでゐる  
黴を喰ふ黴バクテリア水の餅  
囚人脱走シマへビ衣を脱ぐ  
「同上」と住所欄へ濃あぢさゐ  
片膝立てて銃口に挿すカーネーション

梅雨入かな雲疾き日の昼の月  
青梅や開け放ちたる通夜の家  
葵祭の烏帽子・直垂・牛車ゆく  
直球は球児のこころ炎天下  
雲の峰トップギアーに入れ直す

ゆるやかに 石井喜恵

根来寺 大橋廸代

帆船の沖に停まる日永かな  
門灯に夜半の雫や朝ぐもり  
ゆるやかに固まるゼリー梅雨兆す  
走り梅雨育ちし家の代替り  
然りとて暮し上手や初鰹

明王の火炎に亀裂風青し  
苔の花を差し盗る銀の篋一丁  
僧兵の鬨にすつくと金毛虫  
繭を吐く毛虫に根来の子守唄  
力抜く仁王の拳ほうたる来い

朝ぐもり 大村節代

朝ぐもり逃ぐるをみなを見失なふ  
気がつけば何時もの男朝ぐもり  
折本の女いきいき花菖蒲  
端座して呼吸ととのへ夏書かな  
折櫃やしたり顔して新茶かな

「余分に水明誌」をご希望の方へ

水明会員の方に限り、「水明誌」を半額でお譲り  
します。

通常の号は一冊五百円になりますが、今回の合併  
号は一冊二千円ですので千円となります。

ご希望の方は総務部までお申し込み下さい。尚、  
以前の号も在庫があれば、お譲りします。

特集 人生100年時代 俳句の功德

特別企画 追悼・後藤比奈夫

◎巻頭作品10句

池田琴線女・遠藤由樹子・大串 章  
塩野谷 仁・鈴鹿呂仁・山崎 聰  
渡辺純枝

# 俳壇

9月号

8月14日発売  
定価900円(税込)

巻頭エッセイ  
檜山哲彦

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句「第Ⅱ期」……山本一步・田口紅子

新連載

思想としての虚子……中村雅樹  
続々日本の樹木十二選……広渡敬雄

連載

わが俳句道・わが金言<sup>モット</sup>……恩田侑布子  
先人のことば……宇多喜代子  
俳壇史エピソード……坂口昌弘  
俳壇への供物……奥坂まや

俳壇時評……堀田季何／俳壇月評……辻村麻乃

俳句と随想12か月 野中亮介・武藤紀子

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

# 季音月

青嵐 十倉和子

青嵐脱藩の徑いまもなほ  
 ギヤロップの乗り手は少女青嵐  
 全山をゆるがす瀧を神と見し  
 風葬のごとく散りしく沙羅の花  
 梅雨滂沱やはらかなる煉瓦塀

夏の霧 森本早苗

再会の六月の句座笑顔咲く  
 幾百の吊り灯籠や青嵐  
 六甲連山匿ふ気迫夏の霧  
 保護色の背より始まる雨蛙  
 詫びを書く夜の静寂を時鳥

颯爽と 柚木治子

裏木戸開く音につと立つ朝曇  
 空色の梅雨のコートで颯爽と  
 昼顔の吐息きこゆる待ち惚け  
 紫陽花や話題のはづむカフェラス  
 水時計天守に古りて青嵐

燕の子 高島寛治

初夏の濠は群青江戸古地図  
 早起きの駅舎育ちの燕の子  
 紫陽花の行き交ふ小道譲り合ふ  
 釣堀や釣りし雷魚を持て余す  
 青嵐車夫は黙して前屈み

とんぼとんぼ 松本光子

朝ぐもり鳥は鳴きつつ西空へ  
 マンションのトルコ石めく朝曇  
 調理場の板の掛声夏つばめ  
 とんぼとんぼ生まれし沼を離れず  
 こんもりと水無月の色森におく

魚 籙 丸山 マスミ

鎖樋を龍のごとくに夏の雨  
釣堀に時の疫<sup>え</sup>躲すディスプレイスタンス  
瀬の音の登り来る道著莪の花  
猷香の重きゆらぎや走り梅雨  
光跳び風転び来る那須の魚籙

めくばせ 小倉 倭子

夏至の日や話し上手に聞き惚るる  
夏至の日の白昼夢が覚めきれず  
夏至夕べ鳥に手を振る並木道  
胸せでもの言ふあなた夏至の暮れ  
戯曲のごと天窓に浮く夏至の月

水羊羹 森田 祥絵

新緑の色のこぼるる水の底  
夕されば青田の水が力抜く  
母の忌を修して和む水羊羹  
飽食の宮鳩群るる夏至の雨  
吹かれ寄る毛虫木瘤のふくれ面

夜のバラ 渡辺 舍人

夜のバラ指抜くやうにシヨパン了ゆ  
凌霄花の蔓先の思慮と見かう見  
お造りに大根の投網夏料理  
日向かひに打つて出ていく蟻一つ  
蝙蝠の闇より時の気<sup>け</sup>羽搏きぬ

授乳 町野 広子

目で叱る次男のやんちや夏来る  
関東に永住と決め初鰹  
藁焼きの切り身厚目の初鰹  
授乳する青白き胸明易し  
貝釦ほどのでで虫生まれけり

三方五湖 宇田 白鷺

三方湖や船縁に群れ菱の花  
河骨の浅瀬にともる菅湖かな  
久々子湖やポート飛沫を上げ始む  
紅さしの枝のたわわや水月湖  
日向湖の小鯖群れなす海の風

土用の丑 鳥羽和風

鰻飯「う」の字がくねる青暖簾  
蒲焼のけぶりを叩く渋団扇  
肝吸で締むる鰻のフルコース  
縁日の子等を遊ばす痩せ鰻  
町家みな鰻の寢床夏の風

紫陽花 井上燈女

青梅や過不足なしの厨妻  
紫陽花の雨上りたる沼辺りに  
休耕田今年植田となりにけり  
魔除けなる草鞋一丈山開き  
更衣して少女らの口軽く

夏落葉 白井由美

広がりし隣家の大樹夏落葉  
夏鶯一声放ち飛び発てり  
葉桜や路地休校の子等の声  
コ罗纳禍やかな女句集を夏炬燵  
梅雨晴や法要成りて安堵の途

短夜 井関礼子

短夜や枕辺に置くメモひとつ  
短夜の鳥の啼音に明けにけり  
老鶯の自演独唱ひねもすを  
夏蝶の蜜吸ふ術を飛び交ひて  
夏蝶の住処としたる狭庭かな

遠泳 山田美佐尾

遠泳やあの鳥めざし俺の海  
まくなぎや「是より木曾路」馬籠宿  
まくなぎや鈴蘭燈をけぶらせて  
薔薇大輪力みなぎるその根かな  
夕暮れて十葉の花浮きあがる

初夏の風 大場順子

初夏の風合せ鏡に走る真帆  
初夏の白き卓布に触るる膝  
反転のなりし一瞬燕の子  
正座くづさず水羊羹を京女  
釣堀やみな赤銅の顔馴染

玉四葩 森川義子

竹垣の結び目新た濃紫陽花  
倒影の水面あやなす濃紫陽花  
毬のごと弾む少女や玉四葩  
黒南風の埠頭に戻る練習船  
刻刻と卯波寄せくる河口かな

かたつぶり 藤澤喜久

人の世は不要不急ぞかたつぶり  
泣きつ面にでて虫角出せ頭出せ  
万緑に野球少年散らばりぬ  
蚊帳吊草大人も独り遊びせり  
三密の一つ外して夜の新樹

尼僧 荒井俱子

卯の花腐し夫の背に貼る温湿布  
空梅雨や畔に田の神水の神  
水音の消えし小流れ旱梅雨  
放たれて風と和したる草矢かな  
姫姿羅や尼僧は紅をほんのりと

放射熱 池田雅夫

七月の太陽青き放射熱  
日の盛り高層ビルの被り来  
炎天の道くらくらと蕩けだし  
日焼して歳相応に見られ得ず  
贅沢に一人一部屋夏館

早苗饗 原田想子

早苗饗や使ひ走りも遠き日に  
郭公の気合に覚むる村の朝  
箱庭に先づ一山を据ゑにけり  
お目当ては庭のあの木や夏の蝶  
転がりし新じやがよけて郵便夫

半夏生 松宮保人

緑蔭や登りて見ればのろし台  
ほうふら奴め古道の地蔵を住処とす  
父の日ややはり親爺は野良に居し  
半夏生国吉城主の居館跡  
海寺の薨を染めし大夕焼



著莪の花 内田 恵子

著莪の雨老舗の艶の串だんご  
釣堀や目深にかぶる野球帽  
夏落葉焦げすぎとなるミートパイ  
ゆつたりと写経する母夏座敷  
庭石の墓は大御所夕間暮れ

青 嵐 川崎 道子

青嵐直線コースの馬に鞭  
水攻めの城趾に佇ち青嵐  
短夜の月に名残りの始発バス  
父の畑失する捺印花石榴  
蚊柱や訃報を急ぎ回さねば

朝 曇 岡野 順子

待ち合はす人とはつたり朝曇  
朝曇舗装のタイル落ち着きて  
豆飯の豆の青さを噛み締めて  
水羊羹ぷるりんとして口中に  
お目当ては京の老舗の水羊羹

青 梅 加藤 むら子

青梅を枘に大盛り物産店  
土産にと青梅洗ふ釣瓶井戸  
今空き地花十葉に足を止む  
旧友と訛の会話夏帽子  
残さるる水車のリズム菖蒲園

青 嵐 川野 妙子

オートバイ並ぶ店先夏来る  
青嵐腕ひろぐる大櫛  
走り来る幼児の笑顔青嵐  
父のあと追ひかくる子の赤い靴  
薔薇散るや花の慟哭そのままに

☆ ☆

# 季音花

薰風

梅澤 佐江

散骨の船の水脈消す臯月波  
甘噛みの子犬の和毛風薫る  
薫風にたちまち染まりゆく身体  
まくなぎの道に入り日のやはらかし  
めまとひを抜けて逢ひたき人にあふ

十葉

松井 由紀子

十葉の白の鋭き夜明けかな  
十葉や立ち返りくる失意の日  
疫禍なほ首振り止まぬ扇風機  
父の日や田舎酒汲む父と居り  
六月の雨なま温き昼の街

怪物

近藤 徹平

大西日富士を見下ろす舳斗雲  
帆船さながら白蝶運ぶ蟻の列  
偲ばるる遠流の御霊さつき波  
夏草や昭和の遺る忠魂碑  
ウイルスは見えぬ怪物浮いてこい

青葉風

上戸 千津子

須磨の鐘笛にも似たり青葉風  
浮雲の行方追ひたし芙美子の忌  
コロナ禍に席は市松夏授業  
水貝に潮の遠鳴り絡みあふ  
山彦に山羊も一声夏六甲

行方

井口 俊晴

明易し添寝の犬に起こされて  
朝と夕規則正しく蛙鳴く  
熱くとも首まで漬かる菖蒲の湯  
ビニール傘梅雨の行方は不透明  
遠泳や舟の太鼓に声そるへ

あぢさゐ 中野

さくらんぼ箱に輝き歌があり  
あぢさゐの紫濃くし雨深し  
手で包みあぢさゐの藍傷つけず  
梅もぐやかごに山なす宝物  
食前の長寿の梅酒透き通る

疆

薄荷の匂ひ 正木萬蝶

花栗やまだ柔らかき喉仏  
空堀にふと水匂ふ夏至夕べ  
夏至の夜の濤声にぎりゆく旅寝  
くちづけは薄荷の匂ひ夕螢  
厄介なひと日を終ふ水羊羹

祭 笛 矢鳥

清

夏 至 菅原知子

合歡の花羽化する少女伏せ睡  
水のんでこの世に戻る昼寝覚め  
祭笛吹く長老の張り戻る  
屋根見せて家の流るる出水かな  
若葉風人は水見て憩ひけり

夕 映 え 井上玲子

秒 針 福田千春

サキソフオンのオブジェに踊る大噴水  
夕映えに染まる早苗田ささらなみ  
抱きよせて嬰の笑くぼよさくらんぼ  
釣堀に肩並べ居て寡黙なり  
夏めくや眼下に猛る鳴門渦

秒針の音せつかちに夏至の夜  
夏至の夕未完のままの砂の城  
妖精の影か過ぎゆく夏至の湖  
摘みにでる青紫蘇二枚昼餉どき  
芯強き妻の手仕事紫蘇を揉む

蓮見舟 大塚茂子

十葉の白さが殊に小暗がり  
築を組む水の浅さよ魚跳ぬる  
あめんぼのぶつかり合つて跳びにけり  
あめんぼの水輪のゆくへ小宇宙  
蓮見舟今咲く命耳すます

青葉 宮崎チアキ

幾代経し撫の大樹や青葉騒  
折をみて訪ねたき家河鹿鳴く  
梅雨の夜に何かを語る箱枕  
つらつら視れば双子ばかりよさくらんぼ  
夭折の友の生涯ねむの花

ブルーインパルス 熊倉千重子

編隊飛行五月の空を八の字に  
子の瞳にも踊る噴水メヌエツト  
ほろ酔が提げて家路へさくらんぼ  
北国の夕陽の色かさくらんぼ  
梅雨入かな少し派手目の傘を買ひ

ひつそりと 河野はるみ

煎餅焼く旧街道や風薫る  
まくなぎに横丁一つ違へたり  
罪人のやうにひつそり夏マスク  
薄墨に色取られたる夏の月  
夏至をはるクロスワードの解けぬまま

白紫陽花 石田慶子

地球儀の軸傾きて夏至ゆうべ  
夏至の日の始発のバスの客となる  
紫蘇二枚夫のこだはりオムライス  
紫蘇生える横歩きして宅配便  
白紫陽花塀の向かうは修道院

銀座朱夏 後藤綾子

雑草にひそむ鈴蘭香を放つ  
心なき人の言葉や薔薇白き  
家籠りも今日で百日夏鶯  
カンカン娘の発車メロデー銀座朱夏  
青年のピアスは荷札風薫る

紫陽花 松山清子

電車不通のホームに居りて夕立を  
著我の花動物慰霊碑取りかこみ  
紫陽花が柵をはみ出す磴のぼる  
紫陽花園白あぢさゐのひとときはに  
忌日なり夫の好みし瓜を漬け

濃紫陽花 西浦千枝子

寄進板に子の名大きく青嵐  
雷いかづちと名の付く在所麦の秋  
中将姫の秘話碑に濃紫陽花  
泰山木の花散り庭が錆色に  
登校の声やつと戻りぬ麦の秋

燕の子 野平美紗子

子燕の嘴五つ親を待つ  
時差登校の子らを掠めて夏つばめ  
天竜の築場料理や同級会  
小糠雨十葉の花白く冴ゆ  
十葉の蕾のままに抜かれけり

半夏生 田中章嘉

雷鳴に尻込みの犬頼りなし  
雷雲の去るまで二人喫茶店  
紫陽花を独り静かにスケッチす  
花魁の墓地に根付くは半夏生  
ウイルスも人に取り付き世界旅

新じやが 飛永鼓

境界線はここぞとばかり立葵  
父の日や睫毛の長き子は遠く  
子等並ぶ新じやがぱつくり弾けたり  
藍色の浴衣は過去を語らざり  
目の前を「ハイジ」駈けゆく雲の峰

梅雨に入る 下川光子

釣堀のゆるき時間を貰ひけり  
釣堀の親子に夕日とどまりぬ  
虎が雨山気のこもる切通し  
十葉の叢増ゆる夜健康茶  
濃あぢさゐ小雨に暗き寺の磴

俳誌望見 梅澤 佐江

『京鹿子』 令和二年五月号 通巻一一四九号

主宰 鈴鹿呂仁 発行所 京都府京都市

大正九年一月、鈴鹿野風呂が京都で創刊。師系高浜虚子。「作風は有季定型、新しさ個性豊かな作品をめざす」を理念とする。(月刊)

主宰句―特別作品一六句―「追憶の夏」より

余花白し阿国の像に逢ふ女よ

虚子の「余花に逢ふ再び逢ひし人のごと」の本歌取りで始まる。鴨川の畔に立つ歌舞伎の創始者、出雲の阿国像に見入る女性。(余花白し)の季語により、楚楚とした中に芯の強さを秘めている女性像が浮かび、更に阿国と重なって行く。

相老いの二人を揺らす余花の風

初夏に入って尚咲き残っている桜のように、ご長命で睦まじいご夫婦に余花の風がやさしく吹き過ぎて行く。自身も共にこう在りたいと願ったのだ。

一本の重みを胸に薔薇を買ふ

この一本の薔薇への深い思い入れ、それは贈る相手への心からの愛であり、前の二句は句を通した物語のプロローグに過ぎないのではないかと思わせてくれる。

徐に五音の言葉薔薇の夜

ゆつくりと発した五音の言葉とは「あいしてる」

それとも「ありがとう」であろうか。薔薇の香りが心を満たしてゆくかぐわしい夜である。一枚の小窓の写真薔薇飾る

えっ、もしや件の女性はすでに彼岸にいらっしやるのではと、作者の胸中を思うと途轍も無い寂寥感、喪失感が伝わり思わず目頭が熱くなった。さうあの日裕の君の眩しさよ

写真立ての中の女性は裕の着物姿。(あの日の君は眩しい程に輝いていて素敵だったね)と、遠眼差して面影を追っている。

香水の残り香さらふ風も黙

街騒の中でふと彼女を感じた。前に行く人の残り香が彼女の好んだ香水の懐かしい香りであったから咄嗟に名前を呼んでみたが、その声も香りも風に攫われ何事も無かったかの様にただ風が吹くのみのでピローグ。

神麓集 一一名 各五句より 三名を一句ずつ

からみ合ふ静かな魚紋水温む 藤岡 紫水

鬨つて生きる術策夏落葉 沼田 巴宇

腹の虫押さへ込みたる春の雷 丸井 巴水

京鹿子集 六一七名 主宰選 五名を各一句ずつ

大屋根の分厚き雪解永平寺 山中志津子

着ぶくれてこだはり一つづつ捨てる 井尻 妙子

自画像の遠景どこもおぼろなる 鷺山 珀眉

はだれ陽のまだら遊びや梅ふふむ 菊池 和子

「てにをは」に躡く夜の朧かな 安田 優歌

紹介した佳句はまさしく本結社のめざすところであり、宇宙広漢に万象の生命と共に遊ぶ洒脱であった。

# 句集喝采

近藤 徹平

## ◆河口 襄「星空」

喜怒哀楽書房

著者略歴 昭和十五年新潟県長岡市生。平成二年小澤克己に師事、四年「遠嶺」創刊に参加、九年編集長、十八年同幹事長。二十二年「遠嶺」終刊後、「爽樹俳句会」発足に参加、「爽樹」創刊・編集長、二十六年「爽樹」代表。「星空」は第四句集。他に俳人協会・現代俳句シリーズ「川口襄集」等多数。

著者「あとがき」によれば、「爽樹」創刊十周年を迎え、自身が傘寿を迎える今年（令和元年）一旦立ち止まり、初心に戻って真つ新たな気持ちで俳句に向き合えるよう自分を鼓舞していきたいし、流離の旅を続けたいと記している。

漁火の揺れオリオンに紛れ入る

釣瓶落し水平線を褥とし

陽炎の地軸傾け熱気球

地球儀に紛争はなし望の月

なまはげの吠え星空を湧きたたす

何れの句も身近な事象を大きな景の中に捉えた句で魅力たっぷりである。第一句は漁火の何気ない事象を天空の景ととらえた句。第二句は著者が夜空と夜の海に包まれていく句。第三句は熱気球の中に地球を見出す句。第四句は何でもない地球儀の中に紛争絶え間ない地球を否応なく連想させる句。

第五句は著者の解説によると平成二十九年元旦に秋田県男鹿真山神社で出会ったなまはげと星空を詠んだ句集の表題句。

## ◆渡辺 花穂「夏衣」

北辰社

著者略歴 昭和十九年富山県富山市生。平成十八年「天穹」俳句会入会、同二十二年「天穹花篝賞」受賞、同年同人。二十四年銀漢俳句会入会、二十六年同人。俳人協会会員。

著者は「あとがき」に「未知の世界を知りたくて入り込んだ俳句の世界。（略）森羅万象に五感を傾け、楽しい俳句を作り、豊かな人生にしたい」と記している。なお二つの結社同人として活躍し、本句集には両主宰の序と跋を載せている。駒草の揺れはマグマの微動かも

千丈の一瀑の影百態に

旅に出て数へ日ふたつ減らしけり

御手の影衆生に掛くる寝釈迦かな

補陀落の沖あをあと海開

著者が物理科卒業の理系女子と知り、理系男をハンデと言いつつ、いないな筆者は襟を正した。第一句の草花にマグマを連想する巧み、第二句の景の構造を数詞で巧みに表す仕掛、第三句は旅好きを数字で表す仕掛が秀逸である。第四句、第五句の梵語の扱いは、著者が仏門の出自と知り、納得できた。

夏衣消ゆることなき父の皺

金婚てふ重さも浮かべ柚子湯かな

父君の句が多いが第一句は句集の標題句。第二句は俳句を「お母さんの遊び」と見守る家族愛のにじむ句である。

# 現代俳句鑑賞

## 網野月を

池田 澄子

此の世の此処の此の部屋の冬灯  
春寒の夜更け亡師と目が合いぬ  
先生忌袖子を絞りし指を嗅ぎ  
師に関わる頁に付箋貼り夜長  
生きるときに春ならこの口紅

(句集「此処」より)

全三八〇句を取めた、作者の第七句集である。

句集の後記に「春寒の夜更け亡師と目が合いぬ」は『思つてます』を纏め終えたときの句で、次はこの句から始めようと思つた。」と記している。第一句と第二句とが初めのページに掲載されていて、句集は「体」(四十句)、「何処」(五十二句)、「この道」(三十六句)、「ときどき」(五十二句)、「どの道」(五十二句)、「中有」(四十四句)、「次」(四十八句)、「此処」(五十六句)の八部からなっている。第二句、第三句、第四句は御師へのオマージュ句なのであるが、他にも御師との関係性を有している句が散見される。

氏の句の特徴の一つに親しみやすさがある。咽越しがよいのである。ついつい過食して、後悔することがある。体中が発熱して、自分の句を見失ってしまうのである。真の句意は、

体の中に入ってからカプセルを割って拡散してくる。悪いことにその心地よさは何とも形容しがたいほどである。であるから、氏の句はクドクドと解説を必要としない。

先の引用に続けて氏は、「目を合わせた亡師・三橋敏雄は私の一句に何と仰るか。それを考えることを推敲と取捨の根底に置いた。結果は心細いけれど、師の厳しい目を意識することで、俳句と向き合ってきた。」と告白している。

句集にはむしろ、師との関係性を直接に感じる句ばかりではないのである。あらゆるものとの関係性を詠じる句が百出している。

こころ此処に在りて涼しや此処は何処  
敗戦日の落ちつつ大きくなる日輪  
まだ待てるこのマフラーは厚いから  
無花果や自愛せよとは何せよと  
夜な夜なや氷つつやならぬ池と鯉

後半、第二句は實際を象徴として取り上げる手法が際立つし、第三句はいわゆる「澄子節」と読める。第五句には氏の友情だろっ何かを感じ取ることができる。

特徴のもう一つに心と形がある。詠もうとする心と句意と



その心を容れる形Ⅱ器の合一が、謂わばオートクチュールなのだ。一対一対応している。俳句は五七五と季語のお陰で大量生産、大量消費、そして最近では大量廃棄をも誘引している。そこには存在予想される「至極」を目指す潮流があるのではないだろうか？氏の句はその対極にあつて、「無限」に広がる力を有している。だからこそ、そこには良い意味で中毒性があるのである。

### タキシードの黒を纏へる恋の猫

藤田 直子

〔俳句四季〕6月号・花きぶしより

さぞかしその猫の毛並みが艶々としていたのであろう。その毛並みにシルクの光沢を見てとつたのである。タキシードの呼称の由縁はニューヨークのタキシード公園であるから、恋の猫もその公園内に頻繁に見かけるだろう。人の恋も然りである。とするともしかしたら擬人法ならぬ擬猫法かもしれない。他に「水やれば土にゑくぼや茄子の苗」がある。

### 地虫出づ水城木樋の真暗がり

岸原 清行

〔俳句界〕6月号・梅花の宴より

「水城」は日本各地にある地名であるが、この「水城」は福岡県太宰府市・大野城市・春日市にまたがり築かれた日本古代の城のことであろう。天智天皇の命に依るもので、『日本書紀』にも記載がある。遺構には「木桶（もくび）」も在る。上五の季語「地虫出づ」の斡旋が秀抜である。

### 杉の花力チカチ鳴らすボールペン

後藤みち子

〔俳壇〕6月号・紙風船より

ボールペンの用途は鳴らすものではないのである。上五の季語「杉の花」がどれ程の働きをしているのか？季語は離しすぎると動いてしまうものであるのだが、つまり句意と離れていると別の季語に入れ替えられるのだが、花粉症を齎す「杉の花」であることを考えると見えない糸でボールペンに繋がっているようである。

### 休校の子に風やさし鼓草

植松 紫魚

〔俳句〕6月号・城の雨より

座五の季語「鼓草」は「たんぼぼ」の発音に由来するとも（『毛吹草』）いわれ、また形状からとも（『滑稽雑談』）いわれる。上五中七の句意から想像するに単なる語呂合せの季語ではない方が「やさし」が生きるように筆者は考えている。

### だまし絵のやうに猫ゐる年の暮

太田うさぎ

〔句集〕また明日より

はぐらかされたような感じがしてしまふ。がそのはぐらかしが作者の表現に抛ると嫌味ではなくて、納得して腑に落ちるのである。この作者のテーマは他にあるのだろうか。が将にはぐらかされて掲句に目が留まってしまふのである。不勉強の至りである。他に「ラゲビーの主に尻見てゐる感じ」がある。

# 水明全国大会

## 兼題

「春の風」

「蜂」

「遊」  
(詠み込み)

入選句

### 歓びの夏

新型コロナウイルス感染症禍の最中にありながら、昨年を上回る一八五六句の投句があり、大感激しました。

待ちに待った祝賀の年に水をさしたコロナへの怒りが、この数に表れたのだと思います。皆さんの熱意に応え、万感胸に迫る思いで選句しました。

全国大会に先駆けて選句結果を発表します。

主宰 山本鬼之介

# 山本鬼之介選

## 【天】

遊印の石の手ざはり竜天に

由良ゆら女

## 【地】

傘寿米寿卒寿白寿や春の風

正木 萬蝶

## 【人】

無住寺の蜂の巢いまや活火山

近藤 徹平

## 【特選】

蓮華草一人遊山の塩むすび

森本 早苗

木洩れ日を降らす大樹に春の風

大塚 茂子

椅子二つグラスが二つ春の風

石井 喜恵

金閣を水面に崩し春の風

矢作 水尾

回遊の魚のきらめき春の昼

森川 義子

春の風一両電車を連れてくる

楽しいな手話の指先春の風

白壁の影もやはらぐ春の風

春風や真田の城の流し旗

入相の鐘を飛び出す雀蜂

お遊戯に上目遣ひの昼蛙

憧れの大尺遊び京の春

遊侠や想ふは亡師花馬酔木

姿見に心遊ばす春帽子

耕してこれが遊びと言ひ切りぬ

墨堤や桜伝ひに夜を遊ぶ

桜東風波を遊ばす烏帽子岩

ブロードの少女馬上に春の風

遊侠伝を唸る浪曲春の宵

石垣に遊子凭るる遅日かな

観覧車の黙遊園地の遅日

尻向けて寝釈迦のポーズ春の風

石仏の声なき声や春の風

山羊遊ぶ畜産学部春うらら

後れ毛に遊び春風ほほほほ

太筆の墨の輝き春の風

行商の荷を解く厨春の風

日輪をめがけ飛び立つ熊ん蜂

天空の大吊橋へ春の風

島津 初花

鈴木 康世

井上 燈女

五明 昇

〃

〃

大村 節代

小倉 倭子

田寺 玲子

飛永 鼓

田中 章嘉

丸山 マスミ

原田 秀子

近藤 徹平

菊池 ひろこ

梅澤 佐江

曲淵 徹雄

神田 治江

大場 順子

大橋 旭代

青木 鶴城

渋谷 さいち

井口 俊晴

越田 栄子

好きと言はれて逃げたあの頃春の風  
春風に踊り出したる四分音符

立女形の遊び毛にある春愁

春の風たましひ宿る金太郎

春風や野越え山越え村のバス

春の風空色うすく溶く少女

立夏の空を回遊せむか魚となり

大鼈鼓の遙かな音色春の風

制空権を足長蜂に許す庭

蜂が来て何をしてもなく去りぬ

御朱印帳もファッションの内春の風

里山の息吹き連れ熊ん蜂

春風の低唱ゴーストタウン街

春風の街銀色の靴で行く

遊び知る人の一言荷風の忌

春風も織りて仕上がる粗筵

大古も今も女の耳輪春の風

春の風紙飛行機の川越えて

蜂の巣の日に日に太る閻魔堂

春風と行く葬列のクラクション

春風に前髪が割れ富士額

腰で切る紙切芸や春の風  
遊び雲遊び放題五月来る

【秀逸】

京やまと浪花一望春の風

賓頭蘆さまの頭撫で行く春の風

然り気なきレディーファースト春の風

春風を巻いて綿菓子ふくれゆく

一徹の頬をゆるます春の風

春風や母が手塩の屋敷畑

大屋根の鐘馗をなぶる春の風

晚鐘の余韻が遊ぶ春の川

春しぐれ傘傾げ合ふ遊歩道

春風をかるく流して肩車

春の風那須野の原の牛の群

遊客に粋な計らひ春の月

春の風オープンカフェの白き椅子

春光を遊ばせてある船溜り

歳なりの歩調遮る蜂の群れ

遊芸の手本胡蝶の一手並

芽柳や城下をめぐる舟遊び

遊具みなペンキ塗り立て蠶ぐもり

熊ん蜂バイクの僧へ体当り

春風や雨の匂ひの残る町

春風や小鳥の生るる館細工

由良ゆら女

森本 早苗

丸山マシミ

矢作 水尾

森川 義子

五明 昇

〃

〃

〃

大村 節代

佐々木史女

小倉 倭子

石田 慶子

荒井 俱子

加藤むら子

池田 雅夫

境 延昭

〃

十倉 和子

町野 広子

梅澤 佐江

杉玉に麴の香り春の風

恋といふゲーム御破算はるの風

蜜蜂のしきりに光る誕生日

オカリナを吹けば生るる春の風

伸びるだけ伸び春風の象の鼻

大使館の国旗揺らして春の風

手遊びのキツネとタヌキ春の夜

土筆摘む八十路の遊びいとをかし

春の風立つて話もなんですな

鉢花に蜂が真昼の日を捌く

ソーシャルデイスタンス春風のお通り

SLの汽笛はるかや春の風

瀬戸内は波を遊ばせ春うらら

お喋りのとまらぬ幼女春の風

みどり子のもろ手に掴む春の風

ホームドア開く一瞬春の風

一匹の蜂に筆置く写経会

春の風口ケは本番五秒前

馬子唄に遊子悲しむ春景色

春の風農夫ゆつくり腰伸ばす

春風とできたての橋渡りけり

遊園地椅子で寛ぐご同輩

春の風諸手広げてつづら橋

園遊会お洒落な蜂が紛れ込む

新 曆文

藤澤 喜久

大場 順子

下川 光子

大塚 茂子

橋本 京子

網野 月

大橋 旭代

山中 いちい

森田 祥絵

福田 千春

鈴木 和子

河野 はるみ

保坂 翔太

石川 理恵

田中 泰子

笹本 啓子

熊倉 千重子

田寺 玲子

西浦 千枝子

森下 美智枝

日高 道

星野 和葉

服部 みどり

春風を掴む拳の堅さかな

春郊にピアニツシモで遊ぶ風

遊牧の牛の陽炎ふ草千里

うららかや老には老の遊び事

春風やその掌の撓ふ手のモデル

休校に倦むブランコに春の風

蜜蜂飼ふ銀座のとあるビルの上

蜜蜂の羽音窓辺にある平和

昼懈し攫はるるなら蜜蜂に

外遊び出来ず窓からしやほん玉

パンケーキ眼下の海に春の風

溜池の波紋ゆつくり春の風

春のマラソンごめん遊ばせごぼう抜き

図書室に紛れ込みたる蜂一匹

春の虹指からませる遊びかな

紅をさす乙女の髪に春の風

編棒の先に春風来て遊ぶ

魂ゆるするサクスの音よ春の風

おくれ毛に新樹の風の遊びけり

ロッキードかはたグラマンか熊ん蜂

熊蜂にスリーサイズを尋ねけり

外に出れば快晴の空春の風

人住まぬ家にも春の風通る

鳥の子の潜り遊びや夕焼雲

加藤 どん治

五明 昇

井関 礼子

山田 美佐尾

柚木 治子

境 延昭

〃

〃

正木 萬麩

綿貫 ひさの

河原 叔子

杉浦 理恵

松山 清子

石山 かつ子

諏訪 サヨ子

大場 順子

宮崎 チアキ

茂木 和子

染谷 正信

網野 月

太田 絹映

小島 喜代子

石井 喜恵

佳作

九十年の水のきらめき春の風  
 春なれや影絵の狐遊ぶ夜  
 綿菓子のでき細りゆく春の風  
 熊蜂のぶんと飛びこむ雑木山  
 洪鐘のわたる嵯峨野や春の風  
 春風を朝の万歩の友として  
 おはじきで上手に遊ぶ生身魂  
 春風をのせて八木節樽叩き  
 道標を隠す野の花春の風  
 一匹の蜂で混み合ふ非常口  
 春風へ日の丸揚げる村役場  
 春風に口数多き車引き  
 人間も犬も浮き足春の風  
 SLの汽笛朗らか春の風

青木 鶴城  
 斎藤 みよ  
 鳥羽 和風  
 松井由紀子  
 井上 玲子  
 西幅 公子  
 矢島 清  
 松本 光子  
 野田 静香  
 栢尾さく子  
 山中 順子  
 高島 寛治  
 西山貴美子  
 内田 恵子

洞屈のマリアと遊ぶ春の潮  
 春風に吹かれて乾く牛の鼻  
 魚偏の暖簾が跳ねる春の風  
 陰膳に一献そそぐ春の風  
 呼笛は二人の符号春の風  
 春の風サインコサイン何になる  
 休校や一人遊びのシャボン玉  
 花の枝のすき間透き間に春の風  
 春風に孫枝の未だ覚めやらす  
 金婚は通過点よと春の風  
 旅半ば出会ひの子感春の風  
 春の風止みて重たき大樹かな  
 狛犬は母の顔して春の風  
 春の風ゆつたり雲とばかり雲  
 置き去りの昭和の農具春の風  
 母艦めく岬をめぐる春の風  
 一湾の波となりゆく春の風  
 春風や踏めば応へて地の鼓動  
 春風につぎつぎ生る飴細工  
 静寂より蜂の飛びたつ遊女の碑  
 高原は一望千里春の風  
 春風やはちみつ色の野は広し  
 バス停の帽子華やぐ春の風  
 春の雨めぐり遊ぶや鎖樋

丸山 マスミ  
 鳥羽 和風  
 大塚 茂子  
 石井 喜恵  
 矢作 水尾  
 森川 義子  
 本橋 幾子

ランナーの大きくふる手春の風  
 春の風長操像の肩緩む  
 師を呼んで桜と遊ぶ句座筵  
 蜜求め移り飛ぶ蜂重き腹  
 蜂来れば道開け蜂よ通りませ  
 四阿に黒き弾丸熊ん蜂  
 残り鴨水くしやくしやに遊びをり  
 地鎮祭幣のちぎれし春の風  
 春風の厚みの中を抜けて来し  
 天空の大吊橋に春の風  
 旧姓で呼び合ふ二人春の風  
 土手滑る子等の歓声春の風  
 測量のポールに遊ぶ春の風  
 春風に髪を梳かせて立つ岬  
 微睡める羅漢の頬に春の風  
 音楽寺の鐘に撞木に春の風  
 春の風あるだけ光るビルの窓  
 ラジコン機の音の高鳴り春の風  
 棚田向くホームのベンチ春の風  
 春風や縄文ヴィーナス出でし里  
 間道に哨戒厳し熊ん蜂  
 雨のあと先づ偵察の雀蜂  
 斥候の蜂の覗きし外格子  
 蜂の巣を標としたる長屋門

日吉 亜弥子  
 島津 初花  
 藤間 友二  
 新井 孝磨  
 鈴木 康世  
 井上 燈女  
 五明 昇

蜂の翅音全身で聞く蔵座敷  
 緩急に詩心遊ぶ春の風  
 春一番勝機うかがふ遊び駒  
 春泥の豹柄つけて遊びの子  
 鳥雲に海を見てゐる遊学子  
 惜春やブッセの詩篇口遊む  
 春泥もものかは栄えの遊撃手  
 一揺れで春眠に入る遊覧バス  
 遊行寺に句碑を探れば飛花落花  
 つくづくと遊惰の似合ふ春炬燵  
 立春大吉遊歩は富士が見ゆる迄  
 童子面がふいに鬼面に春の風  
 夜遊びのをとこの嘘よ川柳  
 遊里語の少しもつれて春の風  
 遊び毛の思はせぶりに春の宵  
 逆光のパベルの塔に春の風  
 春の風タンバリン打つ遊戯の子  
 春の風踏んでゆらゆら丸太橋  
 古本屋に時に珍本春の風  
 熊蜂の尻へばりつく不発弾  
 蜂の脚つまみて返すお母さん  
 遊俠を気取りし男四月馬鹿  
 春風も一緒に写すカメラマン  
 蜜蜂や父の言葉が胸を刺す

五明 昇  
 大村 節代  
 野田 静香

春風や雲引き連れて熱気球  
 縁側は婆の定席春の風  
 春風の中に降り立つ無人駅  
 春風に歩数増えゆく万歩計  
 春の風もとは花街「柳通り」  
 室の津の遊女の墓へ五香水  
 空缶に遊ぶ雨音春の宵  
 春風や少女の読めぬ古刹の名  
 春風やイケメン教師連れて来し  
 蜜を吸ふ蜂の羽音にたぢろぎぬ  
 春風や老いてはならぬ背の丸み  
 春風や人それぞれに歴史あり  
 春の夜の影踏み遊ぶ一時ぞ  
 走り来る乙女の胸に春の風  
 雲払ふ春風吹いて星一つ  
 春の風揺らす金色耳飾り  
 春の雲遊歩道行く猫車  
 春風や全身バネの児と遊ぶ  
 春の風展望台に英会話  
 客数人定時に発車春の風  
 供花から供花へと蜂音もなく  
 春風や少し気張つて男坂  
 三味の音に遊び心や草靡  
 左手に電話取る癖春の風

野田 静香  
 森川 義子  
 小倉 倭子  
 田寺 玲子  
 飛永 鼓  
 田中 章嘉  
 石田 慶子  
 荒井 俱子  
 加藤むら子  
 丸山 マスミ

富士遙か浚漂船に春の風  
 胸突坂登りし背に春の風  
 大原女の前垂れゆらす春の風  
 春の風金釘流の一行詩  
 キャンパスの口髭の像熊ん蜂  
 春風やSL戻す転車台  
 本堂の尼僧の読経戯るる蝶  
 春の風裏通り練るちんどん屋  
 野焼の火に集ふドローン遊水地  
 簾丸駕籠の往きし往還熊ん蜂  
 大人ぶるままごと遊び散る桜  
 春風の楽譜を捲る昼餉時  
 白無垢の佐保姫遊ぶ里の朝  
 瞑想の窓辺の猫や春の風  
 春風や土の匂ひの我が在所  
 蜜蜂の8の字空を翔け巡る  
 菜種梅雨一人遊びの児の積木  
 花吹雪遊動円木渡りきる  
 風光る遊子の憩ふ古戰場  
 蜂飛ぶやドローンの着地定まりし  
 日翳れば脚長蜂も花房も  
 春風のオリンピアなる火の儀式  
 岩があるだけの砦や春の風  
 春の風芭蕉像より小名木川

丸山 マスミ  
 原田 秀子  
 近藤 徹平  
 反町 修  
 菅原 真理  
 池田 雅夫  
 川崎 道子  
 島津 初花  
 菊池ひろこ  
 境 延昭



吟遊の寄りて離るる春日傘  
 猫柳舟遊の棹ゆるゆると  
 漆喰の剥げし質倉熊ン蜂  
 スカーフを結はへし鞆春の風  
 春の風路地の半ばの赤提灯  
 坐禅石に蜂の居座る古刹かな  
 茶碗屋の裸電球春の風  
 春風や音を並べる茶碗売り  
 信楽の狸窯出る春の風  
 大原女の紺緋より蜂こぼれ  
 仁王囀ふ網目六角蜂が湧く  
 春の風ゆつたり話す小児科医  
 本陣に蒔絵の文箱春の風  
 春風やコロコロ笑ふ君とゐる  
 横つ跳びして春光つかむ遊撃手  
 目札に微かな香り春の風  
 女王蜂は美人それともアマゾネス  
 糸桜気ままな風の遊びある  
 物憂げな頬撫でてゆく春の風  
 野晒しの遊女の墓を胡蝶舞ふ  
 蜜蜂や北へ発つ日の箱の蓋  
 春の風夢いつばいのランドセル  
 小悪魔の茶髪を乱す春の風  
 ほろ酔にこのうへもなき春の風

境 延昭

〃 〃  
 〃 〃  
 〃 〃

鳥羽 和風

〃 〃  
 〃 〃

十倉 和子

〃 〃

町野 広子

〃 〃  
 〃 〃

横山 君夫  
 梅澤 佐江

〃 〃  
 〃 〃

新 曆文

〃 〃  
 〃 〃

曲淵 徹雄

遊芸の忍ぶ摺り足春の暮  
 遊曲やお玉杓子を散らす雨  
 漫遊の終幕となる飛花落花  
 春風や光を放つ鏡岩  
 小気味好く回る水車や春の風  
 はるかぜに袖を通して遊びたや  
 恋敵今は甚敵はるの風  
 水玉のスカートはらむ春の風  
 恋心いろはにほへと春のかぜ  
 春の風命の重み噛みしめて  
 遊歩道人影もなし涅槃西風  
 春昼や指に遊ばせやじろべい  
 春の風ひとひらの雲近づけて  
 絵馬札の願ひゆさぶる春の風  
 春風の帽子を飛ばす無礼かな  
 風呂敷に苞と春風包みけり  
 舞子ゆく春風がゆく河原町  
 あたたかや唐子の遊ぶ飯茶碗  
 花散つて螺鈿の箱に遊びある  
 春風や次ぎ次ぎ発車人力車  
 蜂飼ひは総理夫人の手慰み  
 春風や幸せを絵にした新居  
 蜜蜂や日差し眠たき昼下り  
 春らんまん無人無音の遊園地

小倉 倭子

越田 栄子

藤澤 喜久

南條さわゑ

山下ユリ子  
 井上 燈女  
 神田 治江

大場 順子

梅澤 佐江

下川 光子

たんぽぽや路地に今様遊び歌  
 春の風隣家に赤子誕生す  
 佐保姫を遊びに誘ふ子等の声  
 勇氣とは忍耐のこと蜂一匹  
 四羽揚げ蜂六足は動かさず  
 住所録から削除をしたら春の風  
 江ノ島に鳶見る風や春の風  
 蜂と蜂ぶつかり墜ちぬ忘れ水  
 水を飲む蜂のおるどのへこへこと  
 木の芽どき目の玉乾きさる遊び  
 春風や光り振り撒く風車  
 ふらここに一人遊びの奔放に  
 春の風樹木葬ある寺を見に  
 遊びごころ満ちたる椅子や春の昼  
 秩父嶺を見上ぐる小川春の風  
 春の風赤城榛名は手の内に  
 春の風まとひて散歩朝の道  
 古墳行く園児の帽子春の風  
 小さき花こよなくいとし春の風  
 夏近し砂場に驟雨遊具にも  
 波はるか出船入船春の風  
 屋上の巣箱に運ぶ都会蜂  
 懐かしきお遊戯の曲春の昼  
 春の風まとふブラウスペダル踏む

橋本 京子

〃 〃

網野 月を

〃 〃

大橋 旭代

〃 〃

森田 祥絵

〃 〃

福田 千春

〃 〃

鈴木 和子

〃 〃

河野はるみ

〃 〃

野平美紗子

〃 〃

復興の鉄路の光り春の風

春の風太極拳の邪魔をせず

船団の大漁旗や春の風

花の下童心となる鬼遊び

膝サポーター捲いて見沼田春の風

初蝶来喜寿の背中を遊びをり

待ちかねて「遊行柳」の芽吹きかな

杉玉のやうな蜂の巣本陣に

花冷を敢へて行くなり遊歩道

春の風喜寿のお祝ひ乗せてくる

胸を張り門出の朝や春の風

熊よりも怖い熊蜂山の道

花々を咲かせ北上春の風

杓ゆらす手水の鉢に春の風

春風や時局うそぶき遊び歌

渡し場に旅情をかもす春の風

春風やこころの余白満たすかに

春雨や草の艶めく遊歩道

生命線の長さほどほど春の風

弓具店の的の看板春の風

春の風猫のまどろむ格子窓

難敵に身を捨ててこそ蜂の針

床の上掃いてまた拭く春の風

カーテンに木の影揺らす春の風

青木 鶴城

〃 〃

〃 〃

洪谷きいち

〃 〃

保坂 翔太

〃 〃

石川 理恵

〃 〃

佐藤 克之

〃 〃

西幅 公子

〃 〃

柳父 はる

〃 〃

白田 みち

〃 〃

神田 治江

〃 〃

田中 泰子

〃 〃

井口 俊晴

〃 〃

つばくらめ遊び足りぬか宙返り  
 観音の御手に遊びし雀の子  
 新米の庭師からかふ熊ん蜂  
 迷ひ子にピエロおどけて春の風  
 棟梁の耳に鉛筆春の風  
 五線譜を飛び出すリズム春の風  
 周遊の旅のはじまる東風の駅  
 大漁旗春風はらみ入港す  
 朝から花粉まみれの蜂むるる  
 おのづから歩巾のゆるむ春の風  
 高級な食パンの香や春の風  
 春風を受けスカイバス大東京  
 茉莉花にマスクの鼻を遊ばせる  
 花ぐもり遊女の嘆き唄ひけり  
 蜂のとぶ苑に人佇ち人坐る  
 春風を背中に受けて人を待つ  
 春風に髪かき上げてまた歩く  
 飛翔する蜂をうらやむ鬼瓦  
 あらまほしあしなが蜂の長き脚  
 船頭の菅笠節や春の風  
 自販機に遊ぶ黄蝶や午後三時  
 一身に古希の春風受くるかな  
 春風にさらはれて行く招待状  
 小遊三の人情漸春惜しむ

井口 俊晴  
 笹本 啓子  
 熊倉千重子  
 越田 栄子  
 田寺 玲子  
 西浦千枝子  
 森下美智枝  
 曲淵 徹雄  
 波多野寿子  
 湯浅 和  
 原田 秀子  
 日高 道

蜜蜂を付け髭にする蜂蜜屋  
 春の風封鎖の街を吹き抜けり  
 老夫婦恥ぢらひも無し春の風  
 放課後の剣道場に春の風  
 閑伽桶の家紋の重し春の風  
 春風やとびらの重き子規全集  
 満載の遊動円木花の下  
 飛び回る遊軍記者よ雑木の芽  
 その声に少女振り向き春の風  
 だんだらの蜂が腰振るユダヤ墓  
 一村の雄蜂の鬨や古戦場  
 百八段登りはつたと熊ん蜂  
 寝ころびて業平ざくらと遊びをり  
 たんぼの遊びをせんと花開く  
 両の手に掬ふ故郷の春の風  
 草萌や父子で守る三遊間  
 陽炎や「ことろころ」の遊び歌  
 一握で済まぬ日永の砂遊び  
 黄金週間ごっこ遊びのアンパンマン  
 群蜂や統べる軍則有りしかと  
 卒寿なる生身を癒す春の風  
 宮参り赤児の頬に春の風  
 天女舞ふ格天井や春の風  
 雲梯と遊ぶ掌の指雲の峰

日高 道  
 星野 和葉  
 服部みどり  
 大橋 旭代  
 岡野 順子  
 加藤でん治  
 五明 昇  
 葛城千世子  
 井関 礼子  
 山田美佐尾

水槽の中餌をやる女遊びをる  
 葉桜や足馴しする遊歩道  
 開け放つ窓のカーテン春の風  
 遊覧のハングライダー春の風  
 さざなみの揺らす遊船客を待つ  
 御仏の温顔包む春の風  
 遊行寺坂下り下りて春の海  
 春風やはるかに見ゆる湖の色  
 春の風二両電車が遠ざかる  
 山近き校舎に巣くふ徳利蜂  
 語り部は京都ことばや春の風  
 春の風画板が似合ふベレー帽  
 間隔の広き釣人春の風  
 燕の巢銀座で探す遊びかな  
 暮れ遅し遊びは筑の三度笠  
 通りぬけ出来ぬ近道熊ん蜂  
 春の風そよりと祝ひ話かな  
 開け放つ美容院あり春の風  
 ちちははの墓撫でゆくよ春の風  
 立ち泳ぎして青空へふつと夢遊病  
 チューリップむすんで開いて遊々と  
 奥ゆかしき名妓の点前春の風  
 また一匹蜂飛び出せり黄楊の垣  
 余生への初めの一步春の風

山田美佐尾  
 〃  
 西幅 公子  
 〃  
 加藤むら子  
 神田 治江  
 関谷多美子  
 宇田 白鷺  
 〃  
 〃  
 〃  
 〃  
 〃  
 〃  
 岡野 順子  
 栢尾さく子  
 秋山 冷子  
 〃  
 永野 史代  
 〃  
 〃  
 小駒さち子  
 柚木 治子  
 〃  
 〃

雨戸繰るやや尖りある春の風  
 墓前酒に目敏い蜂は左利き  
 春の風オカリナの音が校舎より  
 春の風目鼻の欠けし磨崖仏  
 春眠のこころ故郷に遊ばせて  
 春風や顎紐を解く修行僧  
 信濃路やサドルに蜂のひと休み  
 桜葉降るとある夫人の遊び癖  
 春の暮喰はるる鶏の遊ぶ庭  
 地蜂穴蜂ファールブルぶるつと身震ひす  
 マチネーの歌舞伎座銀座春の風  
 桜葉ふる遊郭跡に城跡に  
 春の風夢工房は多忙です  
 何気無く網戸の掃除春の風  
 春風や眩し過ぎるよランドセル  
 新樹光溪流に遊ぶ鳥の影  
 桐の花遊子となりて訪ふ故郷  
 真昼野は蜂のうなりと遠い雲  
 単線の指差し呼称春の風  
 春逝くや独り遊びに倦みしまま  
 春の風色ある如くなき如く  
 春の風足取り軽く本郷坂  
 春の風問はず語りの散歩道  
 すべり台迷ふ背を押す春の風

柚木 治子  
 上戸千津子  
 境 延昭  
 〃  
 斎藤 みよ  
 〃  
 正木 萬蝶  
 〃  
 〃  
 〃  
 〃  
 〃  
 〃  
 綿貫ひさの  
 河原 叔子  
 〃  
 松井由紀子  
 〃  
 〃  
 〃  
 小山 敦子  
 外村 紀子  
 仲田 利子  
 〃

梵鐘の音色聞きたく春の風  
 春光や園の遊具の影の濃し  
 病院に祈りの音色春の風  
 「コ罗纳禍」に遊具縛られ春の風  
 春の風心地よき音の鳩時計  
 竹林に春風遊び日が遊ぶ  
 ペダル漕ぐ春風の中どこまでも  
 バス停のなびくスカート春の風  
 少年に恋のはじまる春の風  
 まつ黒がよし神将も花蜂も  
 畦道を歩くも久し春の風  
 羅漢さまの諸手挙げをり春の風  
 春風やだあれも居ない土間を抜け  
 人も来ぬ優遊蟄居の春の午後  
 おもむろにはづす眼帯春の風  
 料亭の祝ひ膳より春の風  
 緋毛氈に蜂の来てゐる野点かな  
 一湾に一舟遊ぶ春の昼  
 刺繡糸巻く手疾く疾く春の風  
 蜂二匹翅柔らかき初飛行  
 春の風皿のパセリが繁りだす  
 つくねんと遊具の騏驎春の風  
 長寿眉蜂を上手に追ひ出せり  
 春風を窓全開のポルシェ行く

高橋満耶子  
 松山 清子  
 阿部 幸代  
 後藤 綾子  
 高原 和子  
 武田 重子  
 石山かつ子  
 白井 由美  
 鈴木 玲子  
 伊藤 敦子  
 宮井美恵子  
 大場 順子  
 山中いちい  
 椎野美代子  
 新 曆文

ウォーキング傍らにゐる春の風  
 春風を総身に纏ひ堤ゆく  
 花観れば音なく蜂の迫り来る  
 綿飴のやうなる雲や春の風  
 木洩れ日の揺るる堤や子ら遊ぶ  
 荒草に漣おこす春の風  
 木洩れ日の形いろいろ遊歩道  
 春の風木馬は天馬になるつもり  
 時明りして中空へ蜂の飛ぶ  
 さくら満開スーパームーン漫遊す  
 春風やふと口遊ぶブッセの詩  
 パドックの馬の鼻孔に春の風  
 蜜蜂に目指す木の有り一直線  
 SLの試験運行春の風  
 五十鈴川の小石まろやか春の風  
 手渡さるブーケより蜂飛び立ちぬ  
 幕を引く銀座の老舗春の風  
 春風や焼き立てパン屋の列に従く  
 遊船の人に手を振る春の川  
 冬を越す女王蜂の孤独なる  
 本当は風を厭ひて雨の蜂  
 春の風休校の児のケンケンパ  
 遊びつつ帰る学童つくしんぼ  
 登り来て故郷一望春の風

板子由美子  
 宮崎チアキ  
 茂木 和子  
 染谷 正信  
 瀬戸雄二郎  
 高島 寛治  
 山中みどり  
 網野 月を  
 梅澤 輝翠  
 太田 絹映

譬ふれば卑弥呼のやうな女王蜂  
 蜜蜂の腰のくびれを欲る女  
 遊戯する園児の脚もかげろへる  
 春風がはこぶ花びら古都の庭  
 遊牧の民の暮しや春の雲  
 惜春や交遊深みゆく旅路  
 ネイルアートで指を遊ばす春の暮  
 天命にしたがひ春の風と生く  
 蜂とまる「詐欺に注意」の掲示板  
 遮断機と同じ模様の蜂飛び  
 胸一ぱい幸せ吸ひ込む春の風  
 スカーフの音符踊りて春の風  
 路地裏で遊びし記憶春の暮  
 春風や土に膝つく供花の墓  
 終業のチャイム乗りくる春の風  
 春風も科白のひとつ屋外劇  
 耳鳴りを誘ふ畦道熊ん蜂  
 ひとり居の昼の微睡み春の風  
 水の禍に負けぬ草花蜂遊ぶ  
 九十年五代水明春の風  
 好日や小鳥の遊ぶかな女句碑  
 水明や五代を誇る春の風  
 口遊ぶ「華の一句」や春深し  
 春風や竹の戦ぎの軽井沢

宮崎チアキ

小島喜代子

石井 喜恵

青木 鶴城

斎藤 みよ

文豪の遊びし湯宿山笑ふ  
 春風や潮の香とどく異人墓地  
 蜜蜂とフェンス伝ひに通学路  
 ふらここや遊び疲れて親がこく  
 日を浴びて黒光りする蜂の尻  
 仏頂面の頬なでゆくも春の風  
 干し竿に魚吊すや春の風  
 八咫鳥にも特注マスク春の風  
 春風やしんかんとして太鼓楼  
 春風や一步踏み出す観世音  
 遊侠の男仁吉よ春の月  
 春の風天神様の牛を撫で  
 春の風鳩求愛の喉鳴す  
 日傘行く遊び心のVサイン  
 一村を満たす鍬音春の風  
 斑猫の穴を探せる遊びかな  
 面売りは面をかぶりて春の風  
 鎌先に足長蜂の怒りかな  
 柿の花ほろほろ靴で踏む遊び  
 干し傘のあとずさりゆく春の風  
 白蝶に遊ばれてゐる野の仏  
 春風や志功の天女太り肉  
 句作こそよなき遊び老いの春  
 老犬の鼻のうごめく春の風

斎藤 みよ  
境 延昭

井口 俊晴

菅原 知子

山崎 郁子

大橋 旭代

大場 順子

松本 光子

石山 かつ子

神田 治江

松井由紀子

〃

恙がなく生きて米寿や春の風  
 千の絵馬千の願ひや春の風  
 願ひ込め折鶴とばす春の風  
 春の風川の名変はる県境  
 蜂の巣を軒に吊るして魔除けとす  
 万物の特技とも云ふ蜂の巣よ  
 鶯や子等の声なき遊園地  
 病む膝にそつと触れゆく春の風  
 春風や今日は花柄ワンピース  
 春の風鳶の笛聴く浜辺かな  
 草庵に揺るる蓑笠春の風  
 熊蜂の唸りに終ふ庭仕事  
 誰が化身狭庭に遊ぶ黒揚羽  
 葉桜の木洩れ日掬ひ遊歩道  
 伊那谷の水車の音や春の風  
 熊ん蜂力なき蜂相寄り  
 片蔭を拾ひ拾ひて遊びけり  
 赤錆の浚漂船に春の風  
 紙風船年の数だけ突き遊ぶ  
 土木科は測量実習春の風  
 春風にのりて光りて竹とんぼ  
 電線に羽毛遊ばせ雀の子  
 森深く黄鶺遊ぶ故郷かな  
 花筏崩してゆくや遊覧船

鈴木 康世  
 〃  
 〃  
 岡田 宣子  
 川島 典虎  
 〃  
 〃  
 川野 妙子  
 〃  
 井上 玲子  
 〃  
 〃  
 〃  
 西幅 公子  
 矢島 清

無住寺の鉦ねんごろに春の風  
 ヴィオロンの調べ世界へ春の風  
 熊蜂の唸り加はるライブかな  
 春風受け静かに帰る消防車  
 春の風本屋の裏に居つく猫  
 路地奥の地味な稲荷に春風吹く  
 春風や片目して見る昼の月  
 漫遊を楽しむ机上春の風  
 語り継ぐ遊郭の跡春の風  
 黒猫の影こそ黒し春の風  
 窠変の思はぬ出来や蜂唸る  
 春風にさよならの語尾消されさう  
 紫陽花の小径に色を遊ばせり  
 水音と落花の続く遊歩道  
 野焼き跡早や動きたる遊水地  
 春風や赤子の産毛光りをり  
 囀りにつられて朝の遊歩道  
 春の風粋な帽子に嫉妬して  
 春の風裳裾の長き飛天絵図  
 手のひらに柏餅載せ遊びけり  
 春風や床屋帰りの頭撫づ  
 ぶんと来て足湯騒がす蜂一匹  
 ジーパンの手触りくたと春の風  
 野生馬の鬣ふはと春の風

松本 光子  
 野田 静香  
 〃  
 山中 順子  
 〃  
 〃  
 〃  
 〃  
 〃  
 〃  
 〃  
 〃  
 〃  
 〃  
 河野はるみ  
 野平美紗子  
 星野 和葉  
 〃  
 〃  
 〃  
 〃  
 〃  
 宮井美恵子  
 西山貴美子  
 森 和子  
 〃  
 内田 恵子  
 〃

春風と遊ぶ人魚の長き髪  
 野山駆け遊ぶ吾子の春帽子  
 青春の遊び仲間の春便り  
 枳酒の塩の甘くて春の風  
 飛ぶ蜂をさける母の手神々し  
 春時雨ひとり遊びの鶴を折る  
 葉桜の中の青空遊歩道

☆

☆

内田 恵子  
 野村 美子  
 椎野美代子  
 伊藤 愛子  
 茂木 和子

最近の名句集を探る ◆座談会

池田澄子 『此処』

暮目良雨 『九曲』

高橋道子 『こなひだ』

司会 齋藤慎爾  
 筑紫磐井  
 坂本宮尾  
 守屋明俊

特別寄稿 エッセイと俳句 岸本葉子

◆巻頭三句

星野 椿

増成栗人

梶原美邦

高橋健文

名和未知男

山田貴世

◆俳句と短歌の10作競詠

秋尾 敏

藤原龍一郎

◆その時、俳句手帳  
 古賀しづれ

◆今月の華

山本 潔

草深昌子

◆好評連載

南伸坊

猫の俳句  
 筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

神作研一

手のひらの江戸  
 古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ  
 酒井佐忠

本の窓辺  
 二ノ宮一雄  
 一望百里

俳句四季  
 Haiku Shiki

2020年9月号

8月20日発売  
 定価1000円(税込)

<http://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180



# 俳句

## 9月号 予告

8月25日発売

予価(本体864円+税)

特別作品 一片山由美子・澤好摩・仁平勝

### 大特集

# 月を詠む

- ▼月の名句 30句選……………村上朝彦
- ▼「月」はなぜ秋の季語なのか……………尾池和夫
- ▼実作講座 月を詠む……………エッセイ 月の不思議

## 追悼 後藤比奈夫

人と作品…大輪靖宏 100句選…茨木和生

### 座談会「比奈夫俳句を語る」

星野高士×井上弘美×岸本尚毅

### 連載

名句水先案内…小川軽舟／偏愛俳人館…恩田侑布子  
現代俳句時評…白濱一羊／野菜の十二ヵ月…南うみを

シリーズ「コロナの時代の俳人たち」 月野ぼぼな・小津夜景

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

毎月25日発売  
定価1000円(税込)

# 月刊 俳句界

2020年9月号

### 特集

## 宗教と俳句

- ◎ 詩歌と宗教 荒木優也
- ◎ 仏と俳句 有馬朗人
- ◎ 宗教を詠んだ句 20句 堀本裕樹
- ◎ 論考 長嶺千晶 市堀玉宗
- ◎ 作品とエッセイ 稲畑廣太郎 平田栄一  
安原葉 福島せいぎ

### 特別作品30句

田島和生

タラピン 俳句界NOW 上野一孝

### 特集 難解句の楽しみ方

- ◆ 総論「難解句とは何か」 田島健一
- ◆ 鑑賞

- ① 難解句の読み方 辻桃子
- 浦川聡子 木暮陶句郎 高柳克弘
- ② 自句自解 鈴木明 鳥居真里子
- 西池冬扇 高山れおな 外山一機

※セレクション結社「昴」高松守信

### 私の一冊

水内慶太「月の匣」

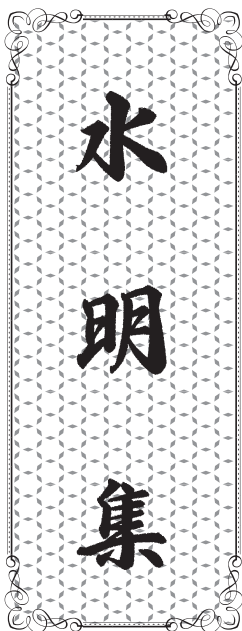


佐高信の甘口で「コンニチハ！」  
平野啓子(語り部)

### 別冊 投稿俳句界

一流選者14名！  
日本一充実の投句欄

山本鬼之介 選



方寸の庭静かなり若葉寒  
スナツクのドア半開き夕薄暑  
名画座のマチネ終はりぬ街薄暑  
松明に浮かぶ童女の白重  
我が庵は行李一つの更衣

さいたま 日高 道を  
(徹改め)

軽音楽を流す薄暑の歯科医院  
夏めてダメージジーンズ闊歩せり  
蒼天を飛ぶ夢果てぬつばめ魚  
飛魚跳んで遠くの船を跨ぎゆく  
春暁の光一条手を合はす

川口 野田 静香

梅雨晴間赤玉土と腐葉土を  
ざる盛りの菘に惹かれて豆御飯  
豆飯や息吐くやうに箸を置く  
島唄に聞き入る未明夏の潮  
高みより送る船出や青葉潮

さいたま 山口 韶子

花水木昔この辺製糸場  
素裕のぶらりと歩く花川戸  
いつしかに古りし夫婦や更衣  
麦秋や書架にゴッホの画集あり  
成り手なき村会議員蛇苺

染谷 正信

母の日に母の位牌と登る山  
紀の海や糶声高く初鯉  
授乳のやうに陽光注ぐ青田かな  
起き抜けに見に行く母の青田かな  
合鴨にまかす農法青田波

西幅 公子

それぞれがまつすぐ空へ松の芯  
「あらかわ」の堤防やさし春の昼  
休校のグランド白き春の昼  
葉桜や頭上ゆたかに風の音  
火蛾遊ぶ昭和の匂ふこの辺り

さいたま 曲淵 徹雄

仰がるる殿様となれ蛙の子  
沖遙か空と交はる青葉潮  
不意打ちは山の歡迎若葉雨  
木漏れ日に顔の明暗沢薄暑  
ひととせの起承転結豆の飯

さいたま 青木 鶴城

陽炎や閉店の文字ゆれてをり  
連れそうて山ふところへ藤の花  
美しきまつ毛の少女葦草  
荷風忌や夕陽眩しき古書の街  
大空へ五指をひろぐる立夏かな

若狭 檜鼻ことは

二次会は馴染の店の白玉あづき  
青嵐小高き丘のワイナリー  
宙を飛ぶ買物袋青嵐  
若き日の恋の結末ソーダ水  
小走りで合はず歩調よ夏帽子

熊谷 越田 栄子

赤房の際立つ土俵五月場所  
夏潮や海鳥連れてやつて来る  
青葉潮男の胸を焦がしけり  
穴子釣る静寂を破る竿の先  
菖蒲湯の菖蒲刈る鎌研ぐ朝

さいたま 加藤でん治

ひとり居の母のひと言春の雷  
湯煙やみづうみ囲む花の山  
花雨や都大路を蛇の目傘  
夕映えの野点の袖に散る桜  
沖めざす刺網漁船蟹気楼

さいたま 保坂 翔太

お決りは白玉あづき寄席帰り  
ボレロ高まりレモンソーダの泡躍る  
白玉を愛でし上戸と下戸二人  
青嵐孔雀の尾羽揺らしけり  
独演会幕間に一寸ソーダ水

高崎 原田 秀子

草々の中の莖に風そよぐ  
春風や境界線のなき野原  
逃水にまとひつかるる鬼ごっこ  
囀の行きつく空に雲一つ  
囀や御朱印帳の寺の紋

新井 孝磨

能登瓦光る城下に五月来ぬ  
葉桜や農具小屋より鋏と鎌  
夏めくやログビルダーの手に手斧  
柿若葉透けて光のペールかな  
歳かさねすべて身軽に更衣

さいたま 渋谷さいち

「おかはり」の声の重なる豆御飯  
母の傍ら豌豆しごき豆の飯  
青葉潮かけ声あはせ地引網  
赤べこも心地よさげな五月風  
水面往き交ふ赤き手甲の御田植よ

さいたま 秋山 紅花

春昼や村中の戸が開いてをり  
群れてなほ一人静のひそやかに  
菖蒲湯や勇氣について語る父  
麦秋のうねりの先に新校舎  
麦の秋シャツはためかせペダル踏む

上尾 横山 君夫

走り根を越えて一途に蟻の列  
不況の声街に飛び交ひ青嵐  
音立てて走る流れのわくらばよ  
挨拶にうなづき去るや夏の午後  
昼顔の姿えてそれぞれかけりゆく

熊谷 神田 治江

草笛や「古閑裕而」の四拍子  
葉桜に消ゆる小鳥の声高し  
我に似し兄の遺影に柏餅  
潮騒や夏めく赤いハイヒール  
骨切りの音のリズムや夏さざす

さいたま 新 曆文

咲き満ちていま葉桜の古木かな  
紫陽花に朝の光が惜しみなく  
吾よりも孫の背伸びて柏餅  
天をつくポプラ並木や夏めきぬ  
草笛や音の出るまで草を替ふ

さいたま 塩野 久子

母の日や息子にもらふ江戸切子  
母の日の仏間に響く琴の音  
光の君の来さうな宮居薄暑の夜  
光明もとめ読書に耽る桜桃忌  
山荘や朝の光と滝の音

梅澤 輝翠

声までも更衣して来る娘  
夜遊びの住持いなせに更衣  
飛び魚や羽根を頼みに大海を  
飛び魚と大海原で競ひけり  
朝の集会みなそれぞれに更衣

藤岡真知子

一望の甲斐の旅路や桃の花  
葉桜に風のかそけき並木道  
葉桜を洩るる光に風をどる  
夕映えの野良に消えゆく草の笛  
夏めくや鎮守の杜の深さかな

秋元カズ子

山独活の手折りどころを見定めて  
花みかん踏切音の風に乗り

伊予 向井 章子

麦藁焚く煙静もる大平野

山清水受け古池の夏蕪

夕陽背に母と娘や春の湖

初鯉波頭まぶしき土佐の海  
赤銅の男が捌く初鯉

さいたま 笹本 啓子

舌鼓打ちて皿鉢の初鯉

つばめ魚連絡船と競ひあふ  
飛魚や耶蘇の哀史をめぐる旅

風光る眼科医院の帰り道

大輪を夢見て蒔くや花の種

移植せし旧家の牡丹咲き揃ふ

コロナ菌なんぞ忘れて一番茶

春炬燵抜け出て祈る神仏

杉戸 佐々木史女

日の暮れや新樹浮きたる森は海  
倒れしも折れしも若葉谷深し

横浜 山岸 弘子

峰雲のなほも高まる大墓苑

倒れこむベッドの暑きリハビリ後  
青時雨己が涙を厭ひけり

新緑やお口達者な三歳児

肩もみ券お手伝ひ券マザーズデー

母の日や大好きな歌「おかあさん」

背を正しいただく御薄若楓

薄暑光坂道多き寺の町

東京 太田 絹映

レプリカの砲の向く先青葉潮  
豆飯に母の想ひ出次々と

さいたま 橋本 京子

衣更へて前垂美しき六地藏

葉桜の並木に拾ふ鳥の羽

老鷺や逢ひたき人にメール打つ

軒下に命ぞくぞく夏燕

母の日や終りの見えぬ長電話

丹精が実り深紅の薔薇香る

合格の長き祈願や青葉風

手水舎の龍肅肅と夏の朝

平塚 丸屋 詠子

若葉風児ら声高にフットサル  
外の面では若葉雨かし薄明かり

白田 みち

待ちぼうけ若葉風吹く峠道

更衣樟脳の香に妣思ふ

衣更ふ女人ふはりと色めきて

筋通す男の意地や松の芯

さいたま 斎藤 みよ

若狭 山崎 郁子

夏に入る励む筋トレ脳トレに  
子らを待つ園の遊具や風薫る  
走り茶に添ふる京菓子届きけり  
信濃路や若葉さららか二人旅

何をする気にもなれぬ日春愁ひ  
墓石の頭に蝶々や南無阿弥陀  
座布団に眠る赤子や蝶の昼  
待ち合はす新樹の中の喫茶店  
生きをれば白寿の母よ豆の飯

母の日や娘も母の身となれり

竹澤 和子

岡本 祥子

母の日をビデオ通話といふ武器で  
雨後の朝青葉の先に光満つ  
義父は五月の光を弾く「隼」に  
葉桜の光のなかを逝きし義父

闘病に寄り添ふ介護紫蘭咲く  
潮騒の奏づるリズム夏めけり  
新樹かけ神籤を開く少女かな  
夏さざす娘に分けし糠の床  
何時ぞやの父の忠告夏あざみ

更衣して軽やかにペダル踏む  
青空に湧く雲白し更衣

東京 鈴木 和子

吉川 杉浦 理恵

思ひ出の都会の味やソーダ水  
かみしむる映画の余韻ソーダ水  
青嵐芋坂を抜け谷中抜け

模様替へして窓ひろびろと新樹光  
子ら泣きぬ蝌蚪逃げ出せし空の瓶  
葉桜に射す陽まだらに土手の道  
葉桜の映る川面に釣りの糸  
庭に降る花びらを掃く夏初め

亡き父母の声が聞こゆる苗田道

小浜 松島 寛久

栃木 佐々木典子

一番茶急須に汲みて僧揃ふ  
古希越えて八十八夜無事の鐘  
大鳥居くぐれば神の子新樹光  
新樹ゆれ祖父観音に片思ひ

卒業や少年口に薄き髭  
一人静咲けば行きたし中尊寺  
春の野の光音色みなうれし  
一人静殖えてしづかに咲きをりぬ  
春昼や外出自粛昼寝かな

はつ夏や風の抜けゆく待合室  
「アマビエ」は神か魔物か聖五月  
今はまだ死ぬぬ死なぬよ柿若葉  
街薄暑をさなごも社会的距離  
迷ひ込む路地の菖蒲の美しく

東京 石川 理恵

ウイルスに籠る窓越し柿若葉  
髪染めは母の張合ひ柿若葉  
たて笛の日々滑らかに柿若葉  
のめり込む無声映画や夜半の夏  
醍醐味はハイジの世界キャンプかな

さいたま 山戸 美子

朝採りのトマトの映ゆるサラダかな  
フリスビーに跳び付く犬や夕薄暑  
刈取りを一家総出の麦の秋  
初恋の人にばつたり夏祭  
風薫る森林浴の散歩かな

さいたま 反町 修

土佐湾の一本釣りや青葉潮  
松島の古刹の門や青葉潮  
青葉潮オホーツクへと魚の群れ  
豆飯が誘ふ家族の笑顔かな  
赤飯で端午の節句祝ふかな

千坂 平通

夏めくや手を前に嬰の歩き初む  
大方はをなごの村に初幟  
子供の日ひたすら励むリフティング  
天窓に陽光強き夏はじめ  
夏めくやテーブル掛は浅葱色

岡田 宣子

洋館の手を振るをみな蔦若葉  
更衣われをユトリロ・ゴッホにす  
年古りて断捨離多き更衣  
畳紙をば撫で母忍ぶ更衣  
新型コロナこもりて庭の蟻が友

川村 治

別院は留守番任せ苔の花  
増築の思はぬ風や夏に入る  
薔薇大輪掛かり付け医師まだ持たず  
卯の花腐し作務衣に似たる患者服  
髪結の文字の看板麦の秋

いすみ 平石 睦子

豌豆摘む今日も明日も明後日も  
その歳で挿木と云はれ何のその  
母の日や効力あると抱き枕  
苺摘む音に昔のよみがへり  
庭の露厭きたと云へず娘摘む

横浜 川島 典虎

薔薇咲くや世界恐慌いつ終はる  
薫風やコロナ消え去れ地球から  
亀の子の槽出て歩く早さかな  
柿若葉古民家どつしり威厳あり  
万緑や祈り捧げる美術館

和歌山 南條きわゑ

駅前のシャッター通り若葉雨  
妹の仕草母似よ花筏  
春入日持ち上げられて吾子笑ふ  
一仕事終へて晩酌初鰹  
灯台の光線強し五月闇

さいたま 野村 美子

決心のつかぬ引き際はじき豆  
理髪灯廻る路地裏額の花  
そら豆剥くコロナ保菌者かも知れず  
青葉こくうすく吊橋揺れやまず  
青鷺や右手に前方後円墳

さいたま 田中 泰子

春風も映り込みさう五色沼  
胃カメラの予約入るるや地虫出づ  
人の輪に直ぐにも慣れし子猫かな  
親元を離れ目覚めし葱坊主  
約束は眼と眼でわかる初燕

水野 興二

掛川の段々畑新茶摘む  
しづく光る表参道青楓  
やはらかに木洩日揺らす青楓  
夏の山熊野の石仏苔を着る  
青垣の大和の夏や神さぶる

草加 外村 紀子

白映ゆるレースカーテン若葉風  
窓開き撚糸工房谷若葉  
時忘れ見入る葉山の卯月波  
空と海青の世界に立つ卯波  
卯の花の小道に琴の調べかな

越谷 阿部 幸代

舶来店の褪せし看板葱坊主  
路の中より滴る水と沢の音  
デージーやヴィオロンの音の病舎へと  
路を煮る透きてなほ筋うつすらと  
刀身に軽く打ち粉を葱坊主

川崎 鈴木 玲子

洋館の窓よりシヨパン若葉風  
白杖の軽き音して若葉道  
ロープウェー迫り来る来る若葉山  
若葉風スーパ―に來る定期便  
若葉雨止みて光れる雫かな

さいたま 森 和子



さいたま

福田 育子

つづら坂一步一步に風薫る  
風薫るスカートの裾三拍子  
薫風や空いつばいに泳ぐもの  
母の日やうす紅をさし子らを待つ  
母の日やふるさとの詠智恵子抄

手作りのマスクは浴衣の残り布  
リハビリの散歩見送る春紅葉  
世の中のコロナ払ひや菖蒲の湯  
母の日や余生を飾る食事会  
花吹雪人無き公園鳩一羽

藤 沢 小島喜代子

コロナ騒ぎに地軸傾く夏初め

松田 朋子

小さき地震小さき筍目を覚ます  
夏に入り身の蝶番錆落す

さいたま 高橋 敏子

コロナ禍や初夏の地球はマスク顔

夏来たる一人のランチナポリタン  
薫風や青きトレパン硝子拭く

髪切つて再就職の夏初め  
豆飯の小さなおにぎり吾子の手に  
給食は子の大好きな豆ごはん

薫風や嬰兒を胸に若き父

若葉雨来る人の無き城の址

飯田 忠男

牡丹の酔の物つきぬ昼御膳  
仁王門入りて一面牡丹かな

蕨 細井 良子

昭和の日頬を一撫で若葉風

コロナ禍のテレビ体操夏ごもり  
葉桜のベンチに句帳取り出しぬ

「マテシバシ」顔を上げれば卯月波  
杜撰かな辺野古の現調梯姑咲く

つつがなき一日終はりぬ豆ご飯

五月連休今年閑たる観光地

小川 洋子

新樹光空無の果ての高原よ  
雉子求愛訝呼び交ふ山黙す

東京 河原 叔子

夕食の待ち遠し初鯉

ありたけの裾野や初夏の八ヶ岳  
千年に一度の厄か春愁ふ

人目ひく店に鎮座の初鯉  
母の日に最中をもらひ札に寿司  
山国や植田の水の光りあふ

ただじつと自肅何時まで春も過ぐ

取りあひの如雨露一つやチューリップ  
春泥を撥ね上げ兎横抱きに

さいたま 本橋 稀香  
(幾子改め)

仕方なくバイエル弾く子みどりの日  
大人ぶる口調となりぬ蝸蚪に脚  
朝粥や乱反射せる柿若葉

和歌山 宮井美恵子

紀の国の里に充ち満つ花蜜柑  
駅前句碑も匂ふや花蜜柑  
花みかん口ついて出る唱歌かな  
夕月や匂ひいやます花蜜柑  
花みかん匂ひをつれて乗る列車

東京 山中いちい

さんざめく若葉を見しや恩師逝く  
今少し生きよ生きよと楓若葉  
面映し袖のイニシャル若葉風  
母の日に娘でありて母であり  
母の日や解け落ちたる花の音

さいたま 森下美智枝

草の中けなげに生くる天道虫  
長屋門出で延延と青田道  
上り切り葉先でまどふ天道虫  
筍ごはん皮を器に嫁料理  
朝採りやもろ手にあまる茨豌豆

てんと虫吾の掌は滑走路  
青田風命孕みて匂ひたつ

さいたま 菅原 真理

風立ちてざわつと青田マスゲーム  
揺るる青葉に塞ぎの虫をノックさる  
首伸ばす亀のゐる沼春の昼

長井喜代子

ダイヤリー真白きままに若葉風  
木の幹に古地図広げて若葉風  
晚鐘やからりと揚ぐる柿若葉  
円柱の水槽に舞ふ熱帯魚  
熱帯魚の尾鰭眠たし齒科の椅子

伊藤 愛子

聖五月家にこもりて作句ざんまい  
豆飯の数へる吾子の小さき指  
指先の葉臭いとし春寒し  
打ち上げて花火の行方子の笑顔  
長女の名令和手を振る五月晴

宮代 関谷多美子

童謡を歌ひ歩けば天道虫  
便り乗せ赤きバイクや青田波  
先人の書の温もりや花大根  
昨日今日続けて筍飯炊きぬ  
東慶寺の門をくぐれば半夏生

土手走る少年二人夏来る

畑中に動く人あり夏に入る

古民家の木立ふくらむ立夏かな

夏に入るジョギングシューズ新しく

ペダル踏む足かろやかや夏来る

夏めくや居間に広がる登山地図

夏めくや緑葉揺らすプラタナス

マロニエの花の小径に朝の影

夫婦仲苺の匂ふダイニンゲ

マニキュアの斑に乾き星涼し

麦秋の天地を分かつ光りかな

衣更へて今朝のネクタイ水玉に

春昼やエスプレッソ飲む会議前

球拾ひのみの部活や夕長し

遅日の外コロナ気になる子等の声

金盞花女教師の声高し

花篝お面うしろに二人連れ

生干しの飛魚に会ふ島の宿

飛魚は自由を欲し空をとぶ

自慢めく病のはなし若葉風

さいたま 高原 和子

木村るみ子

安倍 弘夫

湯浅 和

薔薇の香を独り占めする白昼夢

散り際の千々に乱るる紅牡丹

藤棚に集ひて老のへぼ将棋

休校や親子で作る柏餅

りぼんの児お尻突き出しシャボン玉

何時の間に庭の辰巳に葦咲く

さまざまな袖丈ありて夏兆す

三十度二回過ぎての立夏かな

バス停で蜂乗車する春の昼

羽音たて蜂めくるめく古庇

婚礼に向かふ車窓や麦の秋

麦秋やおつきりこみは嫁の味

困難に克つ医師思ひ路を煮る

あたりまへの日々暮しや路を煮る

校庭にばら咲き誇り無人かな

新緑や久方ぶりの目にまぶし

夏めくや仮想旅行の水跳ぬる

古鉢に名も知らぬ花夏初め

青薔薇のあをの深まる夕べかな

二重線手帳に満つる五月かな

和歌山 嶋田 洋子

さいたま 綿貫ひさの

春日部 諏訪サヨ子

東京 畑宮 栄子

さいたま 横山 礼子

通学路香り吸ひ込む花みかん  
上州の山は一色青葉かな  
北窓のふきを煮つむる風甘し  
足元の毒だみの花満開に

鬼石 加藤ナヲ子

夏めくやミシンの音が窓辺から  
田の水の先にはためく武者幟  
コロナ禍や窮屈さうな鯉幟  
掘りたての筍飯や友の味

さいたま 小駒さち子

人影のなき公園に藤咲けり  
揚羽蝶自肅の庭に訪れし  
柿若葉洗たく物のよく乾き  
酒蔵の跡地にそびえ桐の花

榊原 聰子

紺碧の空に一筋つばめ魚  
亡き母の植ゑたる庭の金盞花  
合唱の音色は高し金盞花  
病窓を叩く木の葉や青嵐

鈴木 藻好

久久の街は静かや更衣  
更衣心を被ふ衣もありぬ  
麦秋や連なる畑の刈り急ぐ  
おにぎりをひとりベンチで喰む春昼

春日部 仲田 利子

衿元を少しひらきて若葉風  
熱帯魚派手な尾鰭をなびかせて  
子等のぞく待合室の熱帯魚  
若葉光眠気を覚ます師の句集

落合 和枝

曼珠沙華女はいつも待つてゐる  
おとなびて横座りするラフランス  
柿の木の実の生る家に生まれたる  
黒々とどさつと届く衣被

所沢 関根 千恵

万緑や自肅解除を待ちわびて  
初めての授業はじまる五月晴  
朝顔の双葉描きあげ得意顔  
マーガレット描く校庭に座りこみ

和歌山 葛城千世子

のびやかや忍者の里の鯉のぼり  
真夜中の地震に起こされ浜防風  
柿わかば足並そろへ修行僧  
コロナ禍や五月の予定表真白

さいたま 山下ユリ子

届けたし白衣の人に白玉あづき  
出来たての白玉友を待つばかり  
青嵐「TOKYO」の文字はためきぬ  
掠めゆく眠りしビルを青嵐

東京 飯室 夏江

面かぶり祭太鼓に勇み立つ

飛魚の海原滑空鳥の如

病室に一輪挿しのカーネーション

ゼリー手に母の病室足早に

緋のつつじ城の石垣焦しけり

密をさけ皆打首にチューリップ

甲子園の夢も中止に夏の星

聖五月金婚式も自粛して

散歩犬時にくると青嵐

白玉あづき子供みたいに夫元氣

愛犬の眼くぎづけ白玉あづき

ハンガーにしがみつくとシャツ青嵐

遠雷や逢魔が時に赤児泣く

夕雲の彩の移りや草を引く

お囃子や子の背に結ぶ単帯

露地裏に誰か置き去る夏帽子

稚児の列少し乱れて花祭

夏蝶の夢天上の外つ国へ

さいたま 武田 重子

和歌山 高橋満耶子

さいたま 緒方みき子

篠崎 紀子

佐藤 克之

広重の橋の傾斜や風光る

水面立つ運河の町の若葉風

小滴や母の望みしオルゴール

喜寿にして君子三楽カーネーション

盤上に迎へ撃つ友夏座敷

故郷は桃紅柳緑弥生山

若葉風素顔見せあふ旅の朝

熱帯魚に秘密をきかれ珈琲店

靴紐を結び直して若葉山

大阪 遠藤 人美

小川 藤間 友二

さいたま 田中 タイ

☆

☆

# 作品評

## 山本 鬼之介

松明に浮かぶ童女の白重 日高 道を

本句の季語「白重ハクオモ」白襲ハクウ「しらがさね」の本義は、陰曆四月一日の更衣に、表裏ともに白の平絹（素材には薄地の生絹ナメシルなどを用いる）の袷を着ることと、角川俳句大歳時記で解説されているが、現代における日常的な風俗としては、神官や僧侶などの特別な職種に限られているようで、一般人の日常には縁の薄いものと思われる。

そこで、掲句の白重が如何なるものかを松明をヒントに考えた結果、薪能に登場する童女役の能役者が着ている衣装に行き着いた。女系の能面の中に、「小姫」という面があるようなので、おそらくその種の能面を付けた演者が、燃えさかる篝火に映し出されて熱演している景であろう。白重の童女の幽玄な姿が眼前に迫ってくる。

蒼天を飛ぶ夢果てぬつばめ魚 野田 静香

筆者の現役サラリーマン時代、九州大分に出張の折、大分

空港から乗ったジェットフォイルの左右を、無数の飛魚あごこが飛び交っていた。この句が、その時の情景にぴったりと重なった。発達した大きな胸鰭を広げて、平均的には海面上2メートルを時速50〜70kmの高速で100〜300メートル滑空する。大型の魚に食われるのを防ぐために飛翔すると言われているが、飛翔中に必要に応じて急ブレーキを掛けて水中に入ることや、空中で方向転換することも可能と、かなり高度な能力を持つ魚である。飛魚の生態を、「飛ぶ夢」と表現したこの作品に、作者の感性の豊かさを感じた。

豆飯や息吐くやうに箸を置く 山口 韶子

豌豆・蚕豆・枝豆などを炊き込んだ飯のことで、炊いている時や食べる時の香りと食感によって誰もが好む飯である。しかし、その旨さを端的に表現することは難しく、長々と述べたのでは折角の旨さが逃げてしまう。この俳句は、豆飯の旨さを言い尽くしており、これに勝る表現は無いと思う。

素袷のぶらりと歩く花川戸 染谷 正信

素袷は、夏の季語「袷」の傍題となっているが、辞書によれば襦袢を着ないで素肌に直接袷を着ることの意である。

それにつけても、実に洒脱で憎いほど上手い俳句である。素袷に兵児帯をきりりと締め、手には涼しげな男物の信玄袋、

足には下駄か雪駄という出で立ちだろう。まさに江戸時代から還ってきたような男伊達である。

花川戸という地名から直ぐに浮かんでくるのが、旗本奴と男伊達を競い合った町奴の頭領・幡随院長兵衛と、歌舞伎名家・市川團十郎家のお家芸で歌舞伎十八番の演目の一つである通称「助六」に登場する「花川戸助六」の二人である。

初夏の川風を身に受けて浅草界隈を散策する作者の心に、本で讀んだり芝居で観た侠客の血が呼び込まれたのだろう。

授乳のやうに陽光注ぐ青田かな 西幅 公子

早苗を植えてから一ヶ月もすると、稲は活発に分蘖かんけつして株を張り、背丈も伸びて緑の色も濃くなる。それが「青田」で、青田の力の源が田に満たされた水と降り注ぐ太陽の光である。青田の稲を育む陽光を、「授乳」に譬えたことで、平凡で当り前の景色が生き生きとしてきた。

火蛾遊ぶ昭和の匂ふこの辺り 曲淵 徹雄

令和の時代になった今、郷愁の対象となる時代は、一昔前に感じていた明治・大正から昭和に移っている。それも、彼の大戦の前ではなく、大戦後の復興期や経済成長期、即ち各家庭に電気冷蔵庫・洗濯機やテレビが普及した昭和三十年前後、さらには、東京オリンピックで一気に需要が伸びたカラーテ

レビに代表される頃の昭和である。いつの間にか「昭和も遠くなり」の感がする。

赤提灯が点在する駅裏の薄暗い街灯に群がる火蛾を見て、学生時代のアナログの昭和を懐旧している作者である。

仰がるる殿様となれ蛙の子 青木 鶴城

お玉杓子に手足が生え、尾が消えると蛙の子になる。そして、殿様蛙として一家を束ね、群れを統率してゆかなければならない。テレビの時代劇ドラマを視ていると、暗君は多いが名君は少ない。蛙の子を観察していて、ふとそんなことを頭に描いたのかと思うが、なかなか心根の豊かな俳句である。

若き日の恋の結末ソーダ水 越田 栄子

「灼熱の恋」とは言わぬまでも、淡い初恋を含めて人それぞれに恋の想い出があると思う。一途に思い詰めた青春時代の恋は、思い通りに実を結ぶことなく終わってしまった。数十年の歳月を経た今、当時を振り返ると、当時の行動が実に子供じみたものに見えてくる。その想い出は、ほろ苦く甘酸っぱい。時間が経ったソーダ水の気泡が、また一つゆっくり上ってゆく。あの恋が突っていたらと思う反面で、あれでよかったのだと自分に言い聞かせている。

夕映えの野点の袖に散る桜 保坂 翔太

午後から続いていた野点の茶会も終わりに近づき、張り巡らした幔幕を夕陽が染めている。和服を着こなした人々に、満開の桜が華やぎを添えている。ひらひら舞い落ちる桜の花びらが袖にとまる。優雅な時が流れてゆく。

春風や境界線のなき野原 新井 孝磨

住宅地にしろ工業地にしろ、所有者の権利を守るために境界がある。野原にしても、その場所の所有権を明確にするための手段は講じられているはずだが、今この野原に居る者にとって、煩わしいものは一切無い。方向を定めず勝手気ままに吹きまくっている春風にとってはなおさらのことである。作者の手柄が表されている快い作品である。

荷風忌や夕陽眩しき古書の街 檜鼻ことは

一九五九年（昭和34年）四月三〇日が永井荷風の命日で、享年79歳であった。耽美派の文学者として、小説・翻訳・随筆・日記の分野で活躍。「あめりか物語」「つゆのあとさき」「暹東綺譚」など、代表作が多い。一九五二年（昭和27年）に文化勲章を受章しているが、その後年、浅草のフランス座やロック座に通い詰めるなど、生々しいエピソードがある。

掲句の作者も、荷風文学のファンの一人かと想像するが、古書の街と言えば、東京では神保町の神田古書店街を筆頭に、東京大学周辺の本郷古書店街、早稲田大学のある早稲田古書店街が有名である。大阪であれば、阪急三番街にある「阪急古書のまち」であろう。俳句のモデルになった古書店街が何処かは別として、古書店街に荷風の人物像が重なってくるし、「夕陽眩しき」が荷風と作者とを確り結びつけている。

菖蒲湯の菖蒲刈る鎌研ぐ朝 加藤でん治

季語「菖蒲湯」の例句の殆どが、当然ながら菖蒲湯に入っている情景を詠んだものであるのに対し、本句が「菖蒲」を季語とし、「菖蒲湯」を二次的なものとして詠んでいるところに妙味がある。最高の菖蒲湯を実現させるために、朝から鎌を研いで菖蒲刈りに行くという念の入れようである。

ボレロ高まりレモンソーダの泡躍る 原田 秀子

言わずと知れたフランスの作曲家「モリス・ラヴェル」のバレエ曲「ボレロ」で、有名かつ多くの音楽ファンに愛されている曲目である。一つのリズムと二つのメロディーの繰返しというたいへん特徴のある楽曲で、フルートの極々小音から始まって、次々と異なった楽器編成でメロディーが奏でられ、メロディーとリズムが次第に勢いを増してゆく。最終



は、フルートをはじめとする全ての管楽器と弦楽器・打楽器のフル演奏となる。十五分程度の曲であるが、ついつい引き込まれ興奮の極地に至る。作者もボレロに魅了された一人だと思うが、筆者も例外ではない。レモンソーダの気泡は、まさにボレロの曲に乗って踊るプリマ・バレリーナである。

### 能登瓦光る城下に五月来ぬ

洪谷きいち

日本全国の瓦の生産地は二十箇所余と聞いているが、その中で、三州瓦（愛知県）・石州瓦（鳥根県）・淡路瓦（兵庫県）が三大生産地とされている。この句に登場の能登瓦は、釉薬を厚く塗り、高温で焼成することによって、黒色で耐久性に富むのが特徴である。能登瓦を載せた家々の屋根が、初夏の陽光を受けて黒光りしている情景は、実に力強く爽やかである。加賀百万石の城下町であろうか。

### 水面往き交ふ赤き手甲の御田植よ

秋山 紅花

田植も機械化が進んだ現代に於て、掲句の風俗は解せないが、多分田植のイベントか、神事のようなものかと想像する。昔ながらの長閑な田園風景に、観客は大喜びしていることだろう。緋の野良着に赤手甲がよく映える。

### 群れてなほ一人静のひそやかに

横山 君夫

この花の名は、源義経の愛妾「静」が独りで舞っている姿を思い描いて付けられたそうで、花言葉「静謐・隠された美」にもその特性が示されている。一人静の群生地の景観が、簡潔に、しかも、情趣に富んだ言葉で詠まれている。

### 走り根を越えて一途に蟻の列

神田 治江

蟻の行動を観察していると飽きることが無い。それが一匹であっても集団であっても、常に動いているからで、何を考えて行動しているのか興味が沸いてくる。苔むした大木の盛り上がった走り根を物ともせず一匹ずつ律儀に越えて行くこの行列が何処まで続いているのか、何時終わるのか、最後の最後まで見届けたい誘惑に駆られてくる。

### 骨切りの音のリズムや夏さざす

新 暦文

鱧はまに包丁を入れる「骨切り」の「さくさく」という軽快な音のリズムである。鱧と言えばやはり京都で、流通システムの無かった時代に、生きた状態で京都に入荷した魚は鱧だけと言われたほど生命力の強い魚である。最高の技量を持つ板前が骨切りした鱧をさつと湯通しして氷水で締めた鱧料理の華「鱧おとし」は、夏の京都を代表する料理である。

鱧に似た円筒形で体長一〜二寸、口が大きく裂けて両顎に鋭い歯が並ぶ鱧の好物は、蛸・烏賊・海老・蟹だそうで、この美食が鱧の旨さにつながっているのかも知れない。

## 水琴窟

(水明集六月号鑑賞)

池田 雅夫

水無月の大樹にかかる昼の月

川村 治

梅雨の時期が過ぎ、いよいよ夏を迎えた樹々はうっそうと茂り生命力が漲っている。大樹の眩しさに昼の月は及ばない。比較する対象が大きければ相対的に主役を大きく言い表わすことになる。水明集では当季の句をそろえてほしい。

揺れてゐる水面の樹々や春の鴨

反町 修

鴨は三月から五月にかけて、ふたたび北方大陸へと帰ってゆく。これを「引鴨」といい、春になっても帰らないものを「残る鴨」という。沼や湖の水面に樹々が静かに映っているのだろう。静けさの中に鴨の動きが強調されている。

たんぼぼ響き優しく咲きをりぬ

杉浦 理恵

「たんぼぼ」には「鼓草」という別名がある。その由来は鼓を打ったときの「タン ポンポン」という音から連想されたという説が有力。本句はそれを踏まえて「たんぼぼ」とさらに音を重ねる工夫をしている。さらに深くを詠みたい。

宿酔や朝餉の蜷六腑まで

竹澤 和子

「宿酔」は二日酔いのこと。二日酔いには蜷汁がよいと言われている。蜷には「オルニチン」「タウリン」が含まれていて、それらが肝臓のはたらきを助けるらしい。共感する。

木の芽風氣勢をあぐる斜面林

松田 朋子

三月になると、それまでの風とちがいが、芽吹いたばかりの木々を揺らし香りたつ風が吹くのである。標高差のある斜面では高さを増すことに淡い緑のままである。「氣勢をあぐる」の擬人化が風の唸りに重なる。「斜面林」の観察が充分。

球児等の無念の涙春の星

高橋満耶子

新型コロナウイルスの感染の影響で春の選抜高校野球大会が中止となった。出場が決まっていた球児等は諦め切れずに、ただ、ただ涙に暮れるだけであろう。どことなく潤んでいる「春の星」と「無念の涙」が重なる。八月に交流試合か。

県境の隔てを無くす花辛夷

岡本 祥子

山野の春を彩る代表的な花木の辛夷。九州から北海道に至る各地に分布する。とりわけ県境の奥深い山野に多く見られる。枝いっぱい咲く白い花のみごとさには県境などあるはずもない。辛夷の花が農作業を始める目安とされていた。

鯉が身をのり出す音や水温む

佐々木典子

庭園や公園の池で、鯉に餌をやるときに集った鯉が重なり合っている光景を目にしたことがある。すさまじい水しぶきとともに水面から盛り上がって餌を食べるのである。水の温んだ池の周りの色や動きに春を感じているのだろう。

巢立つ子の声が遠のく花の冷え

阿部 幸代

近年は桜の開花が早まっていて、卒業式の行なわれる三月中旬ごろが多い。進学や就職で家を離れ、都会生活を始める子等。実際の見送りの場面か、あるいは数日後か、いづれにせよ、子と別れた一抹の淋しさが「花の冷え」に表われる。

境内へ陰をさがしに蟻の列

関根 千恵

発想がおもしろい。炎天下でも蟻は活動し餌を探し求める。長く続く蟻の列が境内の奥の陰へと伸びている。森や草花が多い境内は蟻にとっても恰好の住み処なのだ。「蟻の列」は引越してであろうか。卵を運んでいるのを見たことがある。

吟醸酒の表面張力春の色

山中いちい

吟醸酒をなみなみと注ぎ、表面張力で盛り上がったグラスに口を寄せている。花を愛で山河の若緑にこころを躍らせているのだ。「家呑み」の今日、早めの晩酌であろう。

建ち並ぶソーラーパネルの弥生かな

落合 和枝

温暖化対策、そして原子力依存の発電からの脱却を目指し、ソーラーパネルが各地に設置されている。そんな社会情勢をさらりと詠んでいる。「弥生」のころの明るいイメージにより、「ソーラーパネル」が社会に役立っていると伝えている。

潜り行く有刺鉄線猫の恋

鈴木 藻好

昼夜を問わず「恋猫」の騒騒しさはすさまじいものがある。それを象徴するかに「有刺鉄線」を配したところが共感をよび、さらに「潜りゆく」の措辞に奥行きのある句になった。猫のみならず、人間界においてもかくのごとし。

過去はもう口に出すまい流れ星

藤間 友二

「流れ星」の大半は地上に到達する前に燃え尽きてしまう。幻想的でもあり、願いをかけることもある。「過去はもう口に出すまい」と強い決意をもって星空を仰いでいる。複雑な心情がふつきたのだろう。「流れ星」の配置が心憎い。

街弥生いろどり豊か和菓子店

田中 タイ

「弥生」の語には艶やかなひびきがある。和菓子店の草餅や鶯餅、桜餅などいろどり豊かな商品。その情景が見てとれる。推敲で句の流れを円滑にすることをすすめる。

鼓

笛

集

山中順子選



母の日や位牌ザツクに山の駅  
鈴蘭や初恋淡き霧ヶ峰  
十葉や少女の服の白き襟

西幅 公子

迅雷に子を抱く母の顔真青  
帰省子にふる里の街温かし  
梅雨晴間カレーの香る古書の街

日高 道を

麦の秋卒寿がジャズを駆ピアノ  
反抗期の子と連弾や梅雨晴間  
風薫る大合唱の駅ピアノ

野田 静香

ちらと見てウインク返す青蛙  
錦玉糖ざくと一口心和ぐ  
梅雨じめりピオラの弦は切れしまま

原田 秀子

銭湯の気高き富士画菖蒲の湯  
東京に檜原村あり麦の秋  
尾瀬ヶ原描く水彩初夏の風

保坂 翔太

失恋のごとき自粛よさくらんぼ  
初恋やほろりととけるかき氷  
サーファーの海見る二人ラムネ飲む

橋本 京子

対岸をゆくは我が影夏はじめ  
腰骨が弾くポシエット更衣  
燕の子漁港に近きヘアサロン

曲淵 徹雄

額の花父母なき里に寛げり  
パリ土産の香水なれど持て余し  
ステイホーム玻璃のむかうに熊ん蜂

森 和子

夏の蝶貴女守ると纏ひ付く  
夏すずめ大きな飯をくちばしに  
紫陽花に玄関占領されるなり

南條きわゑ

手押しポンプのまはり十葉はびこりて  
初採りの胡瓜「し」の字のまま成れり  
頭上より新型A Iクーラーが

森下美智枝

六月や国の殿から十万両  
一番茶急須に汲みて僧揃ふ  
強欲婆けふも餌やる梅雨の猫

松島 寛久

威勢良き一本釣りの初鯉  
風鈴に恋の予感を夕の風  
愛らしき庭の鈴蘭毒を秘め

野村 美子

大輪のあぢさゐ道にあぶるほど  
従容と雨に溶け合ふ四葩かな  
傘傾げわかき四葩に佇めり

山口 韶子

懸案の道筋立ちて一夜酒  
梅雨寒し背の赤児をあやしけり  
蝸牛葉裏に向かひかくれんば

村杉 清吉

紫陽花の白のいざなふ森暗し  
雀追ふいたづら鴉青嵐  
カラスなぜ泣くの唄へば梅雨夕焼

山岸 弘子

流れ行く捕り損ねたる川蜻蛉  
跳べたはず此の川蜻蛉捕れたはず  
桑の実や心ときめくこと今も

水落 守伊

鼓笛集巻頭（七月号）

私の好きな一句（自句自解）

瀬戸雄二郎

新じやがの収穫バケツ二杯ほど

家庭菜園で馬鈴薯がバケツ二杯程穫れた。

食べ物が手に入らなくなっても老二人一か月位は飢えずにすむ量である。

戦後の食べ物が不自由であった頃これだけの芋が有つたらどれだけ助かつたらうと思つたらじゃが芋が愛しくなった。

スーパーに行けば何でも自由に手に入る時代がいつまでも続くとは限らない。

# 鼓笛集作品評

山中 順子

母の日や位牌ザックに山の駅  
 鈴蘭や初恋淡き霧ヶ峰  
 十葉や少女の服の白き襟

西幅 公子

母の日にザックに位牌を入れて山登りをする親孝行娘が、  
 実らなかった初恋の思い出、その娘の服に白い襟がかかって  
 いた。この三句は作者の青春そのものである。微妙な心情  
 の揺れが然りげ無く込められ、それを生き生きとした感覚で  
 味わせてくれた。

麦の秋 卒寿がジャズを駆ピアノ 野田 静香

この頃流行りのストリートピアノなるものの舞台が動かな  
 い。卒寿がジャズを弾く本格な絵に足を止めさせられた。あ  
 との拍手はどんなだったか想像がつく。

東京に檜原村あり麦の秋 保坂 翔太

東京都23区に属さない市、町、村がある。私も檜原村に行っ  
 たことがあるが、隣りは山梨県だと思った。材料の面白さと  
 一句を貫く明快さが季語の力を優先する。

## 水明発展基金御礼 (敬称略)

—令和二年六月三十日現在

大塚 茂子	10	口	矢島 清	10	口
日高 道を	5	口	加藤むら子	10	口
星野 和葉	10	口	匿 名	10	口
内田 恵子	10	口	渋谷さいち	3	口
塩野 久子	3	口	高原 和子	3	口
島津 初花	5	口	井関 礼子	10	口
近藤 徹平	5	口	岡野 順子	10	口
荒井 俱子	5	口	辻 静子	5	口
松宮 保人	10	口	森 和子	3	口
—合計63口—			川島 典虎	3	口
—令和二年七月三十一日現在			日高 道を	5	口
内田 恵子	10	口	佐々木典子	6	口
飛永 鼓	5	口	—合計93口—		

## 第4回「水明塾」参加者募集

雑詠欄「水明集」投句者と未だ投句の無い誌友を対象の「水明塾」を下記のとおり実施します。参加申し込みは、コロナ禍への対応上先着30名で受付終了とします。30名をオーバーした場合はその旨お断りの連絡をし、後日参加費をお返します。

なお研修会のスムーズな運営を期すため、兼題2句を参加申し込み時の事前投句とします。早めにお申し込みください。

**【日時】** 2020年10月27日（火） 9：00～17：00

**【会場】** JR浦和駅東口 「浦和パルコ」10階

浦和コミュニティセンター第14集会室

**【参加費】** 2,000円（お茶・弁当込）

**【参加申込】** 参加費と兼題句2句を添えて10月9日（金）までに水明発行所総務部へ郵送または直接申し込みください。

**【カリキュラム】**（予定）

- 1 主宰講和「俳句における虚と実」
- 2 句会と相互討議

※兼題 季語「草の花」・テーマ「音楽」で2句

注）テーマは詠込みではなく「音楽」の字を使わず、例えば曲名や楽器などで「音楽」のイメージを表現すること。季語は秋で。

参加申し込み時に200字原稿用紙（B5）に作者名と2句を列記

- 3 講義「季語に付く助詞、季語を導く助詞」
- 4 俳句における疑問質問 ※予定の質問があれば投句の際に記載を。

研修部

# 水明夏行



以上特選

第一日（七月二十九日）

境 延昭

水明夏行は盛夏の中三日連続が長い伝統であるが、今年は冬からのコロナ禍により二日に短縮しての実施となった。加えて長梅雨の中で寂しい夏行を覚悟していたが三二名の参加、昨年第一日に並ぶ最多記録となった。新顔六名の夏行初参加は予期せぬ成果であった。一番乗りの松本光子さんが引当てた席題の「夾竹桃」と「血」の詠込みで三句。互選は五句、主宰には多選をお願いした。句会では境が進行役、披講を五明昇・保坂翔太の両氏、そして点盛を石井喜恵・石山かつ子・大村節代の三氏が担当した。

### 主宰詠

血わき肉をどるボレロよ晩夏の夜  
夏蝶を追ふ純血の紀州犬  
こいさん追うて夾竹桃の盛る町

### 主宰選

父の血と母から肉を単帯  
血統はなべて平民田草取る  
門ごとに魔除獅子置き夾竹桃  
糶市に血潮みなぎる鱈さかひ取  
適塾に血気の名残り夏なつ旺とんん  
とどの親子かこれも血統夏太り  
血筋より緑の糸や夏の星  
階下より水性の風夾竹桃  
夾竹桃いまなら分かるあれも恋  
ガスタンク前に堂々夾竹桃  
口遊む「あなたを待ては」夾竹桃  
夾竹桃島に短かき滑走路  
夾竹桃会釈を交はすだけの仲

青春の血潮が騒ぐ夏の海  
夾竹桃一花をながめ決断す  
水やれば如雨露と会話す夾竹桃  
夾竹桃いまでも婆は黒電話  
血脈を辿れば迷路はたた神  
夾竹桃者間距離にてバスを待つ  
蚊を叩き後に吾の血残りけり  
夾竹桃夕陽溶けゆく独り旅  
夏の朝血圧良ろし一万歩  
反骨の道つらぬくや夾竹桃  
三社祭血気盛りの臍が飛び  
オフィスの窓よりまつ赤夾竹桃  
夾竹桃手探りの世を照らしをる  
血痕残るロープに縋る夏の山  
夾竹桃鉄入れられ花どこへ  
夾竹桃咲いてまた咲く逞しさ  
黒板扉に下駄音軽し夾竹桃  
地を揺らす祭太鼓に血が騒ぐ  
夾竹桃日が落ちる程生き生きと  
夾竹桃疫病神は赤が好き  
血行良き笑顔たくまし帰省の子  
熱血の父には遠く雲の峰  
夾竹桃悪いニュースに慣れ過ぎて  
夾竹桃は原爆の花忘れまじ  
夾竹桃語部の皆年老いて  
庭園のサルビア盛り血を噴よ

翔太 清 愛子 節代 徹雄 喜恵 章嘉 紀子 美智枝 道子 輝翠 鳴海順子 チアキ 徹平 公子 マスミ 理恵 静信 正信 大場順子 静香 月香 かつ子 稀香 光子



垣根越し会釈の先の夾竹桃  
コロナ恐し世界の願ひ夾竹桃  
夾竹桃重機の叫ぶ脇往還  
避暑宿に持参の犬の血統書

鶴城  
育子  
昇  
延昭

第二日（七月三十一日）

五明 昇

長梅雨によりやく終止符が打たれそう  
三十一日、精鋭三十二名の参加を得て、夏行  
第二日（最終日）の幕が開いた。席題は「網  
戸」と「会」詠み込み。会場に漲る熱気と緊  
張感に日頃のコロナ禍を忘れる一日となった。

主宰詠

虫干の隅に名残の夜会服  
家中網戸幽雲ならばどうするか  
アロハの男会津魂のたまひぬ

主宰選

荒彫りの穂高槍岳網戸越し  
再会は思はぬ時に蓮見舟  
夕涼や橋の彼方に会津富士  
行進の機会なまさま蔦青葉  
さのふより風の清しき網戸かな  
網戸して闇を間近に引き寄する

マスマミ  
和子  
静香  
徹平  
道を  
かつ子

再会のあなたと分かるオーデコロン  
路地裏の網戸を洩るる艶ばなし

節代  
昇  
以上特選

見つめ会ふ網戸の爪は猫二匹  
声かける島の駐在網戸越し  
網戸して隠しとほせし内緒ごと  
街の灯のひとつふたつと網戸越し  
自己流のスキヤキソング網戸越ゆ  
自治会の会計係明け易し  
網戸より煙草のけむり山の宿  
会釈してすれ違ふ路地白日傘  
信濃路の同窓会や洗鯉  
下町は網戸の暮し隅田川  
回り灯籠会ひたき人の皆遠し  
レーサー気取る子の運転で夏会津  
越後上布膝を正して会席膳  
住み古りし町のつきあひ古網戸  
夏場所の会心の技笑顔あり  
網戸越し姫の唄ふ相聞歌  
直会の精進料理滝行者  
姉妹の笑顔いつばい夏会席  
会へば又別れ難きよ半夏生  
網戸して聴くはバツハのカンタータ  
網戸より夜風の通ふ寝間の窓  
同窓会の君と呼べるも舟遊び  
網戸替へ細やかな風通りけり  
冷房を止めて網戸の風優し

輝翠  
延昭  
鶴城  
月を  
美智枝  
曆文  
稀香  
翔太  
光子  
順子  
理恵  
マスマミ  
徹雄  
公子  
道を  
かつ子  
育子  
和葉  
正信  
良枝  
静香  
とも子  
さいち

やあやあと網戸ごしなる御挨拶  
開け放つ網戸となじむ侘住ひ  
網戸より客と風とが入り来て  
盆迎へ手打の蕎麦で従姉妹会  
月明り網戸の先に波光る  
会ふ術もなき人思ふ浜晩夏

和子  
チアキ  
章嘉  
和枝  
静司  
昇

令和二年度の水明夏行も盛会のうちにフイ  
ナレを迎えた。注目の主宰講評は時間の制  
約から今年も『水明』誌上に持ち越され、主  
宰に執筆の労をお願いすることとなった。  
成績優秀者については、二日間の特選者の  
中から三極（天・地・人）の三名（網野月を、  
五明昇、石山かつ子）に主宰句の色紙、超特  
選の五名（境延昭、丸山マスマミ、野田静香、  
日高道を、大村節代）に同短冊を授与。併せ  
て二日間を通じての主宰選高得点者七名にも  
主宰句の短冊が授与された。

一位 五明 昇 二位 境 延昭  
三位 石山かつ子 四位 野田 静香  
五位 近藤 徹平 六位 日高 道を  
七位 丸山マスマミ

新型コロナウイルスの感染拡大で開催が危  
ぶまれた夏行だったが、会員各位の協力で盛  
会裡に終了することができた。創刊九十周年  
を迎えた水明の底力に連帯の拍手を送りたい。

# 夏行講評

## 山本鬼之介

昨年より、夏行の講評を誌上で行うことになった。超特選と特選は、両日を通しての作品の番号順に、入選は、出席名簿順に列記した。なお、二日間の特選句の中から、三極に色紙を、超特選五句と一位〜七位に短冊を贈った。

### 【三極】

〔天〕父の血と母から肉を単帯 網野 月を  
欠陥なく生まれ、心身共に健康に恵まれて育ち、職業に就き、良縁を得て結婚し、めでたく一子を得た女性を思ふ俳句である。「単帯」が、主人公をこよなく輝かせている。

〔地〕適塾に血氣の名残り夏旺<sup>さか</sup>ん 五明 昇  
適塾は、江戸時代後期、大阪・船場に緒方洪庵が開いた蘭学塾。福沢諭吉ほか、近代日本の礎となった人達が居た塾の今の建物に、往時の熱血青年のような夏の陽が射している。

〔人〕血統はなべて平民田草取る 石山かつ子  
明治維新以後、昭和二十二年の現憲法施行まで、華族・士族・平民の族称が維持されてきた。先祖代々受け継がれてきた平民の気楽さや逞しさを象徴する「田草取り」である。

### 【超特選】

夾竹桃島に短き滑走路 境 延昭  
プロペラ機しか運航しない島の飛行場。滑走路のフェンスに咲いた真っ赤な夾竹桃が、訪れた人々の旅情をかきたてる。

荒彫りの穂高槍岳網戸越し 丸山マスキ  
名山を望む旅の宿。夏の霧に包まれ、さらに網戸越しの景色を荒彫りと表現したことで、この季語に詩情が生まれた。

夕涼や橋の彼方に会津富士 野田 静香  
橋の袂で夕涼みをしている。田園地帯の彼方に、会津富士と呼ばれる磐梯山が、残照の中で優美な稜線を見せている。

きのふより風の清しき網戸かな 日高 道を  
網戸を通る風には、開け放った戸口や窓から入る風とは違った趣がある。微妙な感触の違いを、素直な心が捉えている。

再会のあなたと分かるオーデオロン 大村 節代  
むかし馴染んでいた彼の香水の香。再会までの歳月が掻き消されたように、目の前には往時の君が戻ってきた。

【特選】

とどの親子かこれも血統夏太り 杉浦 理恵  
親に似て夏太りしている胡獺の子。人間の親子も同様だ。

血筋より縁の糸や夏の星 星野 和葉  
親子の血筋より夫婦の縁の方が濃いと、夏星を眺めながら。

階下より水性の風夾竹桃 青木 鶴城  
肌に心地よい風を、水性と表現したことに妙味がある。

夾竹桃いまなら分かるあれも恋 石井 喜恵  
歳月を経た今、やるせないあの時の気持を懐かしむ女独り。

ガスタンク前に堂々夾竹桃 森下美智枝  
球形のガスタンクか。炎昼の夾竹桃の強靭さを思わせる。

口遊ぶ「あなたを待てば」夾竹桃 千坂 平通  
昔の有楽町と現在の夾竹桃との違和感が面白い。

再会は思はぬ時に蓮見舟 茂木 和子  
蓮見舟が行き交う時の知人との全く偶然の再会にびっくり。  
行進の機会なきまま蔦青葉 近藤 徹平  
球児待望の甲子園野球が中止。蔦青葉が虚しさをそそる。

【入選】

下町は網戸の暮し隅田川 松本 光子  
隅田川沿いの下町の風情を、「網戸の暮し」と言い切った。

水やれば如雨露と話す夾竹桃 伊藤 愛子  
水遣りの人の気持を如雨露に託している。

夏場所の会心の技笑顔あり 西幅 公子  
無観客ではあるが、テレビ視聴者の笑顔が輝いている。

夏の暮古書舗にさがす名所図会 染谷 正信  
目を輝かせて古書店街を巡る作者の様子がよく見える。

羅の御手前りんと茶会かな 大場 順子  
きりつとした男性の茶道師匠を思う。羅の衣服が清々しい。

夾竹桃一花をながめ決断す 矢島 清

定まらなかつた心を決めたのは、真つ赤に燃える夾竹桃。

蚊を叩き後に吾の血残りけり 田中 章嘉  
憎つき蚊を退治したもの、己の血を見て怒り百倍。

漁夫帰る血鯛の漁の大漁旗 梅澤 輝翠  
歓迎し難い名の鯛だが、港を指す漁師の顔が輝いている。

信濃路の同窓会や洗鯉 保坂 翔太  
信州佐久での同窓会か、本場の鯉の洗膾に一同が大満足。

会ひたき友の隣席嬉し晩夏かな 宮崎チアキ  
会ひたかつた友人と並んで会食。料理の味も一段と深まる。

網戸越し遠き足音近づきぬ 福田 育子  
夜の静寂をぬって近づいてくる足音。網戸が演出している。

夾竹桃遣り過ぎしたる昼の酒 曲淵 徹雄  
庭の夾竹桃を眺めながら、つつい酒が進み過ぎた夏の昼。

白百合の玲瓏として教会堂 本橋 稀香  
清楚でありながら、確りと存在感を示す教会堂の白百合。

初めての御神輿担ぎ血が走る 増田 静司  
神輿担ぎの初体験。もみくちやにされながら熱い血が滾る。

夾竹桃夕陽溶けゆく独り旅 篠崎 紀子  
夕陽に染まった夾竹桃。気楽な独り旅の旅情が募るひと時。

桑の実を摘めば手指みな血の色に 鳴海 順子  
想い出の桑の実摘み。紅く染まった指に昔が還ってくる。

盆迎へ手打の蕎麦で従姉妹会 落合 和枝  
故郷で従姉妹たちが集まり、手打蕎麦を囲んで宴を開いた。

美声よな十時の笑顔網戸売り 新 曆文  
江戸時代から続く行商であるが、今は拡声器付きの車販売。

網戸より夜風の通ふ寝間の窓 増田 良枝  
寝苦しい夜に、心地よい自然の風は絶品である。

冷房を止めて網戸の風優し 渋谷きいち  
家電万能の時代であっても、自然の風に優るものはない。

知らぬ地に会ふわくわくよ夏帽子 成海とも子  
初めて足を踏み入れる地は新鮮で、興奮を隠せない。

## 令和3年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格	季音同人を除く同人・誌友
応募句	未発表作品：15句
締切	令和3年2月末日（発行所必着）
応募方法	水明12月号に応募用紙添付

第15回

# 角川全国俳句大賞

作品  
募集中!

2020年9月30日 当日消印有効 主催 角川文化振興財団

投稿  
方法

自由題2句1組=2000円(税込)、  
または、自由題2句1組+題詠1句=3000円(税込)の組み合わせ。  
お一人様何組でも応募可。題詠は「雨」。

選考委員

有馬朗人 茨木和生 宇多喜代子 片山由美子 黒田杏子 高野ムツオ  
西村和子 正木ゆう子 三村純也 宮坂静生

都道府県賞  
選考委員

源 鬼彦 阿部月山子 白濱一羊 嶋田麻紀 佐怒賀直美 秋尾 敏  
高柳克弘 原 朝子 井上康明 中坪達哉 伊藤敬子 鈴鹿呂仁  
石井いさお 高橋将夫 森田純一郎 白岩敏秀 江崎紀和子 西山常好  
岩岡中正 岸本マチ子

賞

大賞、準賞、角川文化振興財団賞、  
ことぶき賞、都道府県賞など多数。

結果  
発表

2021年3月(予定)  
月刊誌『俳句』誌上にて発表。また応募  
者全員の作品を収録した作品集『俳句  
生活』を応募1組につき1冊送付。

応募用紙のご請求はこちら

角川文化振興財団内「角川全国俳句大賞事務局」  
TEL 04-2003-8720 FAX 04-2003-8718  
〒359-0023 埼玉県所沢市東所沢和田3-31-3  
ところざわサクラタウン 角川武蔵野ミュージアム  
※Webの専用フォームからも投稿を受け付けます。  
<http://www.haiku575.net/>

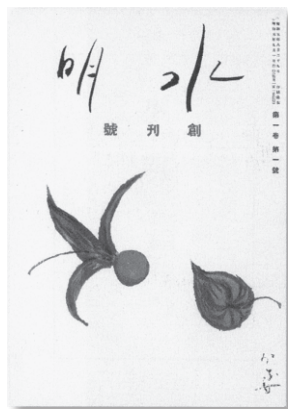
# 水明

創刊九十周年



燕にも五代の資格蔵の町 主宰 山本鬼之介

今、「水明」の創刊号を手元に置いてこの稿を起こそうとしている。創刊號二ページ目の「悠久の旅へ・發刊の言葉」と題する一文は、筆者の伯父である澤本知水が、勤め人の職を擲つて水明の旗揚げに心身を投じた覚悟の証である。俳誌「水明」は、昭和五年九月、長谷川零余子の妻・長谷川かな女を初代主宰に仰いで創刊されたが、黒衣として心血を注いだ澤本知水の存在なくしては為し得なかつたことだと思ふ。創刊と同時に、受け入れを心配するほど国内の津々浦々から入会希望者が殺到したそうで、会員増強に策を弄している今では、夢のような話である。創刊からほぼ四十年間、新旧多くの会員を束ねて「水明」を守り抜いたかな女が没し、二代目を嫁の長谷川秋子が継いだが、昭和四十八年二月、四十六歳の若さで急逝。三代目の星野紗一は、経営手腕を発揮して再び黄金期を築いたものの、晩年の病を克服できず、平成十八年、弟の星野光二に四代目を委ねた。星野光二は、在任の十三年間で、会の財政立て直し、創刊八十・八十五の周年行事と通巻一千号、更に、念願の『長谷川かな女全集』の発刊など、数々の事業を成し遂げ、平成三十年晩秋、皆に惜しまれて故人となつた。五代目主宰として筆者が何を為すべきかを考え抜いた結果の答が、「長谷川かな女への回帰」である。創刊九十周年を目前にした今、知水伯父の後を継いで悠久の旅を続けることが、自分に与えられた使命だと思つている。



恋人よ秋とは赤くなることか	網野月
炎昼を割く遮断機の棒一本	石井喜恵
山藤は蛇の化身か登り咲く	石山かつ子
清明の蔓ねぢ伏せて籠をあむ	大橋迪代
いつ青春いまが青春リラの花	大村節代
とりかぶと一人は先に帰りけり	栢尾さく子
流水算解かむとすれど冬銀河	菊池ひろこ
ふるさとがどざりと届くりんご箱	五明 昇
山の子が海で恋知る晩夏かな	境 延昭
狂ふなら枝垂桜の円の中	椎野美代子
師の句碑へ寄り道をして田水張る	島津初花
峰に斯く朱き月あり鬼やらひ	鈴木康世
須磨琴の連れ弾きを聴きたかむしろ	田寺玲子
焚火してゼウスに届く煙かな	永野史代
梅ひらき人は秘密をもち初めぬ	西山貴美子
柚子風呂に母を抱き入れよろけあふ	波多野寿子
曼珠沙華とときには魔女の風車	服部みどり
長廊下踵にやさし夜の秋	星野和葉
路の藪かな女秋子も摘みに来よ	茂木和子
柿の木が何を拗ねてか片芽吹	森 千代子
禅寺の全山包む花吹雪	矢作水尾
一燈は切なき人へ送り盆	山中順子
下町の闇の軽さや恋の猫	山中みどり
無言なるピエロ饒舌花吹雪	由良ゆら女
薄水やちちはは遠くとほくなり	吉住光弥

# 水明例会

## 第一例会（浦和）

気がつけば何時もの男朝ぐもり  
 帆船ながら白蝶運ぶ蟻の列  
 裏木戸開く音につと立つ朝曇  
 罪人のやうにひつそり夏マスク  
 マンションのトルコ石めく朝曇  
 金雀枝は嬉し泣きよな花散らす  
 半睡の街の閑けさ朝曇  
 このくにの米を炊きをる朝曇

境 延昭  
 木 和子 報

節代 節代  
 治子 治子  
 はるみ 光子  
 理恵 由紀子  
 山中順子  
 以上特選

## 第二例会（東京本所）

ウイルス禍か地球を春を忘れしごと  
 少女期のはぢらひに似て君影草  
 朝曇り舗装のタイル落着きて  
 夏の蝶さながらに舞ふフラメンコ  
 朝曇釣り師しつかり腰を据え  
 薄墨に色取られたる夏の月  
 朝ぐもり鳥は鳴きつつ西空へ  
 朝曇心のパズル解けぬまま  
 乳搾れば仔山羊ひた啼く朝曇  
 朝ぐもり田野つらぬくハイウエイ  
 国宝の三猿の訓今年竹  
 早起きの姉さん被り朝曇

光 治子  
 光 治子  
 大場順子  
 和葉子  
 はるみ  
 光子  
 理恵  
 由紀子  
 チアキ子  
 山中順子  
 和子

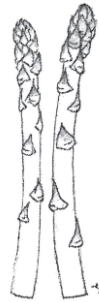
山中みどり  
 太田 絹映 報

父の日やブルーインパルスの空広し  
 父の日や椅子の底には購入日  
 父の日や座りの悪いマグカップ  
 以上特選

## 第三例会（東京）

青芝や座してハモニカ吹く老爺  
 父の日や気付かぬふりの父と居て  
 明易し充実の朝型移行  
 里山に一本すいと花水木  
 きぬぎぬの熱きコーヒー明早し  
 父の日や孫からラインメッセージ  
 短夜や雀小窓に声放つ  
 明易し雀食堂早も客  
 画面越しグラス差し上げ明易し  
 意のままにならぬ齢や明易し  
 新しい枕の香明易し  
 父の日よ村に父のみ大学出  
 藍色の夢の続きや明易し  
 短夜の堂堂巡りの憂ひごと

五明 曲淵  
 陽子 陽子  
 敏江 敏江  
 寿恵 寿恵  
 鶴城 鶴城  
 玲子 玲子  
 昌弘 昌弘  
 淑江 淑江  
 峰雄 峰雄  
 登志子 登志子  
 禮子 禮子  
 みどり 絹映  
 昇報 絹映  
 康世 康世





新緑の色のこぼるる水の底  
夏服の風の軽さを着流せり  
万緑に吸ひ込まれゆく古道かな  
やはらかに重ぬる齡水羊羹  
過ぎし日よ水羊羹の匙の上

水を押し水引き寄せて代を搔く

沈黙に水羊羹が乾きゆく

夕されば青田の水が力抜く

下町のせめぐりして水羊かん

心打つ書を詠み終へて水羊羹

水やうかん妻嫋嫋と夜の厨

海知らぬ子の口遊ぶ海酸漿

ぶるりと照りやはらかき水羊羹

少女らに羽化のきざしや更衣

使ひして戻り来し児に水羊羹

梅雨に入る気根赤らむ落羽松

さきたまの稔り関する麦嵐

祥 繪

清

雅 夫

昇

以上特選

清

理 恵

由 美

康 世

萬 蝶

喜 久

岡野順子

大場順子

雅 夫

徹 雄

昇

釣堀に胸の悶へを置きにくる

釣堀や釣りし雷魚を持て余す

花著我の刺繡のごとき花びらよ

釣堀や虹鱒にじを宙に抽き

淑やかに群れて音無き著我の花

夕づきて静もる古刹著我の花

釣堀や目深にかぶる野球帽

尼頭巾の白きを濡らす著我の雨

胡蝶花や登山禁止と道標

里宮に点る猷灯著我の雨

山懐へとどく波音著我の花

釣堀のゆるき時間を貰ひけり

釣堀や孤影と浮子の睨めつこ

枝葉縫ひ届く木漏れ日著我の花

釣堀や外濠囲むハイウエイ

瀬の音の登り来る道著我の花

咲く為の陽を引き寄せて著我あかり

釣堀の光りの鈍き水面かな

延 昭

寛 治

翔 太

光 弥

以上特選

曆 文

玲 子

恵 子

順 子

でん治

昇

延 昭

光 子

修

寛 治

翔 太

マスマ

光 弥

喜 恵

薫風にたちまち染まりゆく身体

まくなぎの道に入り日のやはらかし

めまとひを抜けて逢ひたき人にあふ

風薫る踏めば応へて地の鼓動

薫風や水中翼船飛ぶやうに

水切りに遊ぶ少年風薫る

まくなぎに横丁一つ違へたり

今の幸過去去へ幸に風薫る

頁繰る考の句集や風薫る

以上特選

水 尾

美 佐 尾

義 子

はるみ

理 恵

佐 江

早苗報

ゆら女

和 子

早 苗

敦 子

玲 子

礼 子

洋 子

道 子

以上特選

第四例会 (浦和) 境 喜昭 延昭 石井 喜恵 報

第五例会 (浦和) 梅澤 佐江 河野はるみ 報

関西例会 (大阪) 森本 早苗 報

釣堀の釣れぬ時間の至福かな  
釣堀に肩並べゐて寡黙なり  
釣堀やみな赤銅の顔馴染  
作務僧の涼しき立居著我の花

曆 文  
玲 子  
順 子  
昇

薫風や燥ぐ木の精水の精  
まくなぎや「是より木曾路」馬籠宿  
まくなぎや鈴蘭燈をけぶらせて  
薫風や今朝研ぎ立ての和包丁

水 尾  
美 佐 尾  
義 子

紫陽花の谿におぼれて鯉呼吸  
梅天やうす墨に透く淀の景  
青嵐コロナさらつて去んでくれ  
エイアンも酔ひしれるかな月下美人

以上特選  
敦 子  
ゆら女  
洋 子  
智恵子

保護色の背より始まる雨蛙  
バンド組む八十路の四人星涼し  
申し分無き五月空広がれど  
山彦に山羊も一声夏六甲  
ギャロップの乗り手は少女青嵐  
短夜の月に名残りの始発バス  
寄進板に子の名大きく青嵐  
蜻蛉生るゆるりととばす翅の色  
夏の蝶貴女守ると纏ひつく

早苗 玲子 千津子 和子 道子 千枝子 千世子 さわゑ

地球儀の軸の傾き夏至ゆふべ  
テノールに聴き惚れてゐる夏至の夜  
夏至の夜邪悪な奴と飲み明かす  
真夜中に小屋の床鳴る夏至の山  
夏至夕べ自転車に子と牛乳と  
口中のレバーもたつく夏至の昼  
夏至の日や太陽コロナ見しといふ

慶子 佐江 月を 鶴城 千春 萬蝶 ひろこ

若松句会 (京橋)

菊池ひろこ  
石田 慶子 報

秒針の音せつかに夏至の夜  
夏至の夕未完のままの砂の城  
空堀にふと水匂ふ夏至夕べ  
夏至の夜の涛声にこりゆく旅寝  
昼酒を嗜んでゐる夏至ゆふべ  
戯曲のごと天窓かざる夏至の月  
夏至の夜の夢はそのまま影絵劇  
コロナ燃え世は騒然と夏至来る  
夏至の日の話し上手と聞き上手  
夏至近し地球の揺れのしきりなり  
雨上り緑くつきり夏至の山  
夕暮はスローモーション夏至来る  
空豆は上息子横向く反抗期

千春 萬蝶 月を 倭子 ひろこ  
以上特選  
俊晴 倭子 はるみ 儀勝 理恵 知子

水明発行所受付時間

曜日：(月・水・金)

(火・木・土・日・祭日は休み)

時間：午後1時から午後5時

通信指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、  
通信指導を実施しています。希望者  
は、左記により作品を送って下さい。

主宰 山本鬼之介

記

〔指導者〕境 延昭

〔作品〕七句 「受講料」千円

〔方法〕①用紙自由②住所・氏名・

電話番号を明記③84円切手同封

④返信用封筒は不要⑤締切は随時

〔送付先〕境 延昭

〒三三七―〇〇四―さいたま市

見沼区南中丸一―一―四一

電話 〇四八―六八六―二二八―

各地句会



夏の雲俳句に向ふ直心  
 サッカーの地鳴りごーつと夏の宵  
 真つ直ぐな利根の大橋夏の朝  
 葵祭の烏帽子・直垂・牛車ゆく

忠男 幸代 美子 かつ子

女の葉ふと思ひつつ紫蘇を揉む  
 青紫蘇の空に飛び立つ気配かな  
 夕日なか籠に赤紫蘇溢れをり  
 芯強き妻の手仕事紫蘇を揉む

史代 由美子 玲子 千春

水明熊谷句会 (熊谷)

青梅や過不足なしの厨妻  
 珈琲とシヨパンの一日梅雨の家  
 ゆるやかに固まるゼリー梅雨兆す  
 梅雨の夜に臥して思ふは箱枕  
 青梅を枿に大盛り物産店  
 罪深き女の恋は梅雨湿り  
 梅雨入かな雲疾き日の朝の月

燈女 佐江 喜恵 チアキ むら子 輝翠 かつ子

山門をくぐりて見たし合歡の花  
 釣堀や女子も若子も釣り天狗  
 夏の波見え隠れする沖の船  
 見はるかす嶺の息吹のすいで夏  
 梅雨寒や分散登校見える窓  
 見返すは消せないメール四葩咲く  
 大西日富士を見下ろす劬斗雲  
 釣堀の岩魚で祝ふ友の古希  
 蓮見舟今咲く命耳すまます

和子 秀子 燈女 裕子 治江

新樹の会 (浦和)

走り梅雨百日ぶりの三の宮  
 一雨を欲る紫陽花の吐息かな  
 老鶯の檜舞台や谷渡り  
 黒雨風や磯波しぶく須磨の浦

早苗 礼子 千津子 玲子

掌たなをくすくすぐり歩む蝸牛  
 静やかにゆくで虫や葉の宇宙  
 亀の子や仲間押し分け甲羅干  
 かたつむりこより湧きてこに消ゆ

紅花 韶子 清吉

椋林句会 (大宮)  
 裏山を我がものがほに郭公  
 橋いくつ橋にも個性セーヌ初夏  
 春寒し庭師にしかと命綱  
 薔薇大輪力みなぎる其の根かな  
 俳句の手ほどき (岩槻)

光子 一恵 知子 美佐尾

神戸大池句会 (神戸)

早苗 礼子 千津子 玲子

新樹の会 (浦和)

紅花 韶子 清吉

負け組にも明日があるさ夏の空  
 直会の七校寮歌梅雨夕焼  
 夜盗虫二死満塁の投手かな  
 ネットタイを玻璃で直して薔薇を買ふ  
 雲海に浮く縦走路明けの星  
 万緑や一点に沸く草野球  
 愚直てふ生き方もあり心太  
 直角に続く街並京夕焼  
 喧騒の子らのプールにピストル音  
 矢を番ふ少年の馬手青葉風

順子 延昭 ます美 水尾 徹平 義子 佐江 美佐尾 慶子 翔太

ミモザの会 (横浜)  
 あをあをと大葉さしみのつまとなる  
 紫蘇の葉のひつそり主張かくあらむ  
 紫蘇二枚夫のこだはりオムライス  
 父見舞ふ背戸に叢がる茗荷の子  
 鎌倉の外れに棲みて紫蘇を揉む

弥弥子 栄子 慶子 知子 萬蝶

梅雨寒や羽織姿の石畳  
 紫陽花に誘はれて行く九段坂  
 紫陽花の花占ひを雨の午後  
 紫陽花を管めれば折りて呉れる人  
 紫陽花や若い二人は傘のなか

史代 由美子 玲子 千春

水明大阪俳句会 (守口)

葉隠れにはにかむ少女梅実る  
コロナ禍に家籠りして新茶波む  
Tシャツのステッチ二本夏に入る  
涼風に花簪のひと揺れし  
遠会釈交し誰れかや梅雨に入る  
風薫る淀の河原の音楽会

りそな俳句会 (浦和)

荒梅雨や琵琶弾く僧の撥さばき  
ゆつくりと孟母三遷蝸牛  
驟雨来て「ジンケリー」のタップかな  
雨の日や浮き足立つる蝸牛  
ブロッタ塀に銀の行跡蝸牛  
梅雨さても天はわれらに手をのべず  
本当は晴の日が好きかたつむり  
猷香の重きゆらぎや走り梅雨

芽吹句会 (浦和)

編隊飛行五月の空を八の字に  
サキソフォンのオプジェに踊る大噴水  
噴水と体内時計通ひ合ふ  
噴水や微妙に揺るる恋心ころ  
つらつら視れば双子ばかりよさくらんば  
単調な噴水の音鬱な午後

ゆら女 洋子 智恵子 人美 敦子  
千重子 玲子 ひろこ 富子 チアキ 道を

けやきの会 (東京)

浜木綿や砂丘に砂紋増ゆる頃  
夏落葉隣家の大樹広ごりぬ  
花ざくろのお吉の町海鼠壁  
野ばらの会 (浦和)

芙蓉句会 (浦和)

木洩れ日の池を水馬音たてず  
時の日や呼べば答へる猫とをり  
あめんばも上州育ちビオトープ  
時の記念日耳に弾みし花鉢  
時の日や宿は素泊りひとり旅  
時の日や緩き歩巾や句帖手に  
知恵の輪のやつと解けてみづすまし

大宮読売俳句教室 (大宮)

尾瀬の小屋立ち去り難し燕の子  
初夏や発車ベル退く小海線  
さざ波がワルツのやうな初夏の海

祥綏 由美 康世 和子 栄子 秀子 茂子 夏江 治江 正子 道子 税子 美子 仁子 正信 翔太

円卓の会 (浦和)

夏はじめ鉢も笑顔の庭いじり  
斎王の牛車の列や初夏の賀茂  
夏始めホースの水は泡弾き  
子燕の口みな顔をほみ出せり  
初夏の田のみどり日毎に遅しく  
初夏の山堪能すログハウス  
水槽の小石を磨く夏初め  
白雲のさやさや浮かぶ沼の首夏  
子燕の明かり点すや車庫の奥  
初夏の白き卓布に触るる膝

コクーン・テイカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)

明易し読み止しばかりの本の高  
沖つ風闇夜を焦す烏賊釣船  
明易し添寝の犬に起こさるる  
卯の花腐し夫の背にはる湿布薬  
函館や夜景の中の烏賊釣火  
明易し日の出連れ来る鳥のこゑ  
ぶぶ漬や宇治の新茶の役どころ

右利きの夫婦でありぬカタツムリ

精霊や翡翠空へ青残し  
山黒し川に遠音の河鹿笛  
真清水を水筒に入れ剣が峰  
小次郎が怖し巢立ちの夏燕

弘子 紀子 卓郎 君夫 典子 治子 寛治 徹雄 利子 順子 延昭 美枝子 俊晴 俱子 淑子 正信 昇 月香 静香 道香 翔太 鶴城

たかなな俳句会 (川口)

咲ききりし紫陽花の色胸に沁み

香を聞き恩師しのぶや濃あぢさゐ

竹垣の結び目新た濃紫陽花

紫陽花が光をはじく朝ぼらけ

白南風や下駄の運びと裾さばき

汐の香や四葩咲く坂帰り道

雨四葩咲けば重なる思ひかな

美容室の鏡の中の七変化

花衣の会 (浦和)

走り根の絡む山道遠郭公

帽子脱ぎ髪にも受くる青嵐

あかつきにかつこ郭公とこだまして

森の奥ひびく声あり閑古鳥

木曾路には郭公の声似合ひけり

踊り出す舳の船や青嵐

珊瑚の会 (浦和)

湖衣姫の哀しき伝へ根無草

りモートのなぞなぞ遊び明け易し

先づ手足揉みつ身支度明け易し

水に生れ水にしたがふ根なし草

短夜の夢の終りの曖昧に

萍の髪根をつつく雑魚の群

萍が池を斜めに独り占め  
短夜の宿坊にゐて雑魚寝かな

投げ返すボールに湿り根無草

水面との国盗り合戦根無草

縄を解くや港は明け易し

短夜の指の先まで仮寝中

きざきサークル (浦和)

水を蹴りエール送りし蜻蛉かな

水車小屋お羽黒とんぼ翅四枚

山峡の川が遊びばとんぼ群れ

的しほり草矢を打ちて野に遊ぶ

巢ごもりに倦みし父と子草矢射る

聡太君初王位戦に射つ草矢

雲に名を悟空とつけし草矢の子

鶴川山百合句会 (鶴川)

豆ごはん羽釜の湯気の踊りをり

胸ポタン一つ外して初夏の風

我が家では男の仕事豆ごはん

存へてコロナの巷豆の飯

少年にブルーの恋や初夏の浜

会席の締め薄味の豆の飯

裏山の一本一草夏兆す

豆飯のよけて搔つ込む次男坊

豆ご飯じょうずに使ふ嫉妬

和子  
史代  
光子  
恵子  
昇

千春

父の日や先づは老舗の六方焼

初花

京子

和子

父の日や反抗癖は親ゆづり

和風

みよ

俱子

父の日ややはり親爺は野良に居し

白鷺

みち

かつ子

八頭身は昭和のことは立葵

保人

章嘉

廉三

立葵若き極を見送りぬ

和風

治

雄二郎

父の日や優しい母の陰日向

寛久

峯雄

喜久

父の日や渾名はたしか鬼瓦

郁子

京子

史代

父の日や今にして沁む愛の鞭

想子

京子

知子

父の日や今にして沁む愛の鞭

想子

京子

由美子

父の日や今にして沁む愛の鞭

想子

京子

千春

父の日や今にして沁む愛の鞭

想子

光が丘俳句教室 (東京)

子蟻螂鎌の構へのまだ甘く  
コロナの禍一気に飲まむ缶ビール  
桜桃忌今日より八十路どんな路  
穫れたてをえいつとばかり豆御飯  
季語でないマスクを作る青嵐

守伊 是子 史子 理恵

蝌蚪の会 (浦和)

喜雨仰ぐシャーマンとなる大蛙  
長靴の石ころ痛し喜雨の街  
光さす屋根裏に蛇衣を脱ぐ  
白蛇の衣は光りてありがたし  
蛙に佇ち見渡す農夫喜雨の中  
蛇の衣二枚目の二枚舌  
初歩き初の躓き喜雨の朝

礼子 元美 るみ子 さち子 宣子 月を 鶴城

阜月の会 (浦和)

梅雨晴や通船堀の橋乾く  
身の丈の岩から跳びて夏の川  
絵馬札に願をかけて新緑を  
小悪魔の素足まぶしき夏の川  
さのふけふあした咲きます五月晴

静香 孝磨 久子 暦文 さいち

柿の木塾 (浦和)

遠泳や舟の太鼓に声そろへ

俊晴

コロナ怖し土偶の顔のたくましく  
性別は聞かずともよし蛇毒  
関所跡も素通り御免青嵐  
見得を切る子供見守る夏の蝶  
寺守の今日は弁立つ夏鶯  
家中に百合の香満たし鎮魂歌  
夕端居この世の椅子に浅く掛け  
くちなしの花の一日は清らかに

恵子 かつ子 昇代 和葉 水尾 清和

山茶花 (浦和)

老鶯の一声湖面を走りゆく  
噛み合はぬりモート映像冷さうめん  
杉箸をパリッと割りて冷し麦  
山陰の繁み老鶯声たかく  
老鶯やつひに再開太極拳  
赤城山に老鶯の声淋しくて  
家籠り今日で百日夏鶯

光子 泰子 マスミ しず子 清一 美江子 綾子

青葉の会 (浦和)

雷や頂上見切る赤城山  
緑蔭に際立つ君の白りボン  
乳母車緑蔭に来て一休み  
緑蔭や歌ふアカペラ恋の唄  
盟の中の鰻のうねり精気満つ  
鰻屋の暖簾くぐりしランチ時  
頭上飛ぶ物干し竿の雨蛙

美智枝 真理 美子 啓子 公子 洋子 輝翠

櫟の会 (浦和)

梅雨晴間大き伸びして深呼吸  
飛び出してプラネタリウム梅雨晴間  
蔓はぐし昼顔どれに活けようか  
江の電や左に鈍く梅雨の海  
売地の隅昼顔小さきラッパ咲く  
昼顔が廃屋の庭明るくし  
昼顔やマスク同士の初対面

克子 朋子 富子 彰二 千重子 裕之 治子

和歌山水明句会 (和歌山)

梅雨滂沱やはらかくなる煉瓦塀  
海落暉見るための席夏料理  
碑に中将姫の秘話濃紫陽花  
白百合や中止の多きカレンダー  
顔面よりすつてんころり濃紫陽花  
夏すずめ大きな飯をくちばしに  
あぢさゐる寺苑のどこかで手鞠唄  
紫陽花は移り気なのか手品師か  
力抜く仁王の拳ほうたる来い

和子 道子 千枝子 千世子 満耶子 きわゑ 美恵子 洋子 旭代

水明松本句会 (松本)

片耳にマスクぶら下げ汗の子  
みづみづと細工のやうな柿若葉  
梅雨晴れや3回まはす洗濯機  
紫陽花にやさしくころがる雨シャワー  
津軽三味線ひびく楽器屋梅雨荒し

恒子 陽子 マリス 玲子 寿子

風 声

○現代俳句六月号―「現代俳句の風」欄

切り岸に流れは砕け河鹿笛

ビー玉の中に天と地青嵐

桁着丈余りし母の浴衣かな

枇杷啜る種つやつやとところろと

出港にくばるシヤンパン風薫る

○現代俳句七月号―「列島春秋」地区別現代俳句歳時記欄

今朝のこと明日からのこと冷奴

○現代俳句七月号―「第五十七回現代俳句全国大会選者詠」欄

マネキンを目白へ運び冬霞

○現代俳句七月号―「現代俳句の風」欄

自動捲きの止つてしまふ春眠忌

時の日の時計気になり見て廻る

垂るるほど百合の花咲く屋敷跡

白百合を抱へて君の誕生日

日盛やシャッター街の郷土展

黒南風や五島の男は寡黙なり

夏の月いつも孤独な天守閣

炎ゆる夜や一つにならぬ身と心

○天穹（屋内修一主宰）五月号―「主宰句紹介」欄

火蛾となり突つ込む利那お母さん

○天塚（宮谷昌代主宰）―「珠玉一句」欄

（五月号） 琴爪やいつのまにやら春の雪

大塚 茂子

越田 栄子

野平美紗子

丸山マスマ

田寺 玲子

星野 和葉

網野 月を

鬼之介

岡野 順子

河原 叔子

梅澤 輝翠

近藤 徹平

永野 史代

町野 広子

宮崎チアキ

由良ゆら女

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

（七月号） 山藤がいま満開の駐在所

○好日（高橋健文主宰）六月号―「受贈誌御礼」欄

薄氷を八咫鏡に屋敷神

○くぢら（中尾公彦主宰）「受贈俳誌美術館」欄

（六月号） 出窓より藤に語らふ夜想曲

（七月号） 赤心に微かなくもり黒ビール

○新月（松田碧霞主宰）六月号―「現代俳句鑑賞」欄

州浜ゆき氏による主宰句の鑑賞

薄氷を八咫鏡に屋敷神

内弟子の伏し目の応へ春の雷

同―「受贈俳誌紹介」欄

（六月号） 薄氷を八咫鏡に屋敷神

（七月号） 目礼の様になるひと藤の苑

○太陽（柴田南海子主宰）―「一誌一耀」欄

（六月号） 鉄火肌蛇の目にかくし春時雨

（七月号） 出窓より藤に語らふ夜想曲

○菜の花（伊藤政美主宰）―「諸家近詠」欄

（六月号） 拙宅にいま妙齡の枝垂梅

（七月号） 山藤がいま満開の駐在所

○鳩の子（柴田多鶴子主宰）六・七月号―「珠玉の一句」欄

うららかや平均台の脚線美

○わおん（野本希容資主宰）六月号―「十七音の交響楽」欄

鉄火肌蛇の目にかくし春時雨

○筈（山本一步主宰）七月号―「受贈誌の一句」欄

古木にも古木の力梅咲けり

受験子は双子弟よく笑ふ

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

越田 栄子

正木 萬蝶

（日高道を抄出）

## 後記

本来ならば90周年の大会も六月に終りこの夏はゆつくりと過ごせる予定であったが、突然のコロナで全部狂ってしまった。七月も自粛が解けて句会もゆつくりと出来ると思っていたが、第二波なのか又感染が多くなり、GOTOトラベルもあやふやな事になってしまった。喉もと過ぎればなにか若い人達は自由に遊んでいるが、秋になり冬のインフルエンザが心配になる。十一月の90周年全国大会が無事に終る事を祈る。

私の家の池にあめんぼが何故か増えて滑走している。今までにない状態である。朝早く居なくなり、明るくなるのでここから出て来る羽があるのと飛んでくるらしい。自己中心の性格なのか進むが後退はしない。ぶつかるとぶいと横に飛び方向を変える。コロナ自粛の外出不許可の一日の楽しみである。秋の水明行事には心してご参加頂けるよう願います。(順子)

今年の夏は、コロナウィルスの影響で不要不急の外出は避ける事に加えて異常な気温の上昇で、家籠りの生活を強いられている。かと云って作句に専念出来る訳でもなし、断捨離に励むわけでもなく何となく一日を無駄に過している情けない自分に気がしている。そんなある日の夕方胡蝶蘭の一株からピンク色の花が咲いたのだ。びつくりもしたが、一瞬嬉しさと幸せ感が走った。乾き切った空気の中一服の清涼剤となった。

昨年の全国大会の折に「お祝」として頂いた胡蝶蘭の花、咲き終えたものを私が貰い受けた。そして、株分けをして水のやり方、肥料のやり方等、園芸店で見聞きしながら九ヶ月丹精こめて育てた。よくぞ咲いてくれたと喜びの方が大きかった。全部で三株に分けたなかの一株、他の二株も活き活きしているの期待している。丹精とはまごころを込めて物事をする事。俳句に於いても然り。心して作句するべし。(和子)

創刊九〇周年記念八、九月合併号をお届けする。一口に九〇年と言うのが考えると長い。五代目主宰まで途切れる事なく長く続いたものである。代々の主宰と会員の皆様の協力の賜と思う。

コロナウィルスが収束するどころか、感染者が増え続けている。七月は雨が続き、八月に入りやつと梅雨が明けたと思ったら猛暑。そして今度は熱中症となかなか大変な世である。

先ず、表紙は創刊号の表紙をそのままこの記念号の表紙とさせて頂いた。千号記念(平成二五年)の時とは又違った感じとなった。かな女の一句鑑賞、特別エッセイなどご執筆下さった方々には、深く感謝申し上げます。記念特別作品募集には多数のご応募を頂きながら、正賞、準賞のみの掲載で申し分けない。

年譜は、創刊時から載せたので水明の流れが分かり楽しんで頂けると思う。(和葉)

## 水明

令和二年八・九月号  
通巻一〇七九・八〇号  
令和二年九月一日発行

発行人 山 本 鬼 之 介

〒330-0073 さいたま市浦和区元町一七二-八  
電話 048-1886-1600三

発行所 水 明 俳 句 会

〒330-0064 さいたま市浦和区摩訶四一〇二二  
電話 048-1822-1474一

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円  
同人費(誌代を含む)  
一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)  
一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇〇〇一五三三九三

印刷所 中 央 美 版



# 「水明創刊90周年記念」全国大会

申込書 〈申込締切 10月26日(月)〉

◆記念全国大会 11月9日(月) 会費 6,000円

◆宿泊斡旋 シングル ツイン ※どちらかに○を付けてください。  
※宿泊費は、ホテルで個人清算です。

◆申込方法 (下記①または②のどちらかに○を付けてください。)

- ① 申し込みされていない方 (6,000円を添えて申し込んでください)
- ② 申し込みされている方 (差額返還方法を選び○を付けてください)
  - ① 発行所で引き取る (引き取り希望日を連絡願います)
  - ② 指定の金融機関口座に振込み希望

◆申込書 送付先: 〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21  
水明俳句会

令和2年 月 日

住所	〒		
氏名		電話	
参加費納入方法	現金	振込	
◎以前申し込みされていて、差額返還方法の②を選ばれた方は、振込先金融機関名・口座名・口座番号・名義人名を明記してください。→			
[金融機関名]			
[口座名]			
[口座番号]			
[名義人名]			



きりとりせん

# 水 明 通 信

	都市又は府県名
	姓並びに俳名

通信欄 (近況・感想など) 自由にお書き下さい


送り先 〒三三〇・〇〇六四 さいたま市浦和区岸町四十一番二  
水明発行所

**新誌友紹介** 下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒 -		
氏名		電話番号	- -



# 季音抄

山本 鬼之介

光琳の水輪が欲しき花菖蒲  
噴水と体内時計通ひ合ふ  
霊山へ片帆の揃ふ水芭蕉  
ハミングは昭和の調べ青田風  
大寺の畳の数や梅雨に入る  
寝返りを左右にうちて夜の雷  
ギヤロップの乗り手は少女青嵐  
六甲連山匿ふ氣迫夏の霧  
裏木戸開く音につと立つ朝曇  
初夏の濠は群青江戸古地囃  
調理場の板の掛声夏つばめ  
献香の重きゆらぎや走り梅雨  
まくなぎの道に入り日のやはらかし  
十葉や立ち返りくる失意の日  
大西日富士を見下ろす舳斗雲  
水貝に潮の遠鳴り絡みあふ  
遠泳や舟の太鼓に声そろへ  
さくららんぼ箱に輝き歌があり

栢尾さく子  
菊池ひろこ  
五明 昇  
境 延昭  
椎野美代子  
島津 初花  
十倉 和子  
森本 早苗  
柚木 治子  
高島 寛治  
松本 光子  
丸山マスマ  
梅澤 佐江  
松井由紀子  
近藤 徹平  
上戸千津子  
井口 俊晴  
中野 彊

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

## ▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内

(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

## ▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内

(題をつけて)

## ▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

# 水 明 抄

山 本 鬼 之 介

松明に浮かぶ童女の白重  
 蒼天を飛ぶ夢果てぬつばめ魚  
 豆飯や息吐くやうに箸を置く  
 素裕のぶらりと歩く花川戸  
 授乳のやうに陽光注ぐ青田かな  
 火蛾遊ぶ昭和の匂ふこの辺り  
 仰がるる殿様となれ蛙の子  
 若き日の恋の結末ソーダ水  
 夕映えの野点の袖に散る桜  
 春風や境界線のなき野原  
 荷風忌や夕陽眩しき古書の街  
 菖蒲湯の菖蒲刈る鎌研ぐ朝  
 ボレロ高まりレモンソーダの泡躍る  
 能登瓦光る城下に五月来ぬ  
 水面往き交ふ赤き手甲の御田植よ  
 群れてなほ一人静のひそやかに  
 走り根を越えて一途に蟻の列  
 骨切りの音のリズムや夏さざす

日高 道を  
 野田 静香  
 山口 韶子  
 染谷 正信  
 西幅 公子  
 曲淵 徹雄  
 青木 鶴城  
 越田 栄子  
 保坂 翔太  
 新井 孝磨  
 檜鼻ことは  
 加藤でん治  
 原田 秀子  
 渋谷きいち  
 秋山 紅花  
 横山 君夫  
 神田 治江  
 新 暦文

	句 会 名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
水 明 例 会 案 内	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 太田絹映
	第三例会	第1月曜・午後1時	新宿区大久保 ルノール	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋勉代	森本早苗
	婦人句会	第3月曜・午後1時	水明発行所	山中順子	西山貴美子
	若松句会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	菊池ひろこ 石田慶子

水 明

令和二年九月一日発行 毎月一日発行

(第九十三巻 第八・九号)

定価 二〇〇〇円